

# 市城塔本遺跡

社会資本総合整備（広域連携）（国道353号市城）  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

群馬県中之条土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 市城塔本遺跡

社会資本総合整備（広域連携）（国道353号市城）  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

群馬県中之条土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

本県吾妻郡内を走る国道353号は、沿線住民の生活道として、また、吾妻郡内の温泉地・景勝地への観光アクセス道として重要な幹線であります。この国道の断続的な渋滞を緩和し安全性のさらなる向上を目的として、幅員を広げてカーブを少なくする線形改良工事が計画されました。本報告の市城塔本遺跡は、この改良工事に伴い平成25年度に二次にわたり発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡の一部や稀少な弥生時代の遺物出土などの発見がありました。これらの資料は、これまで発掘調査事例が少なかった地域の歴史解明に役立つものと思われます。多くの方にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、県土整備部道路整備課、中之条土木事務所、群馬県教育委員会、中之条町教育委員会、並びに地元関係者の皆様には、多大なご協力を賜りました。ここに心から感謝を申し上げ、刊行の序といたします。

平成27年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 吉野 勉



# 例 言

- 1 本書は、社会資本総合整備(広域連携)(国道353号市城)に伴う埋蔵文化財発掘調査、市城塔本(いちしろとうもと)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 市城塔本遺跡は、群馬県吾妻郡中之条町大字市城字塔本769-1 他に所在する。
- 3 本遺跡の市町村遺跡番号は、No.0077である。
- 4 事業主体は、群馬県中之条土木事務所である。
- 5 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 6 発掘調査期間、対象地、および調査担当者は、次のとおりである。

【第一次調査】 平成25年度 社会資本総合整備(市街地整備)事業(国道353号市城)  
調査期間：平成25年9月1日～平成25年9月30日  
調査対象：1区 342.26㎡  
調査担当：主任調査研究員 宮下 寛  
遺跡掘削工事請負：吉澤建設株式会社 地上測量委託：株式会社 測 研

【第二次調査】 平成25年度社会資本総合整備(市街地整備)事業(国道353号市城2号)  
調査期間：平成26年2月1日～平成26年2月28日  
調査対象：2・3区 838.10㎡  
調査担当：主任調査研究員 藤井義徳  
遺跡掘削工事請負：吉澤建設株式会社 地上測量委託：株式会社 測 研
- 7 整理事業は次のとおりである。

事業名称：平成26年度社会資本総合整備(広域連携)(国道353号市城)に伴う埋蔵文化財の整理  
履行期間：平成26年9月1日～平成27年2月28日  
整理期間：平成26年10月1日～平成26年12月31日  
整理担当：上席専門員 新倉明彦
- 8 本書作成の体制は次のとおりである。

編集および本文執筆：新倉明彦  
デジタル編集：主任調査研究員 齊田智彦  
遺物観察：主任調査研究員 石田典子(石器・石製品)、専門調査役 石坂 茂(縄文・弥生)  
上席専門員 徳江秀夫(土師器・須恵器)  
写真撮影：石田典子(石器・石製品)・石坂 茂(縄文・弥生)・新倉明彦(前記以外)  
保存処理：補佐(総括) 関 邦一
- 9 石材の鑑定は、群馬県地質研究会会員 飯島静男氏に依頼した。
- 10 発掘調査資料および出土品等は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
- 11 発掘調査から本書作成にいたる間、以下の機関にご指導・ご協力をいただいた。

群馬県教育委員会文化財保護課、中之条町教育委員会、地元自治会  
また、残暑・極寒のなかも発掘調査に従事いただいた作業員各位に感謝申し上げます。

# 凡 例

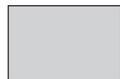
- 1 本文挿図の遺構実測図中にある+印は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)座標の位置を示し、その名称には座標のX値・Y値の下3桁を記し、図中の方位記号は、同座標第IX系の北位を示す。また、遺構実測図中の●印は出土遺物を示す。
- 2 遺構名称については、発掘調査当時の資料との整合性を保つため、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲し、やむを得ず変更したものについては( )内に旧称を記した。
- 3 遺構の主軸方位は、座標北を基準として、カマドを有する住居はカマドがある壁を軸上にその傾きを、それ以外の遺構は長軸の傾きをそれぞれ計測した。
- 4 遺構計測値で、全容が計測できない遺構については、( )で検出部の値を記した。
- 5 挿図の縮尺については、原則として以下のとおり掲載した。

〔遺構図〕 住居・溝＝1：60、土坑・ピット＝1：40、住居カマド＝1：30

〔遺物図〕 土器1：3・1：4、石器1：1・1：2・1：3

- 6 遺物観察表や土層注記文中の色調は、農林水産省技術会議監修、(財)日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1996年版の色名を使用した。
- 7 挿図中で使用したトーンは、次のとおりである。

〔遺構図〕



焼土



攪乱

〔遺物図〕



赤彩



炭素吸着



摩耗痕



摩耗痕の範囲(断面図)

- 8 遺物観察表での表現は、以下のとおりである。
  - ・遺物番号は、観察表・実測図・遺物写真共に一致する。
  - ・土器・土製品胎土の細砂粒と粗砂粒とは、直径2mmを境に区別した。
  - ・成・整形の特徴の項目にあるハケ目の本数は、1cmあたりの本数を示す。
  - ・土器計測位置の表現は、口径＝口、底径＝底、器高＝高と略記した。
  - ・遺物の計測値で、欠損品の場合は、( )で残存部の値を記した。
- 9 本書で使用した地形図・地勢図は、以下のとおりである。

国土地理院地勢図 1：200,000 「長野」・「宇都宮」 平成18年発行

国土地理院地形図 1：25,000 「中之条」・「上野中山」・「群馬原町」・「金井」 平成9年発行

国土地理院地形図 1：50,000 「中之条」 平成10年発行
- 10 本文・土層観察文中のテフラ略称については、第2章第2節基本土層の項を参照。

# 目 次

序

例言

凡例

## 第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過 ..... 1

## 第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法と経過 ..... 3

第2節 基本土層 ..... 4

## 第3章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境 ..... 5

第2節 歴史的環境 ..... 6

## 第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居 ..... 9

第2節 竪穴状遺構 ..... 21

第3節 溝 ..... 22

第4節 土坑 ..... 23

第5節 ピット ..... 24

第6節 遺物包含層・遺構外出土遺物 ..... 25

遺跡全体図(折込図) ..... 43

第5章 理化学分析 ..... 45

第6章 調査の成果 ..... 49

報告書抄録

写真図版

遺構写真

出土遺物写真

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図(1)・・・・・・・・・・・・・・・・	1	第19図	1区1号溝・2区2号溝遺構図・・・・・・・・	22
第2図	遺跡位置図(2)・・・・・・・・・・・・・・・・	2	第20図	1～4号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・	23
第3図	基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4	第21図	1～4号ピット遺構図・・・・・・・・・・・・・	24
第4図	遺跡位置図(3)・・・・・・・・・・・・・・・・	5	第22図	1区包含層平面図・・・・・・・・・・・・・	25
第5図	周辺の遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・	8	第23図	2区・3区包含層平面図・・・・・・・・・・・・・	26
第6図	1区1号住居遺構図・・・・・・・・・・・・・	9	第24図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(1)・・・・	27
第7図	1区1号住居カマド遺構図・出土遺物図・・	10	第25図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(2)・・・・	28
第8図	1区2号住居遺構図・・・・・・・・・・・・・	11	第26図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(3)・・・・	29
第9図	1区3号住居遺構図・・・・・・・・・・・・・	12	第27図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(4)・・・・	30
第10図	1区3号住居出土遺物図・・・・・・・・・・・・・	13	第28図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(5)・・・・	31
第11図	1区4号住居遺構図・・・・・・・・・・・・・	14	第29図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(6)・・・・	32
第12図	1区4号住居カマド遺構図・・・・・・・・・・・・・	15	第30図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(7)・・・・	33
第13図	1区4号住居出土遺物図・・・・・・・・・・・・・	16	第31図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(8)・・・・	34
第14図	1区5号住居遺構図・出土遺物図・・・・・・	17	第32図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(9)・・・・	35
第15図	1区6号住居遺構図・・・・・・・・・・・・・	18	第33図	遺物包含層・遺構外出土遺物図(10)・・・・	36
第16図	1区6号住居カマド遺構図・出土遺物図・・	19	第34図	市城塔本遺跡全体図・・・・・・・・・・・・・	43
第17図	1区住居位置図・・・・・・・・・・・・・	20	第35図	テフラ検出位置と土層柱状図・・・・・・・・	47
第18図	1区1号竪穴状遺構遺構図・出土遺物図・・	21			

## 表目次

第1表	1区1号住居出土遺物観察表・・・・・・・・	10	第8表	1区1号竪穴状遺構出土遺物観察表・・・・	21
第2表	1区3号住居出土遺物観察表・・・・・・・・	13	第9表	竪穴状遺構計測表・・・・・・・・・・・・・	21
第3表	1区4号住居出土遺物観察表・・・・・・・・	16	第10表	溝計測表・・・・・・・・・・・・・	22
第4表	1区5号住居出土遺物観察表・・・・・・・・	17	第11表	土坑計測表・・・・・・・・・・・・・	23
第5表	1区6号住居出土遺物観察表・・・・・・・・	19	第12表	ピット計測表・・・・・・・・・・・・・	24
第6表	住居計測表・・・・・・・・・・・・・	20	第13表	遺物包含層・遺構外出土遺物観察表・・・・	37
第7表	住居内ピット計測表・・・・・・・・・・・・・	20	第14表	市城塔本遺跡におけるテフラ検出分析結果	48

## 写真図版目次

PL. 1	調査区遠景 南より 調査区周辺 西より			1区5号住居カマド掘り方D-D'断面 西より 1区5号住居カマド掘り方全景 西より	
PL. 2	1区全景 北西上空より 2区全景 北西より		PL. 8	1区6号住居全景 西より 1区6号住居遺物出土状態 西より 1区6号住居貯蔵穴全景 西より 1区6号住居カマド全景 西より 1区6号住居カマド掘り方全景 西より	
PL. 3	3区全景 西より 基本土層1 南西より 基本土層2 南東より 基本土層3 南西より 基本土層4 西より		PL. 9	1区1号竪穴状遺構全景 北東より 1区1号溝全景 北東より 2区2号溝全景 南東より 1区1・2号土坑全景 北東より	
PL. 4	1区1号住居全景 北西より 1区1号住居カマド遺物出土状態 北西より 1区1号住居カマド掘り方全景 北西より 1区1号住居西側遺物出土状態 西より 1区1号住居周溝内遺物出土状態 北西より		PL.10	3区3号土坑全景 東より 3区4号土坑全景 東より 1区1号ピット全景 南西より 3区2号ピット全景 南西より 3区3号ピット全景 南より 3区4号ピット全景 東より 2区包含層全景 東より 3区包含層全景 西より	
PL. 5	1区2号住居全景 南西より 1区2号住居断面 南西より 1区3号住居遺物出土状態 南西より 1区3号住居全景 南より 1区3号住居南壁寄り遺物出土状態 南より 1区3号住居南東隅遺物出土状態 南より 1区3号住居南壁際遺物出土状態 南より 1区3号住居遺物出土状態 南より		PL.11	1区1・3・4・6号住居出土遺物	
PL. 6	1区4号住居全景 北西より 1区4号住居遺物出土状態 北西より 1区4号住居貯蔵穴全景 南より 1区4号住居カマド遺物出土状態 北西より 1区4号住居カマド掘り方全景 北西より		PL.12	遺物包含層・遺構外出土遺物(1)	
PL. 7	1区5号住居全景 西より 1区5号住居カマド全景 西より 1区5号住居カマド掘り方C-C'断面 南より		PL.13	遺物包含層・遺構外出土遺物(2)	
			PL.14	遺物包含層・遺構外出土遺物(3)	
			PL.15	遺物包含層・遺構外出土遺物(4)	
			PL.16	遺物包含層・遺構外出土遺物(5)	
			PL.17	遺物包含層・遺構外出土遺物(6)	
			PL.18	遺物包含層・遺構外出土遺物(7)	
			PL.19	遺物包含層・遺構外出土遺物(8)	
			PL.20	遺物包含層・遺構外出土遺物(9)	

# 第1章 調査に至る経過

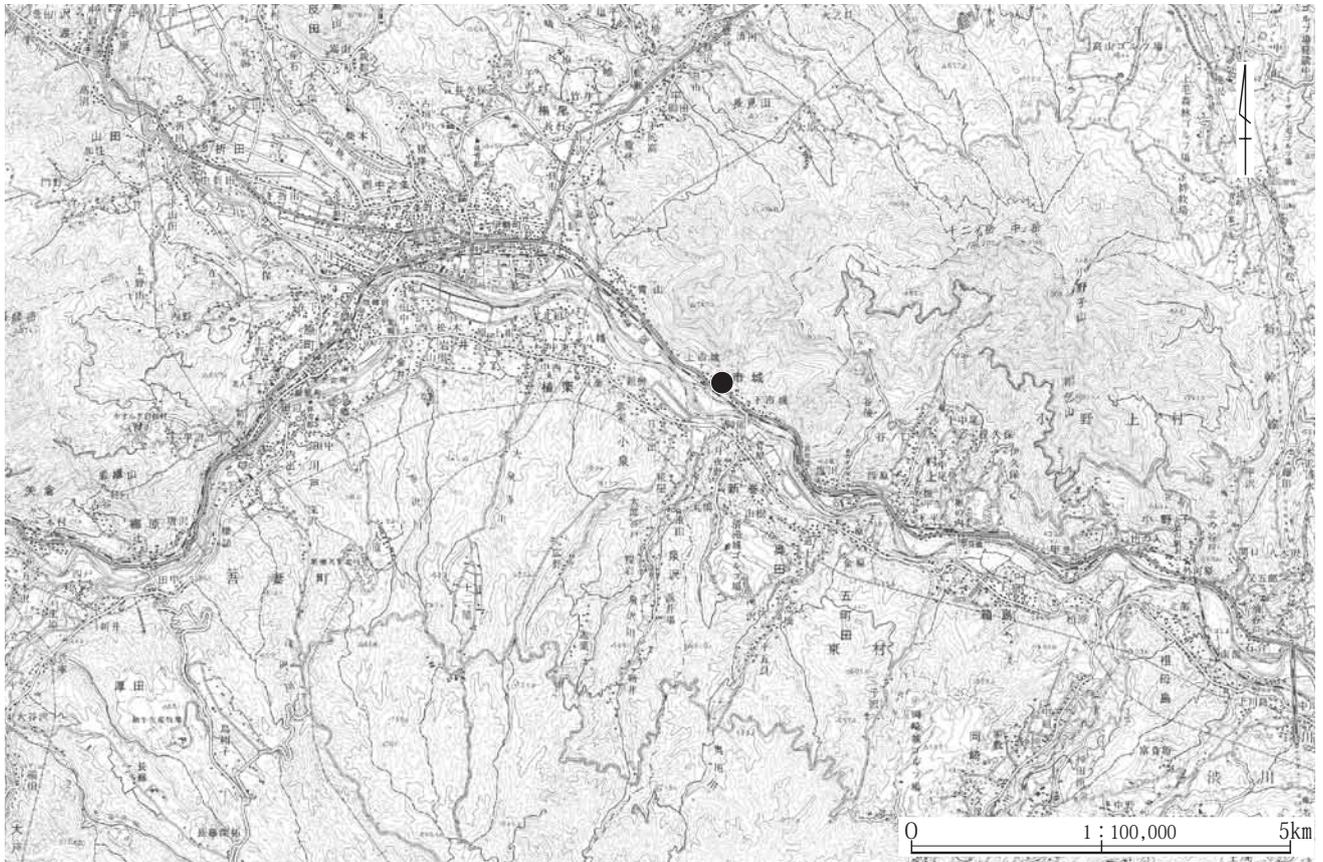
## 第1節 調査に至る経過

群馬県吾妻郡内を走る主要幹線道路として、国道353号・145号と主要地方道渋川東吾妻線がある。国道353号は、群馬県桐生市の国道50号との交点を起点に、新潟県柏崎市柳橋町の国道8号との交点に至る一般国道で、経路中の吾妻郡中之条町四万から新潟県南魚沼郡湯沢町三国との間が不通となっている。また、国道145号は、群馬県吾妻郡長野原町と沼田市を結ぶ一般国道である。これら幹線道路は、渋滞が断続的に発生することから、国道353号・145号(上信自動車道)バイパス事業が計画され、整備が進められつつある。これに併せて現国道353号も、道幅が狭く歩道もない上にカーブで見通しが悪い箇所の道路幅員を広げ、安全な通行を確保するために、線形の改良工事が施工されることとなった。

平成24年12月、群馬県教育委員会文化財保護課は、工事主体である群馬県中之条土木事務所からの照会を受

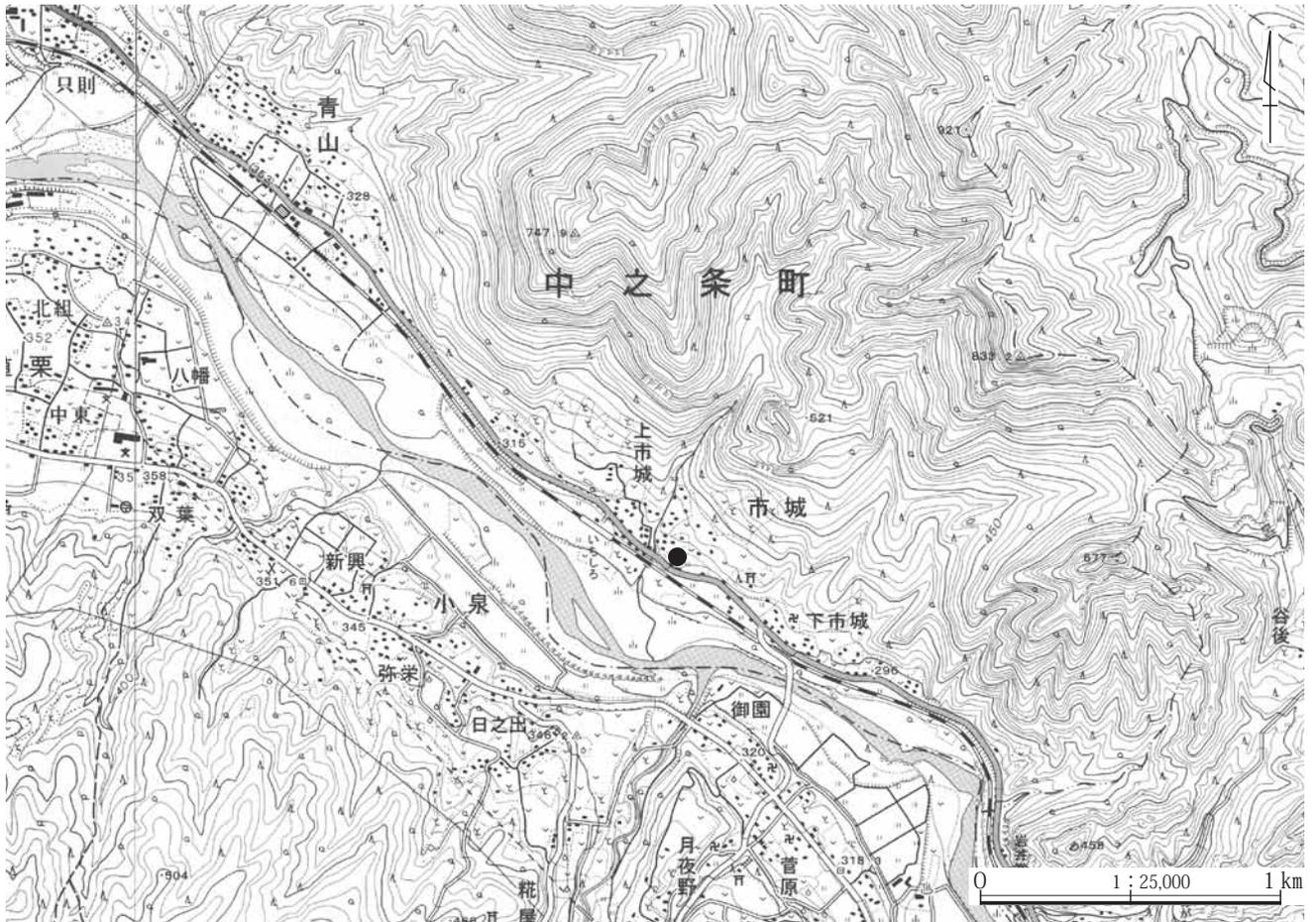
け、埋蔵文化財の取扱いにかかる行政的な処置として、発掘調査の必要性とその範囲を確定するための試掘調査を実施した。試掘調査の結果、2地点において遺構と遺物の存在が確認されたため、埋蔵文化財に対する保護の措置が必要である旨を中之条土木事務所あてに通知するとともに、取扱いについての協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は困難との判断から、記録保存のための緊急発掘調査の実施が決定された。

当該地点の発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課の調整のもとで、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、工事工程との関係から優先される市城公民館北側を第一次調査として、平成25年7月30日付けで中之条土木事務所との間で受託契約が締結された。残る区画の発掘調査については、第二次調査として工事工程と公民館の移転を待って2月からの調査を計画し、平成25年11月6日付けで受託契約が締結された。

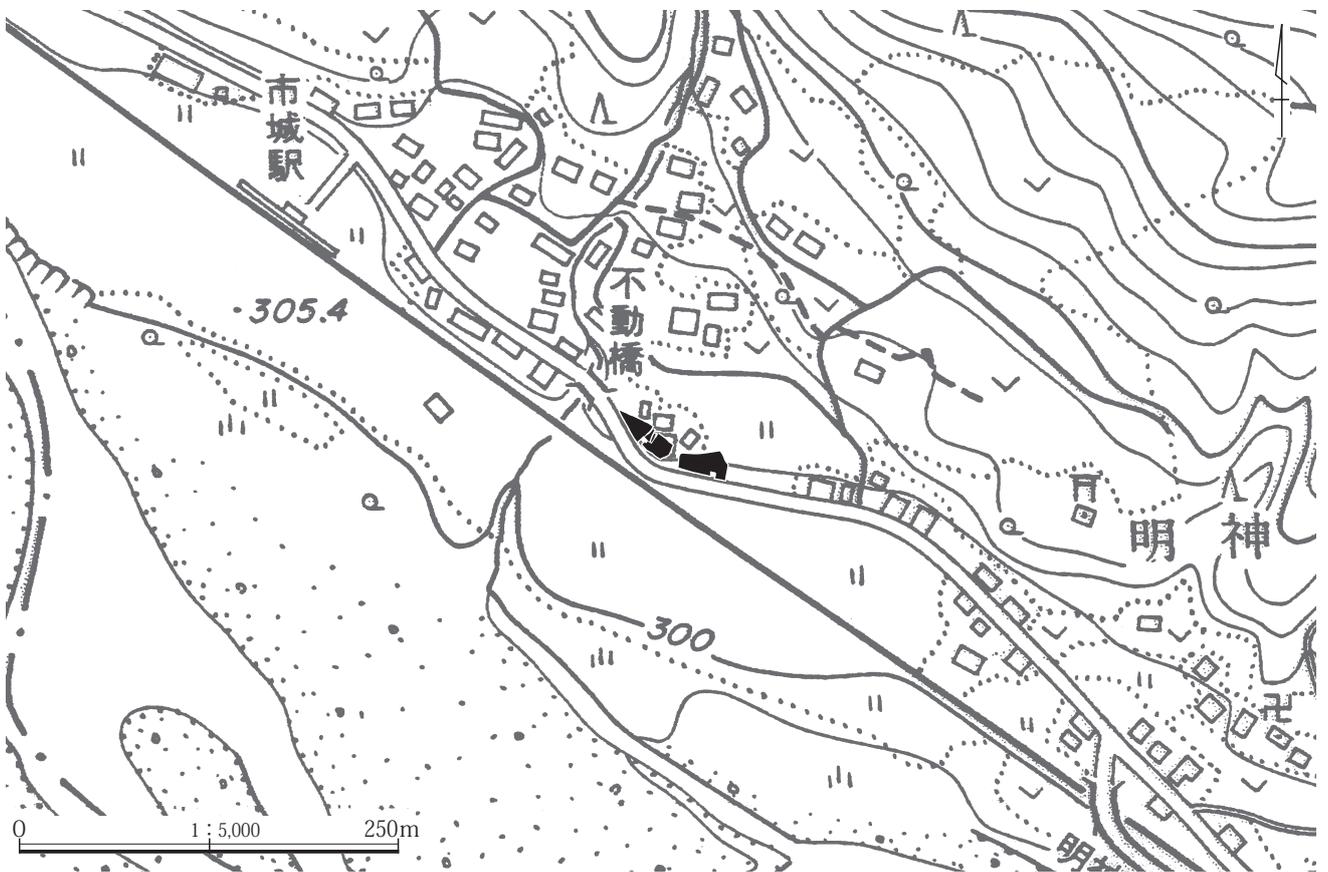


第1図 遺跡位置図(1)

国土地理院地形図 1:50,000「中之条」



国土地理院地形図 1 : 25,000 「群馬原町」「金井」



第2図 遺跡位置図(2)

中之条町 1 : 10,000地形図(掲載承認済)

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法と経過

調査に際して調査区を設定するにあたり、道路改良工事範囲の内、隣接民家進入路や防火水槽・電柱などを避け、北西より1区、旧市城公民館用地を2区、南東を3区とし、第一次調査は1区を対象とした。調査時において2区の公民館移転が未了であったため、事務所用地として3区を利用した。

表土の除去に際しては、試掘調査データに基づき、遺構確認面直上まで重機を用いて表土の除去を行った。掘削排土については、同事業に伴い先行工事を行っている工事業者側の排土仮置き場を利用させてもらった。遺構の検出から掘削に至る作業については、遺跡掘削工事請負業者に委託し行った。記録測量については、基準点・水準点測量、および遺構平面図(器械)測量などを主に測量業者に委託し、補助的に発掘調査作業員による断面図測量を行った。測量の縮尺としては、1/10・1/20・1/40を用い、全体図として1/100を用いた。また、記録写真については、デジタル一眼レフカメラ(800～1200万画素相当)と中型(6×7)カメラでブローニー判フィルム撮影を調査担当者が行った。第一次調査においては、調査時期の関係で、降雨や台風上陸などの悪天候による調査休止と排水復旧作業が頭を悩ませたが、無事、期間内に調査を終え、引き渡しを行った。

第二次調査に際しては、調査終了の1区を調査事務所用地として利用した。表土の除去に際しては、試掘調査データおよび1区調査時のデータに基づき、遺構確認面直上まで重機を用いて表土の除去を行った。掘削排土については、一時調査と同様に、同事業に伴い先行工事を行っている工事業者側の排土仮置き場を利用させてもらった。遺構の検出から掘削に至る作業については、遺跡掘削工事請負業者に委託し行った。記録測量については、第一次調査時の仕様に準拠し、整合性を保った。第二次調査においては、調査時期が冬季であったため、降雪による作業休止と除雪作業に苦慮したが、無事、期間内に調査を終え、引き渡しを行った。

#### 発掘調査日誌(抜粋)

##### 第一次調査(1区)

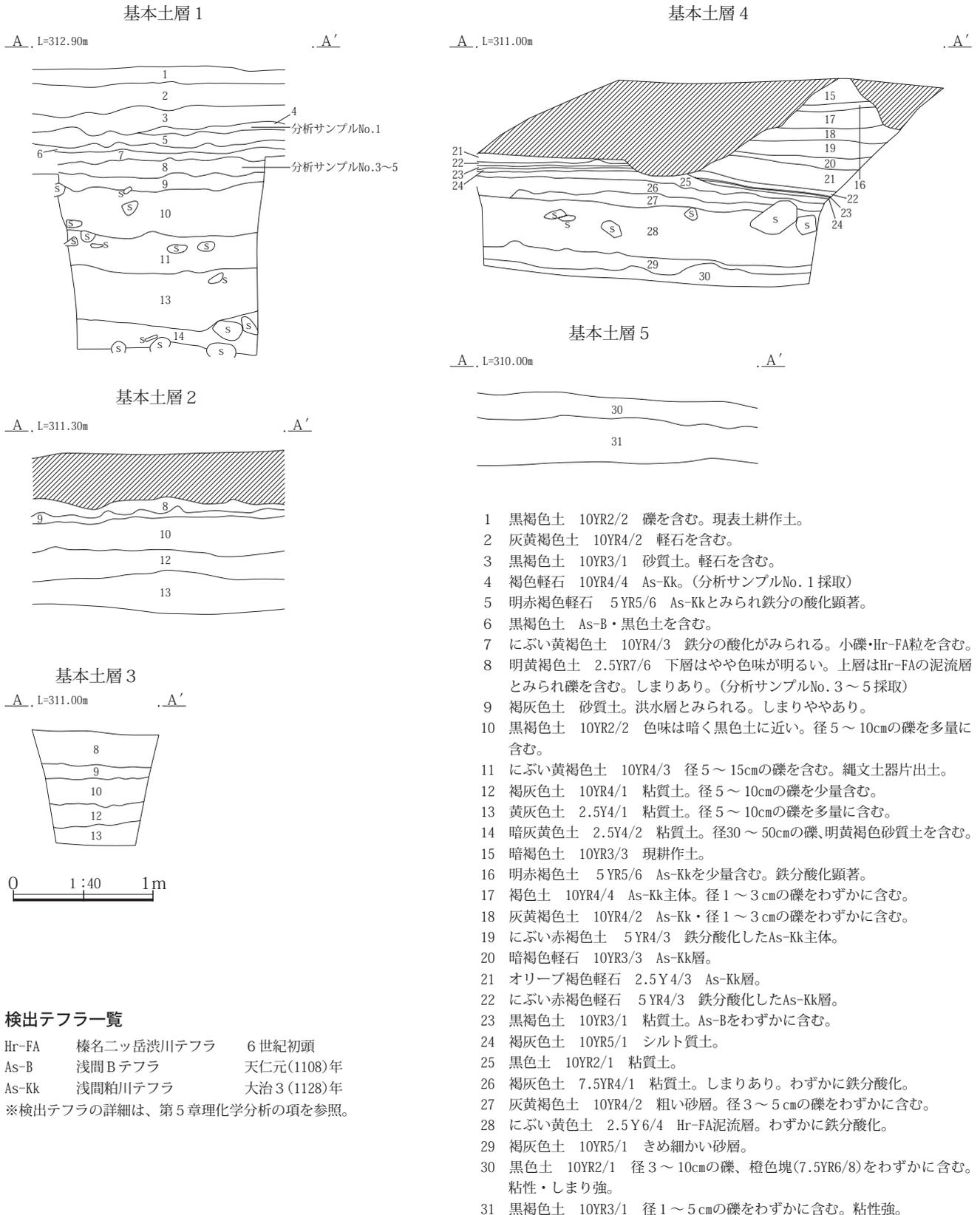
9月2日(月) 調査開始準備 調査事務所設営・安全対策～表土除去開始。  
 9月3日(火) 調査事務所設営、表土除去作業～遺構確認作業。  
 降雨により一次中断。  
 9月4日(水) 表土除去作業～遺構確認作業。1号住居跡検出～調査。  
 降雨により一次中断。  
 9月5日(木) 降雨のため調査休止。調査区内排水作業。  
 9月6日(金) 1・2号住居跡調査。調査区東側全景写真撮影。  
 9月9日(月) 1・2号住居跡調査。4・5号住居跡調査開始。  
 9月10日(火) 1・2・4・5号住居跡および1号溝跡調査。  
 9月11日(水) 同上  
 9月12日(木) 1・4・5号住居跡調査。3・6・7号住居跡調査開始。  
 9月13日(金) 1・3～6号住居跡調査。  
 遺構名称変更2号住→1号竪穴、7号住→2号住  
 9月16日(月) 台風18号上陸のため、作業中止。  
 9月17日(火) 調査区内排水作業。3号住居跡調査。  
 9月18日(水) 3～5号住居跡調査。  
 基本土層調査およびテフラサンプリング。  
 9月19日(木) 3～6号住居跡調査。  
 縄文包含層調査トレンチ設定。  
 9月20日(金) 5・6号住居跡調査。  
 調査区全景写真撮影。包含層調査トレンチ掘削。  
 9月23日(月) [秋分の日]  
 9月24日(火) 5・6号住居跡調査。  
 包含層調査トレンチ掘削。土坑2基検出。  
 9月25日(水) 6号住居跡・土坑調査。  
 9月26日(木) 包含層トレンチ調査。調査事務所撤収準備。  
 9月27日(金) 調査事務所撤収・撤去作業。調査区埋め戻し作業。  
 9月30日(月) 調査事務所・安全対策撤去～現場引き渡し。

##### 第二次調査(2・3区)

2月3日(月) 調査開始準備。安全対策。表土除去～遺構確認作業。  
 2月4日(火) 2区1面遺構確認作業～2号溝跡掘削。  
 3区表土除去～遺構確認作業。  
 2月5日(水) 2区2号溝跡掘削。1面全景写真撮影。  
 3区表土除去～遺構確認作業。  
 2月6日(木) 2区事務所移転～2面掘下げ。  
 3区表土除去～遺構確認。ピット・土坑調査。  
 2月7日(金) 2区2面全景写真～包含層掘削。  
 3区ピット・土坑調査～全景写真。  
 2月10日(月) 2区包含層調査。3区低地部遺構確認。  
 2月11日(火) [建国記念日]  
 2月12日(水) 2区調査区全景写真撮影。  
 3区低地部全景写真撮影～包含層調査。  
 3区包含層調査。  
 2月13日(木) 3区包含層調査。  
 2月14日(金) 降雪のため作業休止。  
 2月17日(月) 積雪のため作業休止。  
 2月18日(火) 除雪作業。  
 2月19日(水) 除雪作業。3区包含層調査。  
 2月20日(木) 3区 包含層調査。  
 2月21日(金) 同上  
 2月24日(月) 同上  
 2月25日(火) 3区包含層調査～調査区全景写真撮影。  
 2月26日(水) 2・3区埋め戻し作業。安全柵撤去作業。  
 2月27日(木) 調査事務所撤去作業。安全柵撤去作業。  
 2月28日(金) 引き渡し。事務処理。

## 第2節 基本土層

基本土層の平面位置については、全体図(S=1/200)を参照



第3図 基本土層図

## 第3章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

〔沿革〕 遺跡の所在する中之条町は、群馬県北西部の吾妻郡内にあり、新潟県と長野県に接する県境の町である。面積は439.28km<sup>2</sup>を計り、そのおよそ8割を森林が占める、山に囲まれた盆地状の地形を呈する。南部は比較的平坦で古くから市街地化が進み、政治・文化・交通の中心となる。北部は三国山系の高峰がそびえ、上信越高原国立公園に指定されている。

豊かな自然は観光地としても親しまれ、群馬・長野・新潟の三県に跨る野反湖、白砂川・四万川の溪流、高層湿原で国立公園特別地域の芳ヶ平、草津温泉と沢渡温泉を結ぶ暮坂峠などの名所や四万・沢渡・尻焼などの温泉地を抱える。

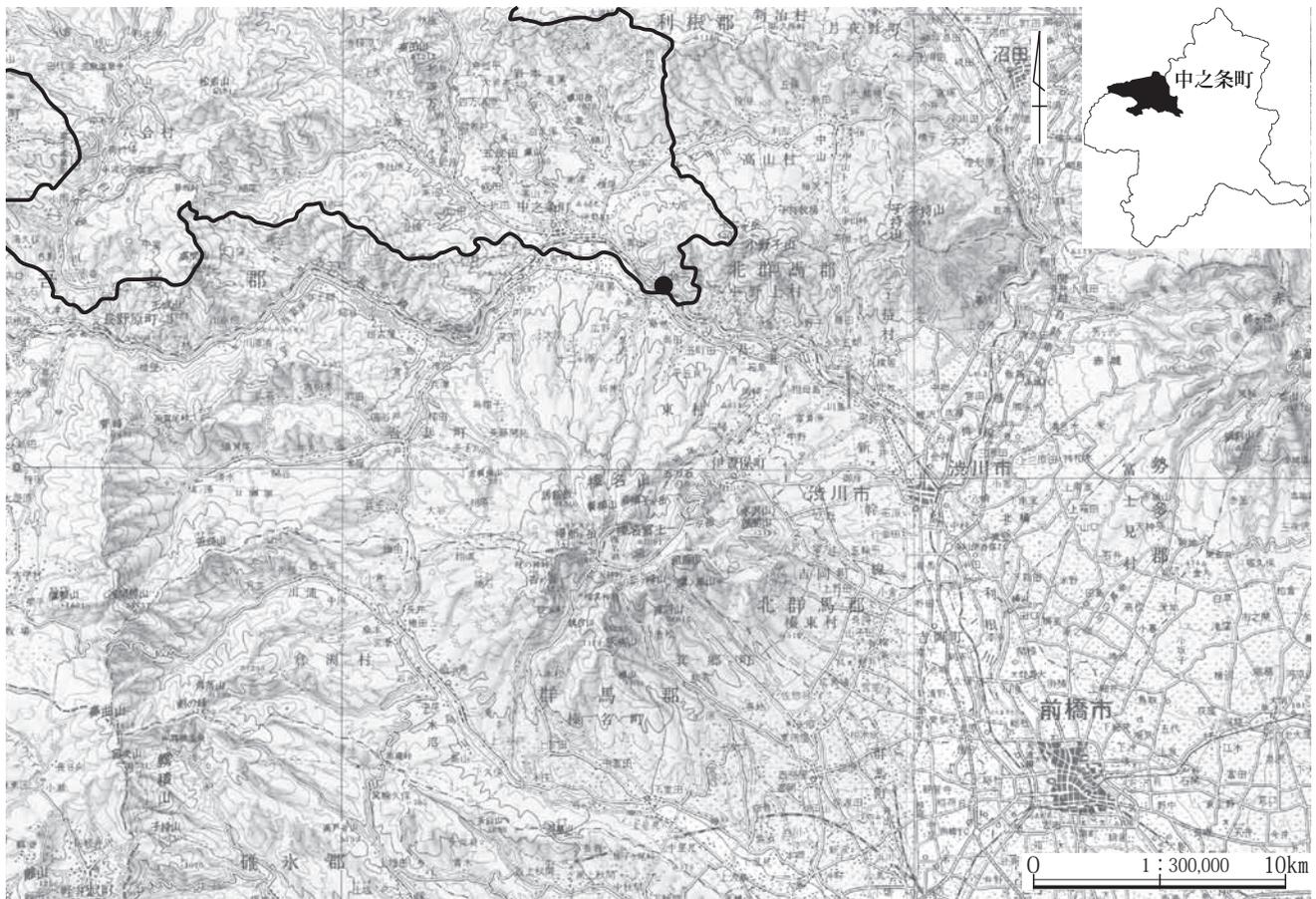
交通は、J R 吾妻線や国道145号・353号など吾妻郡の

主要幹線が走る。

〔地形〕 町の地形は、北部～西部にかけて山々が連なり、南部は吾妻川に沿って盆地が開ける。山の谷間から流れ出る河川は浸食を重ね、上流では深いV字谷を、下流では小さな扇状地を形成する。水系は吾妻川に注ぐ名久田川・山田川(四万川・沢渡川)・白砂川の3系で、それぞれの上流では樹枝状に多くの沢が広がる。

〔遺跡の立地〕 遺跡は、中之条町南東部の吾妻川左岸沿い、J R 吾妻線の市城駅より南東へ250mほどの所に位置し、国道353号に面する。

遺跡地は、吾妻川によって形成された河岸段丘上の流路に沿った細長い平坦面にあり、北から南へ向かい緩やかに傾斜する。北西には吾妻川に注ぐ不動沢が流れ、標高は310mほどを測る。調査前の地目は畑地と旧市城公民館であった。



第4図 遺跡位置図(3)

国土地理院地勢図1:200,000「長野」「宇都宮」

## 第2節 歴史的環境

〔旧石器時代〕 当該地域での旧石器時代の石器出土事例の報告はなく、その存在が確認されていない。

〔縄文時代〕 古くから分布調査や林道建設などにより河川中～上流域や支流の沢沿いに早期～晩期に至る遺跡の分布が知られる。調査報告例としては、上沢渡川流域の久森遺跡・棚貝(界)戸遺跡、四万川流域の清水敷石住居跡・四万遺跡、名久田川流域の宿割遺跡・五十嵐遺跡・伊賀野遺跡・下平遺跡(46)、蟻川流域の柳沢遺跡、白砂川上流域のりんごの木Ⅰ遺跡、反下川流域の上反下遺跡などが報告されている。

〔弥生時代〕 当該地域は弥生時代の遺跡数は希少である。集落の調査・報告例として、四万川・枯木沢川流域に成田遺跡、名久田川流域に宿割遺跡・中沢遺跡(34・37)、中之条駅周辺の台地上に天神遺跡(14)・川端遺跡(15)・長岡遺跡(12)が、また、洞穴遺跡として有笠山遺跡がある。

〔古墳時代〕 『上毛古墳総覧』によると、旧中之条町・沢田村・名久田村所在の古墳として昭和10年の分布調査時には、前方後円墳2基・円墳58基・不詳5基の計65基が記録されている。主に名久田川流域をはじめ、山田川(四万川・沢渡川)流域にその分布がみられる。名久田川流域の古墳として、樋塚古墳(39)・名久田8号墳(43)・下平遺跡・小塚遺跡(33)・伊勢町只則古墳群(19)が、四万川流域の古墳として永田原遺跡・石ノ塔古墳・小川古墳・山田勝負瀬古墳群などがある。遺跡周辺地域の市城地区には、円墳11基が存在したとされ、当遺跡の北西800m程のところに市城亀石古墳群(総覧中之条No. 4～9)(3)がある。

一方、集落跡の分布をみると、古墳の分布に同じく、主に名久田川流域と吾妻川左岸の中之条駅周辺の台地上に展開が見られる。名久田川流域の遺跡として、宿割遺跡・名久田中学校遺跡(38)・下平遺跡・長久保遺跡(35)・下尻高遺跡(42)・七日市遺跡(30・31)・中沢遺跡・桃瀬遺跡(28・29)などが、中之条駅周辺の遺跡として、法満寺土師遺跡(26)・天神遺跡・川端遺跡・長岡遺跡などがある。

〔奈良・平安時代〕 律令期の遺跡周辺地域は、吾妻(あかつま)郡に比定され、『和名類聚抄』によれば郡内には

大田(於保田 おおた)・長田(奈加太 なかた)・伊参(伊佐萬 いさま)の3郷が存在したとされる。その推定域として大田郷は、吾妻町川戸・厚田(旧太田村)に「大田」の小字が残ることから吾妻川河南地域に、長田郷は西中之条と折田の間に「長田」の小字が残り、旧高山村の寺社記録に「長田郷浪江村」の名称が見られることから名久田川流域に、伊参郷は、旧伊参村や伊勢町に「伊参」の小字が残ることから、吾妻川北岸一帯にそれぞれ比定されている。郡衙(家)については、その推定地として東吾妻町(旧吾妻町)の大宮・川戸周辺などがあげられてきた。近年の発掘調査成果により、銅印や奈良三彩が出土した中之条町天神遺跡や布堀・根石を持つ掘立柱建物跡が検出された東吾妻町下郷古墳群なども官衙関連の遺跡と考えられる。

『延喜式』によると上野国には牧(御牧)が九つあり、その内の「市代牧」が遺跡周辺の市城に比定されている。付近には「マセ(馬柵)・月毛耕地・馬生・横婦毛・尾牧・木戸場・馬場・馬捨場・牧場登路・馬見平」などの馬に関する地名が多く残ると共に、土塁跡・堀跡も確認されている。市城字明神に所在の白鳥神社は、旧称を「白唐馬(しらとうめ)明神」と称し、白唐馬(白頭馬・白頭目・白唐目・白専馬)と称した神社が吾妻郡内に点在した。祭神は、天曆九(947)年に朝廷に献上された「白波」という月毛(白)馬で、その毛色から「一白(いちしろ)」の地名を賜ったと伝えられる。

そのほかのこの時代の遺跡として、金井廃寺、天代瓦窯(22)などが古くから知られ、集落の分布としては、小河川下流域の吾妻川沿いに、長岡遺跡・西浦遺跡(20)、名久田川流域に桃瀬遺跡、山棲み集落としては熊倉遺跡などがある。

〔中世〕 中世に至ると、県内平野部の穀倉地域では荘園や御厨が相次いで成立し、在地豪族が下司職(荘官)を務め勢力を拡大していったのに対し、山間部で田畠の少ない吾妻の地では、穀物に代わる産物として馬匹が大きな役割を果たし、古代の官牧を私牧化することで在地領主は荘園に代わる経営基盤を築いたものと考えられる。その証として、『吾妻鏡』には養和二(1182)年の源頼朝による神馬献上に際し、「一疋栗毛駿、吾妻八郎進」との記述が見られる。吾妻氏は当所、藤原秀郷流吾妻氏と岩井堂城の源氏吾妻(村上)氏が共存し東域の地を治めていた

が、承久の乱(1221年)の宇治川の合戦において没した後、一族である下総の下河辺氏が吾妻氏を称し領主権を継承した。南北朝期に入ると、碓氷より新田一族の里見氏の攻略を受け、貞和五(1349)年に吾妻氏は没し、内出城の足利支族飽間氏が勢力を強める。室町期には一時、守護大名上杉憲顕の支配下となるが、戦国期に入ると越前斎藤氏が吾妻氏を称し岩櫃城主となり、尻高氏、箕輪城主長野氏支配下の大戸氏・羽尾氏らが分立、越後より三国峠を越えた関東管領上杉謙信の支配下となる。信州に進出した武田信玄は鳥居峠を越え吾妻に攻め入り、永禄六(1563年)に岩櫃城を攻略。上杉方の勢力を駆逐し武田氏の分国とする。天正元(1573)年に武田信玄が没した後は家督を勝頼が継ぐが、天正三(1575)年には武田軍の騎馬隊と織田・徳川軍の鉄砲隊の戦いとして有名な長篠の戦いがあり、吾妻より参戦の家臣も多く討死、武田軍は大きな痛手を負う。天正六年には上杉謙信が没し、その家督争いの乱に乗じて北条氏が沼田に乱入し、利根・吾妻の地は上杉・武田・北条の戦国大名による三つ巴の戦場となる。天正八・九(1580・81)年に武田勝頼の命を受けた真田昌幸は、沼田城の北条氏と吾妻の上杉方尻高氏を攻め落とし武田の支配下とするものの、翌十(1582)年には織田・徳川の連合軍に敗れて武田勝頼は没し、甲斐武田氏は滅亡する。旧所領は織田信長の手中に落ちるが、ほどなく本能寺にて信長が没する。この機に織田方の去った地は、この地であって武田氏遺臣を集め再起を目論む真田氏に対し、南から北条氏、駿河より徳川氏、越後より上杉氏らが乱入するが、北条・徳川は和睦、その後も北条氏は再三に亘り沼田城・名胡桃城・岩櫃城の攻略・謀略を行うも、秀吉の小田原城征討により兵を引く。天正十八(1590)年北条氏滅亡の後、関八州は徳川家康の所領となり、吾妻の地を含む沼田領は真田昌幸・信幸父子に与えられ、真田氏統治が始まる。

遺跡周囲の中世遺跡として、岩櫃城跡・吾妻城・内出城・岩井堂城をはじめ、城峯城・伊参城(17)・和利宮城(24)・小(古)城(18)・山田城・桑田城・嵩山城・横尾八幡城(44)などの城館址がある。また、国指定重要文化財の日向見薬師堂(天文六(1537)年の棟札以前の建立)、県指定重要文化財の宗本寺宝篋印塔(康永三(1344)年・康永四(1345)年銘の二基)、市城の古塔(応永廿一(1414)年十一月二十日名 宝塔)(2)、林昌寺画像板碑(文永八(1271)年銘)

(21)などの仏教建築・石造物がみられる。

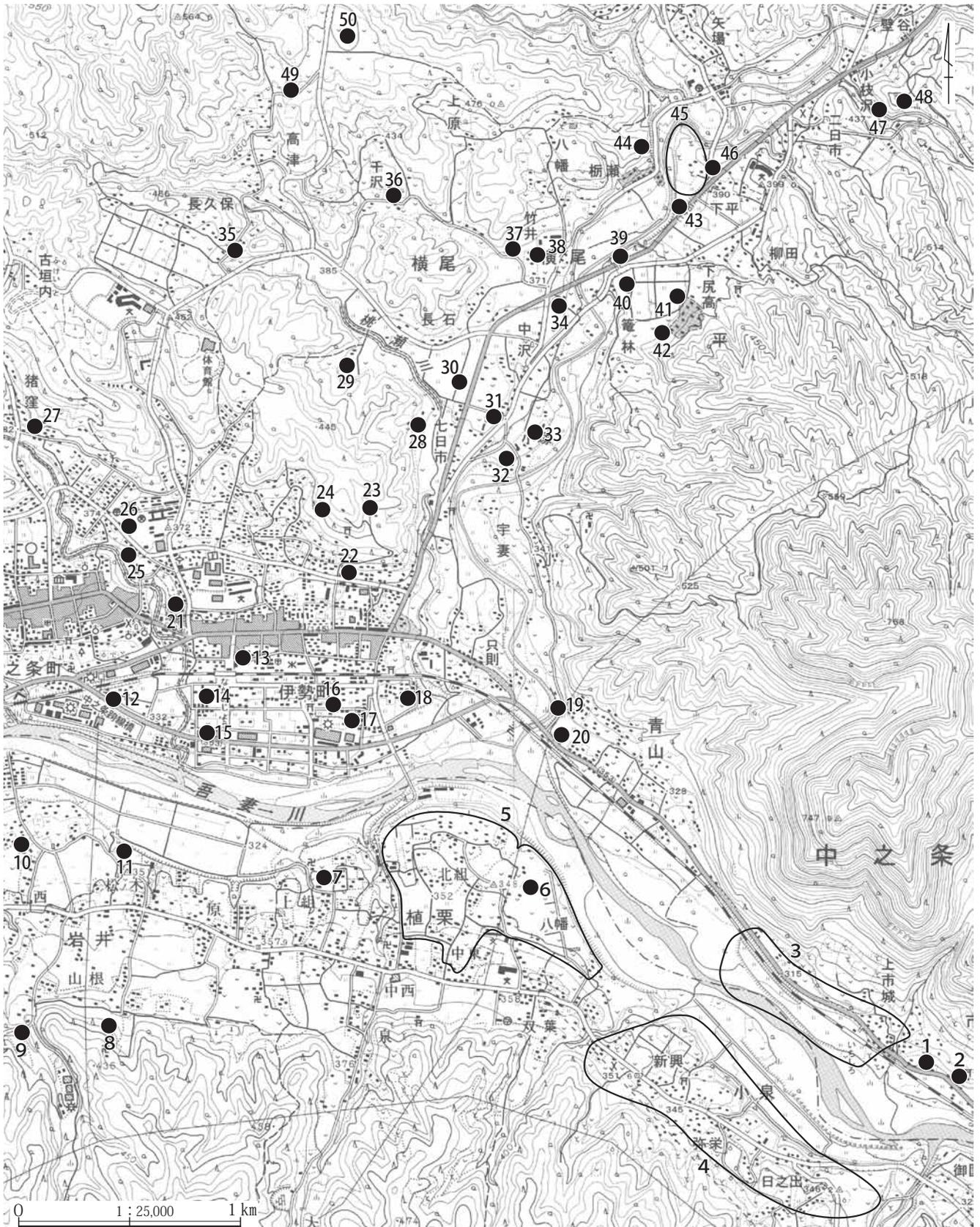
〔近世〕 徳川家康より与えられた沼田領は、その後も五代にわたり真田氏が藩主を務める。初代信幸、二代信吉、その長子の熊之助は3歳にして城主となるものの7歳で没し、四代信政は領内の開発を盛んに行い、五代伊賀守信澄(信通・信直)は、悪政・失態により將軍徳川綱吉の怒りを買ひ、天和元(1681)年十一月に沼田藩は改易となる。その後、天領となるが、享保の凶作・寛保の洪水・天明の浅間荒れ(浅間山噴火)・天保の飢饉など風水害や冷害がもたらす凶作による度重なる飢饉と疫病の流行が人々を苦しめた。

中世から近世にかけて、中之条の町は大きく変遷を遂げる。戦国期に吾妻川と名久田川の合流点の城郭「小城」の根小屋として生まれた河原宿「中城町(中条町)」は、天正年間の合戦の戦禍を受けたことや吾妻川の洪水が原因で、文禄四(1595)年長岡の地に移転し、名を「中条町」として近世の宿駅の形態を確立するが、吾妻川の川瀬が変わり川欠けが生じて危険なことから、移転を余儀なくされる。移転候補地の交通量調査(雪の日の翌朝の履き物の痕跡を比較)などから、王子原の地が選ばれ、公儀普請で町を引くことを領主真田信吉に願い出で、寛永二(1625)年に移転。町名を「中野条町」と改める。

〔近・現代〕 明治22(1889)年の市制・町村制施行により中之条町・西中之条村・伊勢町・青山村・市城村が合併し中之条町が生まれ、さらに昭和30(1955)年に中之条町に沢田村・伊参村・名久田村が合併して中之条町となった。平成22(2010)年3月には六合村が中之条町に編入され、現在の中之条町となる。

旧中之条町の大字名としては、「伊勢町」「西中之条」「青山」「市城」「山田」「折田」「下沢渡」「上沢渡」「四万」「五反田」「岩本」「蟻川」「大道」「平」「赤坂」「大塚」「栃窪」。小字名としては、「嵩山」「反下」「譲葉」「日向見」「新湯」「秋鹿」「吾嬬」「成田」「親都」「白久保」「馬滑」「礮石」「唐繰」「行沢」「百々」「沼田」「湯原」「稲荷穴」「只則」「古垣内」がある。

また、六合(くに)地区の大字としては、「入山」「小雨」「生須」「日影」「太子」「赤岩」。小字名として、入山に「小倉」「長平」「根広」「和光原」「引沼」「世立」「田代原」「品木」「荷付場」、小雨に「沼尾」「原」、生須に「寺社木」「東平」、日影に「平沢」「八升蒔」、太子に「湯久保」「蚕」、赤岩に「鍛冶谷戸」「広池」がある。



- 1 市城塔本遺跡 2 市城の古宝(宝塔) 3 市城古墳群 4 小泉古墳群 5 植栗中原遺跡 6 植栗遺跡 7 植栗舞台遺跡 8 小田沢古墳(光陣峠の砦)  
 9 岩井寺古墳 10 岩井南古墳 11 白山神社遺跡 12 長岡遺跡 13 伊勢町遺跡 14 天神遺跡 15 川端遺跡 16 上原遺跡 17 伊勢城址 18 小城(古城)址  
 19 伊勢町只則古墳群 20 西浦遺跡 21 林昌寺画像板碑 22 天代瓦窯遺跡 23 真田水牢遺跡 24 和利宮城 25 法満寺A遺跡 26 法満寺土師遺跡  
 27 法満寺遺跡 28 桃瀬遺跡A区 29 桃瀬遺跡B区 30 七日市遺跡A区 31 七日市遺跡B区 32 小塚古墳 33 小塚遺跡 34 中沢遺跡A区  
 35 長久保遺跡 36 千沢遺跡 37 中沢遺跡C区 38 名久田中学校遺跡 39 樋塚古墳 40 菅田遺跡 41 名久田12号墳 42 下尻高遺跡 43 名久田8号墳  
 44 横尾八幡城址 45 平古墳群 46 下平遺跡 47 壁谷の寄居址 48 寄居原遺跡 49 高津遺跡 50 奥山原遺跡

第5図 周辺の遺跡位置図 国土地理院 1:25,000 「中之条」「上野中山」「群馬原町」「金井」

# 第4章 検出遺構と出土遺物

## 第1節 竪穴住居

1区1号住居(第6・7図 PL.4・11)

位置：X=63608 Y=-84892

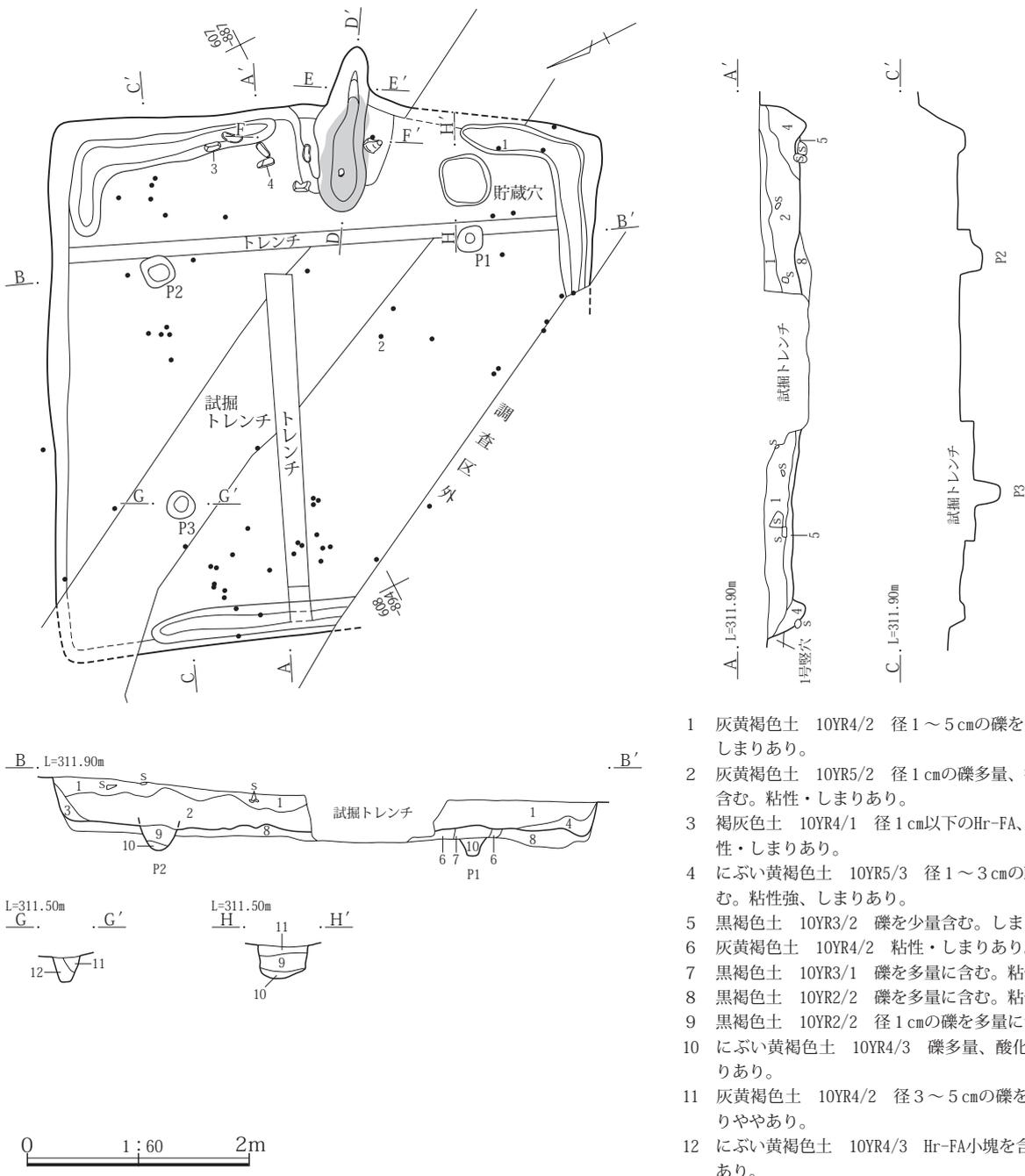
規模・形状：4.95m×4.89m、深度41cmほどを測る正方形形状を呈する。

主軸方位：N-115°-E

**遺存状態：**1区中央部南西壁際で検出されたため、住居南西コーナー部が調査区域外に存在し未検出ではあるが、削平も少なく、遺存状態は良好であった。

**埋土：**少量のHr-FA(榛名ニツ岳渋川テフラ)泥流塊を含む褐色土を主体とする、自然堆積による埋没の様相を呈する。

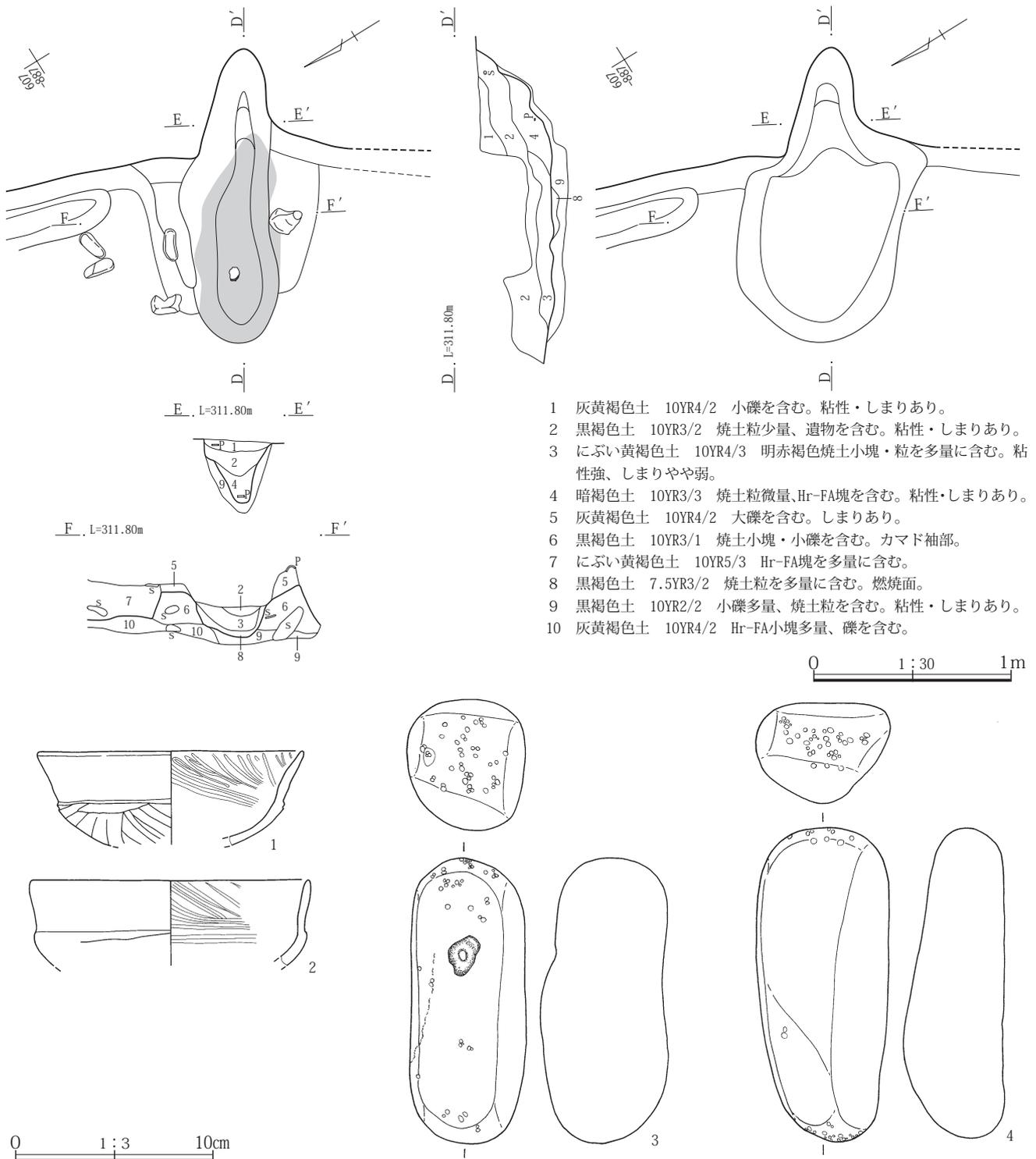
**床面：**地山土を締め固めて床面とするが、一部に掘り方



- 1 灰黄褐色土 10YR4/2 径1～5cmの礫を多量に含む。粘性・しまりあり。
- 2 灰黄褐色土 10YR5/2 径1cmの礫多量、径20cmのHr-FA塊を含む。粘性・しまりあり。
- 3 褐灰色土 10YR4/1 径1cm以下のHr-FA、礫を少量含む。粘性・しまりあり。
- 4 にぶい黄褐色土 10YR5/3 径1～3cmのHr-FA塊を多量に含む。粘性強、しまりあり。
- 5 黒褐色土 10YR3/2 礫を少量含む。しまりあり。
- 6 灰黄褐色土 10YR4/2 粘性・しまりあり。
- 7 黒褐色土 10YR3/1 礫を多量に含む。粘性・しまりあり。
- 8 黒褐色土 10YR2/2 礫を多量に含む。粘性・しまりあり。
- 9 黒褐色土 10YR2/2 径1cmの礫を多量に含む。しまりあり。
- 10 にぶい黄褐色土 10YR4/3 礫多量、酸化鉄分を含む。しまりあり。
- 11 灰黄褐色土 10YR4/2 径3～5cmの礫を多量に含む。しまりややあり。
- 12 にぶい黄褐色土 10YR4/3 Hr-FA小塊を含む。粘性・しまりあり。

第6図 1区1号住居遺構図

第4章 検出遺構と出土遺物



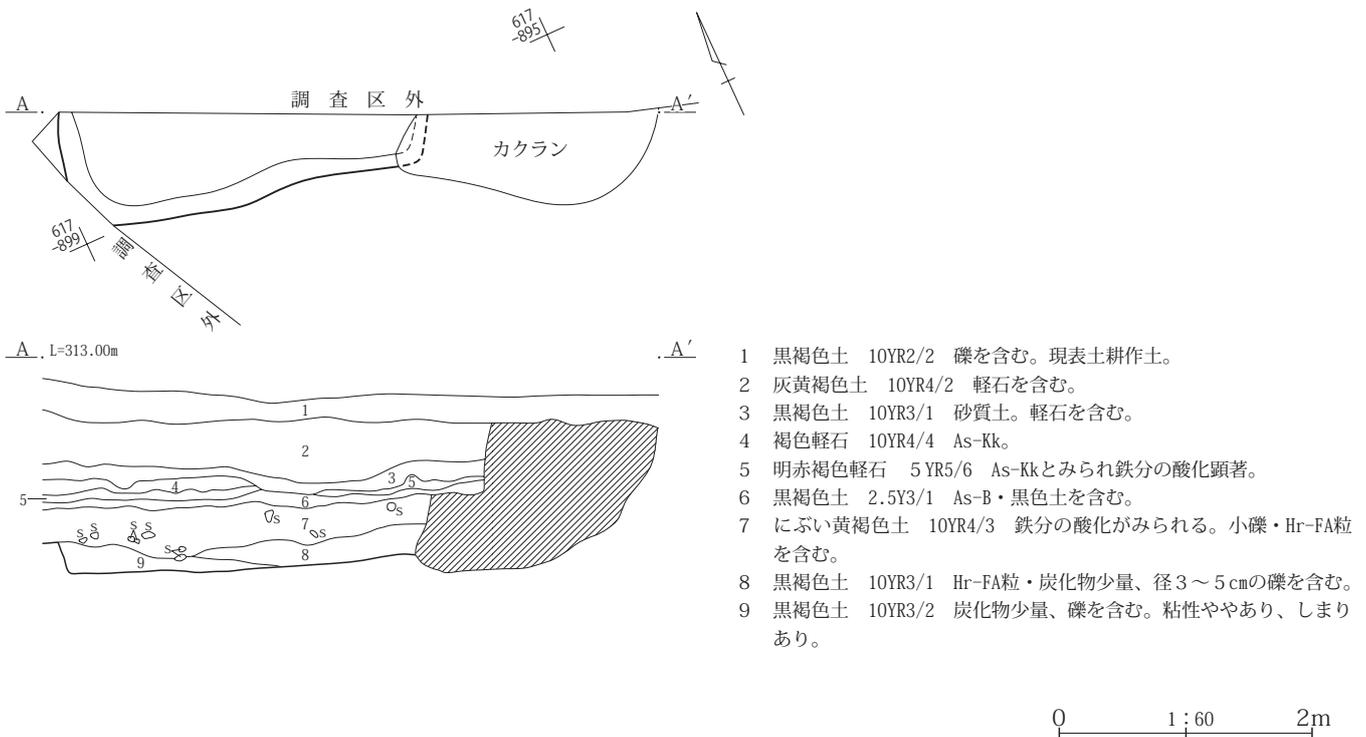
第7図 1区1号住居カマド遺構図・出土遺物図

第1表 1区1号住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm・g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第7図	1	土師器 杯	南東周溝内-6cm 1/4	口	13.2	粗砂粒少・雲母/良好/明赤褐	口縁部は底部との間に弱い稜を有する。底部外面はナデに近いへら削り。口縁部内面はナデの上に斜横位のへら磨き。	
第7図	2	土師器 杯	中央床面直上 破片	口	13.8	粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちへら削りと考えられる。内面はナデの上に斜横位のへら磨き。	器面は摩滅。被熱か。
第7図 PL.11	3	礫石器 凹石	北東周溝内-1cm 完形	長幅	14.5 5.8	厚重 6.6 962.5	粗粒輝石安山岩	正面中央部に断面漏斗状の浅い凹みと上端小口部に敲打痕を有する。
第7図 PL.11	4	礫石器 敲石	カマド寄り 床面直上 完形	長幅	15.8 6.7	厚重 5.1 809.1	石英閃緑岩	上下端部に敲打痕を有する。

埋土である黒褐色土による堅く締まる貼り床を有する。  
**柱穴等**：4本の支柱穴を持つ建物と思われるが、南西部の1穴は調査区域外に在り未検出。検出された柱穴の規模は、径22～28cm、深度20～27cmを測る。カマド脇および北東壁際を除く壁直下に、巾20～30cm程を測る壁溝が認められる。住居南東コーナー部のカマド寄りに隅丸形状の貯蔵穴が設けられ、径44～47cm、深度は31cmほどを測る。  
**カマド**：南東壁中央付近に設けられる。燃烧部を住居内に有し、煙道長は短く、端部の勾配は急峻に立ち上がる。掘り方埋土内にも焼土粒が含まれることから、修復のため再構築されたものと推察される。  
**掘り方**：住居北西半を浅く皿状に掘り窪める。  
**重複遺構**：北西部において1号竪穴状遺構と重複し、重複部の埋土の様相から、本住居の方が新しいものと判断される。  
**出土遺物**：出土する遺物の量は極めて少なく、僅かに土師器杯(No. 1)が南東壁周溝内から、また、同杯(No. 2)が住居中央部床面付近から出土する程度である。  
**所見**：出土遺物の年代などから、本住居は6世紀中葉～後半の遺構と推察される。

**1区2号住居(第8図 PL.5)**  
**位置**：X=63617 Y=-84897  
**規模・形状**：南西壁長3m、深度28cmほどを測る隅丸形状を呈するものと推定される。  
**主軸方位**：N-78°-W  
**遺存状態**：1区北西端部に検出され、住居北東部と東コーナー部が調査区域外にかかり、また、南東部を後世の攪乱により逸しているため、遺存状態は不良であった。  
**埋土**：少量のHr-FA(榛名二ツ岳渋川テフラ)泥流塊を含む黒褐色土を主体とする自然堆積による埋没の様相を呈する。  
**床面**：地山土を締め固めて床面とする。  
**柱穴等**：検出範囲に於いて、柱穴なし、壁溝なし。  
**カマド**：調査区域外の南東壁に設けられている可能性はあるものの定かではない。  
**掘り方**：なし。  
**重複遺構**：なし。  
**出土遺物**：なし。  
**所見**：重複遺構や出土遺物もなく、年代の推定は難しいが、南東に検出の4号住居と規模・形状が類似することから、同時期の遺構と推察される。



第8図 1区2号住居遺構図

1区3号住居(第9・10図 PL.5・11)

位置：X=63612 Y=-84887

規模・形状：1区北東壁中央付近において検出され、住居南西コーナー部のみが調査区内にあるため、規模・形状の全容は不明であるが、コーナー部の形状が直角で検出部の壁長が4.5mあることから、一辺が5m強の正方形を呈するものと推定される。

主軸方位：N-84°-E

遺存状態：前記のとおり、住居南西コーナー部のみを検出である。壁高は37cm程を測り、遺存状態は比較的良好であった。

埋土：多量のHr-FA(榛名二ツ岳渋川テフラ)泥流塊や小円礫を含む褐灰色～黒褐色土の自然堆積による埋没の様相を呈する。

床面：地山土を締め固めて床面とする。

柱穴等：4本の支柱穴の一部と考えられる柱穴が1穴検出され、径38～41cm、深度47cmを測る。

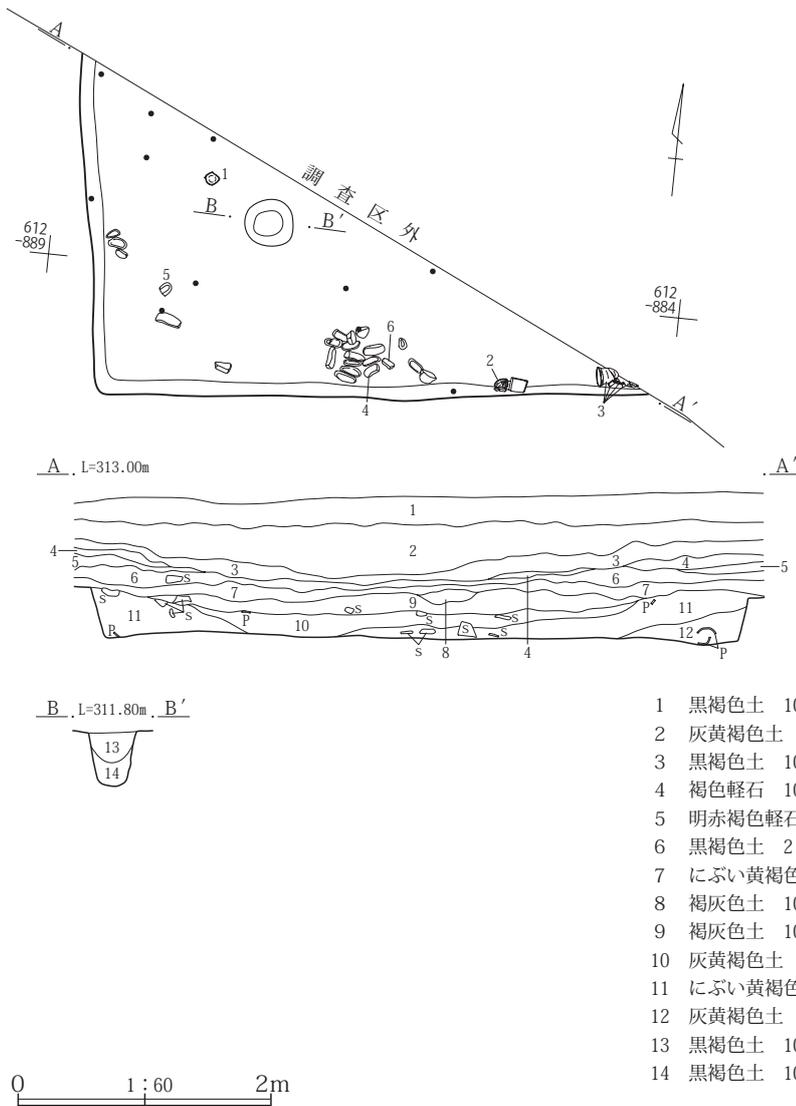
カマド：未検出。おそらくは調査区域外の東壁に設けられていると推察される。

掘り方：なし。

重複遺構：なし。

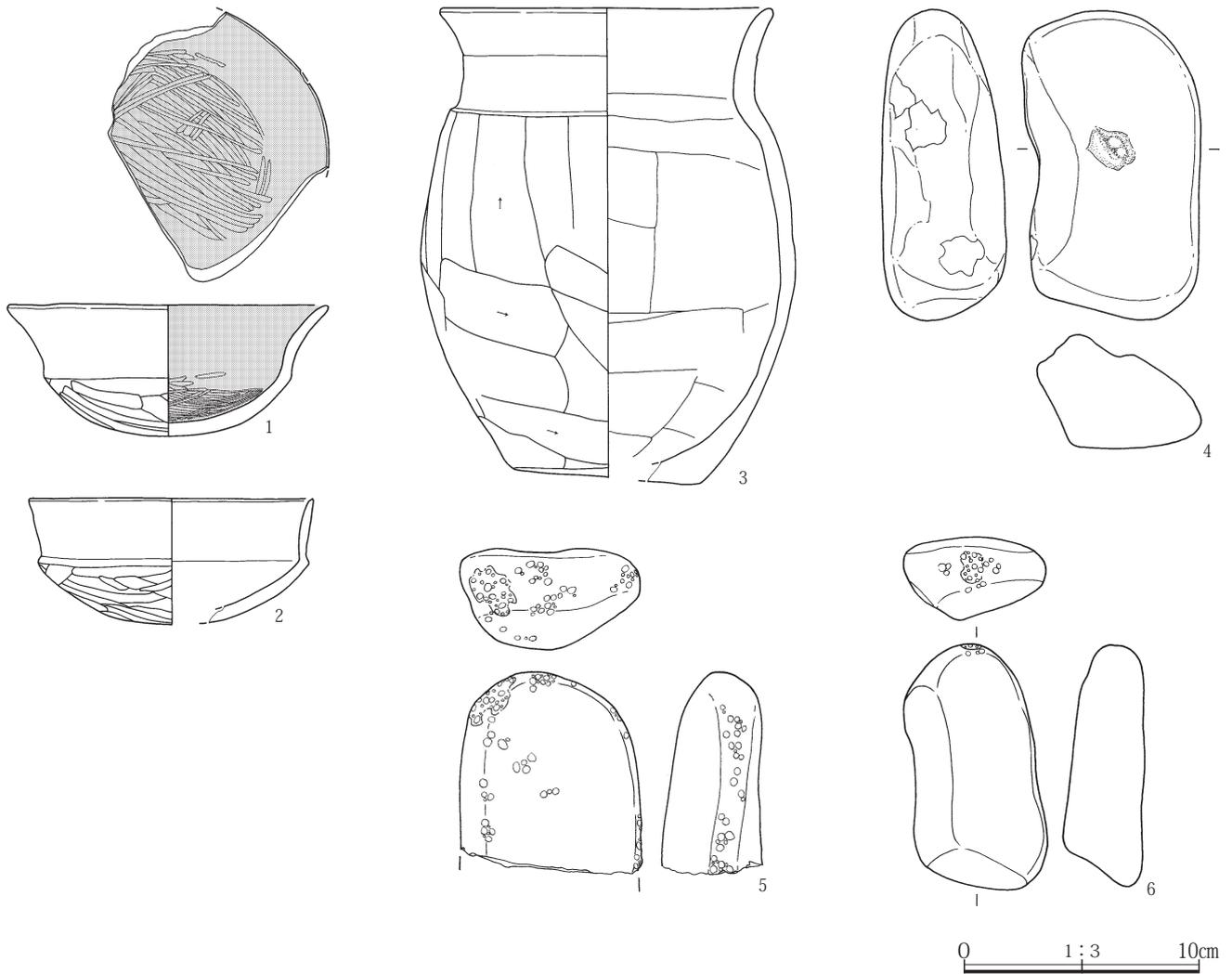
出土遺物：南壁際の床面付近より土師器杯(No. 2)と土師器甕(No. 3)が出土している。また、集中して床面上に置かれた楕円形の礫群中に凹石(No. 4)・敲石(No. 6)が含まれるが、他の礫には加工痕・使用痕が認められない。

所見：出土遺物の年代などから、本住居は6世紀中葉～後半の遺構と推察される。



- 1 黒褐色土 10YR2/2 礫を含む。現表土耕作土。
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 軽石を含む。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 砂質土。軽石を含む。
- 4 褐色軽石 10YR4/4 As-Kk。
- 5 明赤褐色軽石 5YR5/6 As-Kkとみられ鉄分の酸化顕著。
- 6 黒褐色土 2.5Y3/1 As-B・黒色土を含む。
- 7 にぶい黄褐色土 10YR4/3 鉄分の酸化がみられる。小礫・Hr-FA粒を含む。
- 8 褐灰色土 10YR6/1 シルト質土。小礫を少量含む。
- 9 褐灰色土 10YR4/1 径1cmの礫多量、Hr-FA塊を含む。しまりあり。
- 10 灰黄褐色土 10YR4/2 礫・炭化物・褐灰色土塊を含む。しまりあり。
- 11 にぶい黄褐色土 10YR4/3 礫多量、Hr-FA小・大塊を含む。しまりあり。
- 12 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA大塊多量、遺物を含む。しまりあり。
- 13 黒褐色土 10YR2/2 Hr-FA粒・礫を含む。ややしまりあり。
- 14 黒褐色土 10YR3/2 Hr-FA粒を少量含む。しまり弱。

第9図 1区3号住居遺構図



第10図 1区3号住居出土遺物図

第2表 1区3号住居出土遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値(cm・g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口	高	厚				
第10図	1	土師器 杯	西寄り 床面直上 1/4	口	13.3	高	5.6	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。底部外面は器面の乾燥が進んだ後の手持ちヘラ削り。ヘラナデに近い。底部内面は規則性の少ないヘラ磨き。	内面は炭素吸着の為、黒色。
第10図 PL.11	2	土師器 杯	南壁際+4cm 3/4	口	11.9			粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は底部との間に稜を有する横ナデ。底部外面はナデに近い幅の狭い単位のヘラ削り。内面はナデ。	内面の一部に炭素吸着。
第10図 PL.11	3	土師器 甕	南壁際-2~+4cm 胴部一部欠	口 底	13.8 8.0	高	20.2	粗砂粒・雲母・軽石 /良好/灰黄	口縁部は2回に分けて横ナデ。胴部外面は上半部が縦位、下半部が横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	被熱のため器面に炭素吸着。摩滅。
第10図 PL.11	4	礫石器 凹石	南壁寄り 床面直上 完形	長 幅	13.2 7.6	厚 重	5.2 762.1	粗粒輝石安山岩	扁平礫の中央部に浅い凹みがあったため凹石としたが、人為と自然の判断が困難。	
第10図 PL.11	5	礫石器 敲石	南西隅寄り 床面直上 1/2	長 幅	(8.6) 7.6	厚 重	4.3 375.5	粗粒輝石安山岩	上端礫稜部に敲打痕を有する。	
第10図 PL.11	6	礫石器 敲石	南壁寄り 床面直上 完形	長 幅	10.5 6.0	厚 重	3.5 280.7	粗粒輝石安山岩	上端小口部に敲打痕を有する。	

1区4号住居跡(第11-13図 PL.6・11)

位置：X=63603 Y=-84885

規模・形状：4.03m×3.86mを測る北コーナー部がやや歪な隅丸長方形を呈する。

主軸方位：N-132°-E

遺存状態：1区中央南東寄りにおいて検出される。壁高は29cmを測り、遺存状態は比較的良好であった。

埋土：多量のHr-FA(榛名ニッ岳渋川テフラ)泥流塊を含む灰黄褐色～黒褐色土の自然堆積による埋没の様相を呈する。

床面：地山土を締め固めて床面とする。

柱穴等：4本の主柱穴が検出され、径22～37cm、深度17～25cmを測る。特筆すべきは、柱穴の位置も壁の平面形状の歪みに沿って設けられている点である。また、南コーナー部において、径56～60cm、深度60cmを測る

貯蔵穴を検出した。

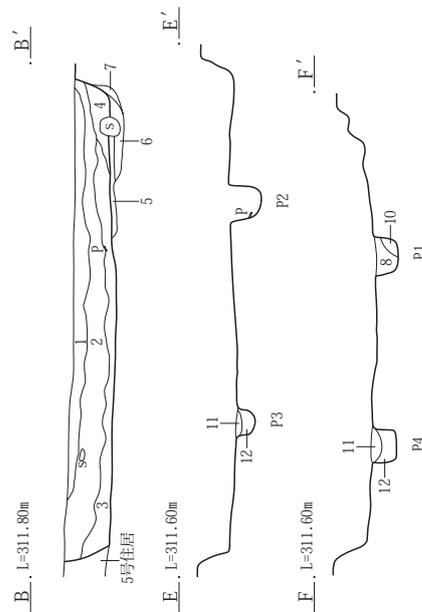
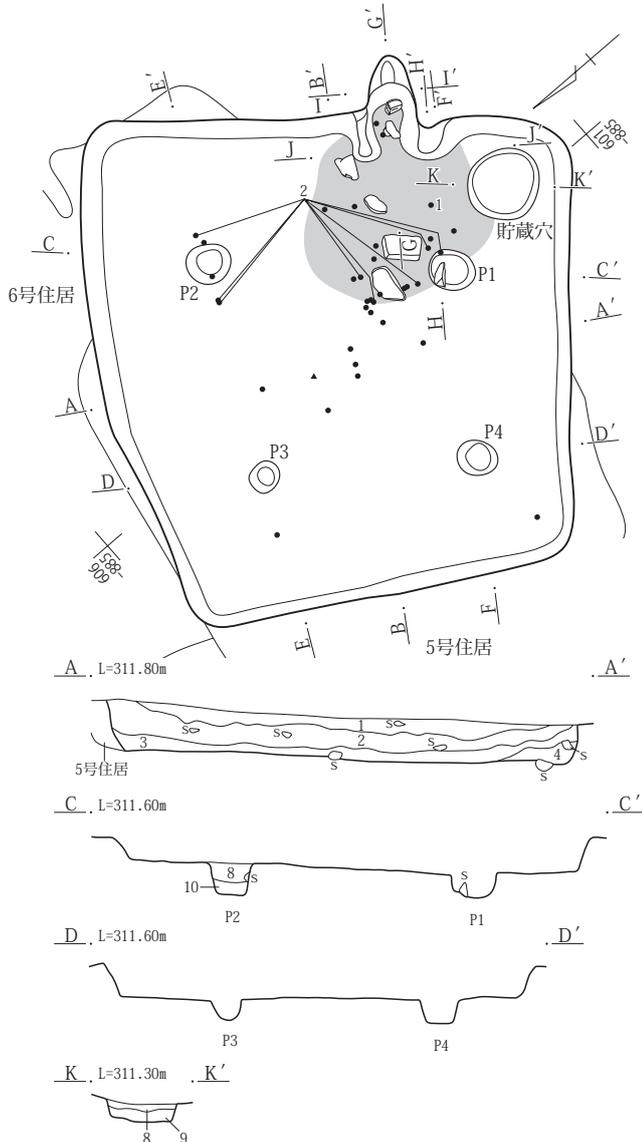
カマド：南東壁の中央やや南西側に設けられ、燃烧部の位置は、ほぼ住居壁のライン上にある。煙道は短く、燃烧部から緩やかに立ち上がる。掘り方にて燃烧部奥の左右壁と煙道端部の左右に礫が埋め込まれ、カマド前面付近に礫の散在が見られることから、石組みのカマドと判断される。

掘り方：なし。

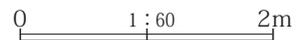
重複遺構：5号・6号住居と重複し、埋土の様相より本住居跡は両住居跡よりも新しいものと判断される。

出土遺物：住居中央付近より少量の遺物出土が見られ、土師器台付甕(No.1)・土師器甕(No.2)が出土した。

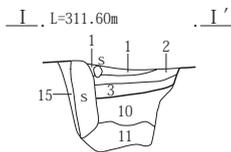
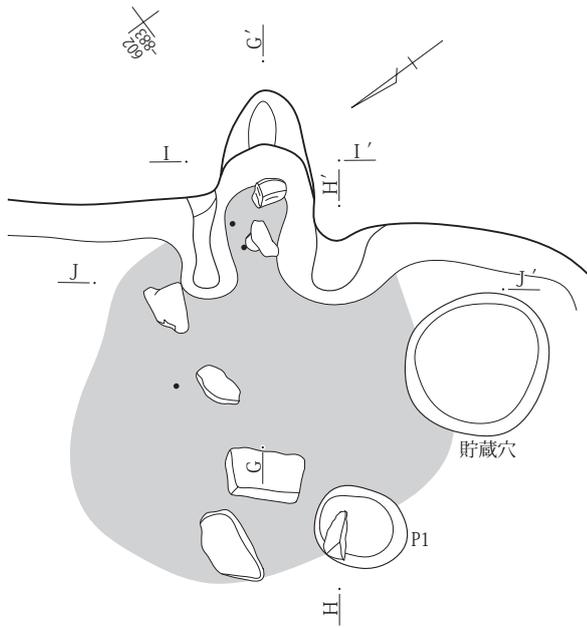
所見：出土遺物の年代などから、本住居は9世紀後半の遺構と推察される。



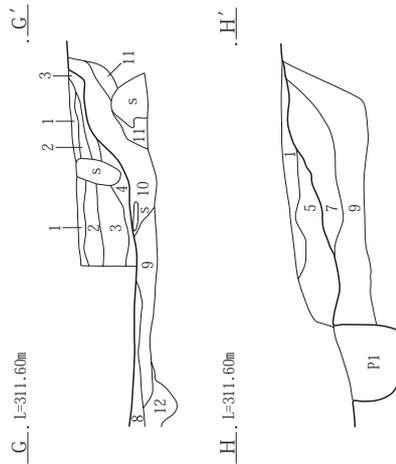
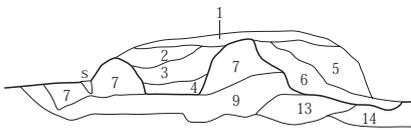
- 1 黒褐色土 10YR3/2 小礫少量、酸化鉄分を含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 10YR3/3 径5～10cmの礫、橙色粒を含む。Hr-FA小礫壁際に多い。しまりやや弱。
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 Hr-FA粒少量、炭化物を含む。しまりやや弱。
- 4 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA塊多量に含む。2層に類似。
- 5 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA粒主体。炭化物を含む。しまりあり。カマド掘り方。
- 6 灰黄褐色土 10YR6/2 炭化物多量、焼土粒を含む。しまりやや弱。
- 7 Hr-FA塊。カマド掘り方。
- 8 黒褐色土 10YR3/1 Hr-FA粒を少量含む。しまりややあり。
- 9 にぶい黄褐色土 10YR4/3 径3～5cmのHr-FA塊を多量に含む。
- 10 黒褐色土 10YR3/2 Hr-FA小塊・礫を含む。しまり弱。
- 11 黒褐色土 10YR2/2 Hr-FA粒を多量に含む。色味はやや暗い。しまり弱。
- 12 黒褐色土 10YR2/2 Hr-FA小塊・礫を含む。しまり弱。



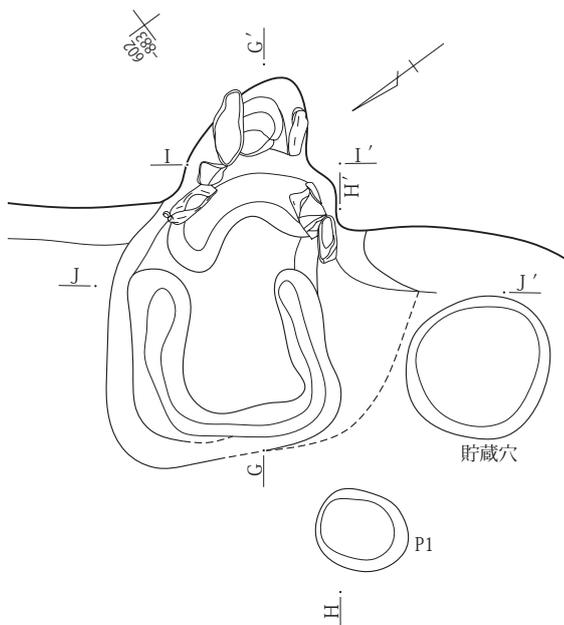
第11図 1区4号住居遺構図



J, L=311.60m J'

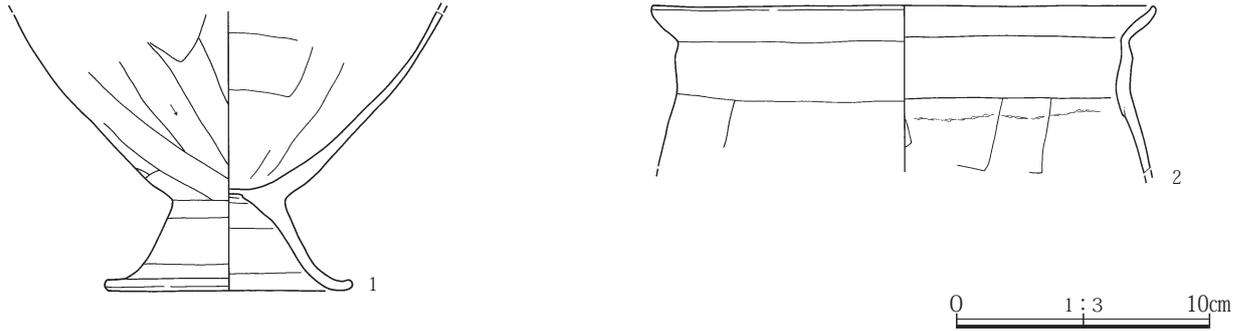


- 1 黒褐色土 10YR3/2 小礫を含む。しまりあり。
- 2 褐灰色土 10YR4/1 Hr-FA粒・酸化鉄分を少量含む。しまりあり。
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA塊・粒を多量に含む。しまりあり。
- 4 灰黄褐色土 10YR4/2 焼土粒・炭化物を含む。粘性あり、しまり弱。
- 5 灰黄褐色土 10YR5/2 径5～10cmのHr-FA塊を含む。
- 6 灰黄褐色土 10YR5/2 酸化鉄分を含む。
- 7 灰黄褐色土 10YR5/2 径5cmのHr-FA塊、炭化物・焼土粒を含む。
- 8 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA塊を多量に含む。しまりややあり。
- 9 にぶい黄褐色土 10YR4/3 Hr-FA粒少量、炭化物を含む。しまりあり。
- 10 にぶい黄褐色土 10YR5/3 焼土粒多量、炭化物を含む。しまりややあり。
- 11 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA大塊主体。礫を含む。
- 12 褐灰色土 10YR4/1 Hr-FA大塊を多量に含む。5号住覆土。
- 13 黒褐色土 10YR3/1 Hr-FA大塊多量、酸化鉄分を含む。
- 14 黒褐色土 10YR3/1 Hr-FA大塊を13層より多く含む。ピット1の壁面。
- 15 にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまりあり。



0 1:30 1m

第12図 1区4号住居カマド遺構図



第13図 1区4号住居出土遺物図

第3表 1区4号住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
				台					
第13図 PL.11	1	土師器 台付甕	カマド寄り+3cm 胴部下位～台部 1/2	台	9.2		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。台部は内 外面とも横ナデ。	被熱。
第13図 PL.11	2	土師器 甕	P1・P2周辺床面 直上～+7cm 口縁部～胴部上 位1/2	口	19.6		粗砂・細砂粒/良好 /にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面はやや摩 滅。

**1区5号住居跡**(第14図 PL.7)

**位置：**X=63604 Y=-84886

**規模・形状：**3.48m×3.41mを測るやや歪な方形状を呈する。

**主軸方位：**N-101°-E

**遺存状態：**1区中央南東寄りにおいて検出される。壁高は35cmを測るが、重複遺構により削平された部分は、僅かに9cmを測るのみである。

**埋土：**多量のHr-FA(榛名ニッ岳渋川テフラ)泥流塊を含む褐灰色～黒褐色土の自然堆積による埋没の様相を呈する。

**床面：**黒褐色土を固めて、薄い貼り床を敷設する。

**柱穴等：**柱穴並びに貯蔵穴等は検出されていない。

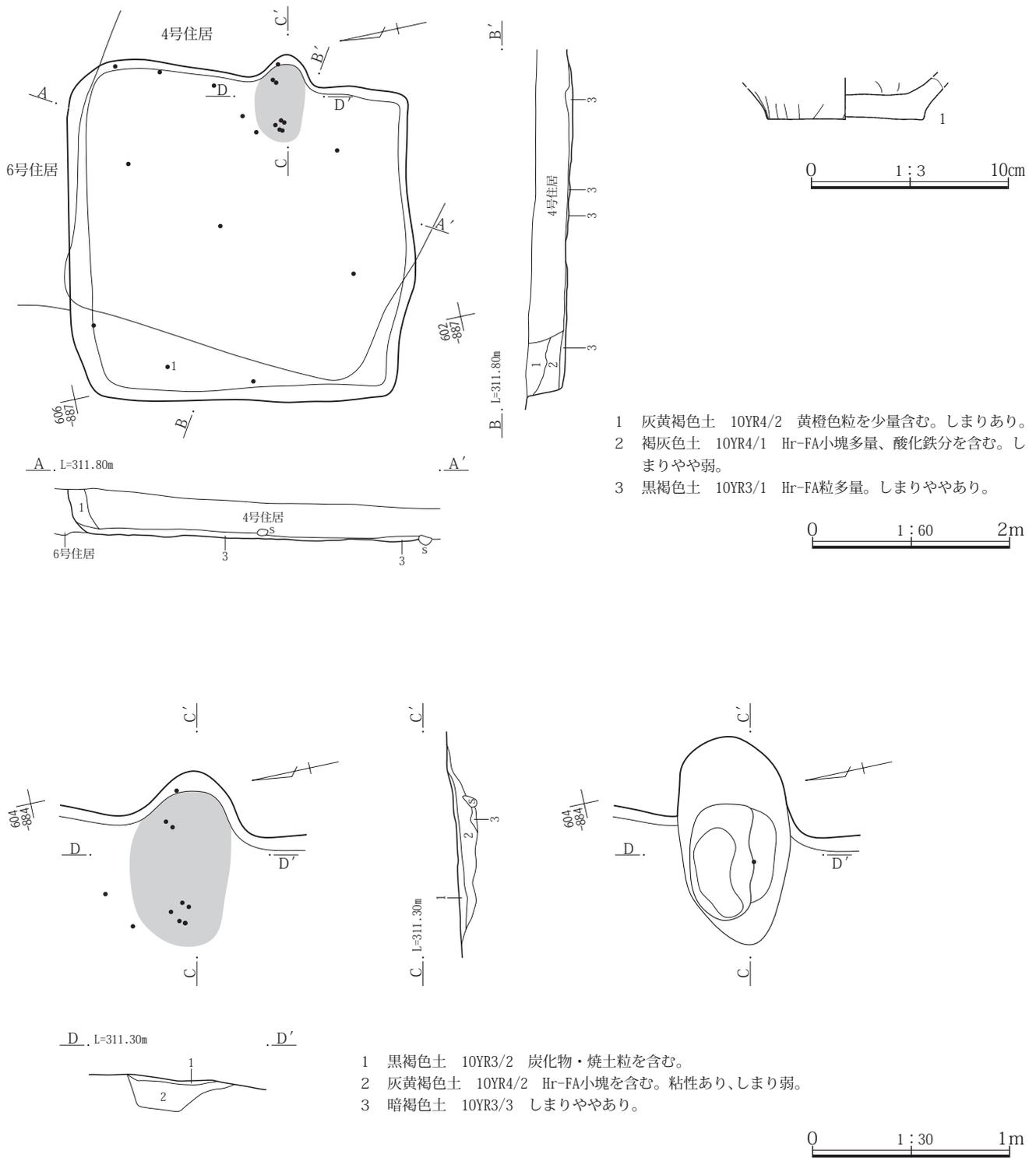
**カマド：**東壁の中央やや南側に設けられるが、重複遺構による削平で、燃烧部を僅かに残す程度で、煙道長・形状等は不明である。

**掘り方：**薄い貼り床を全面に敷設するのみで、深い掘り方は持たない。

**重複遺構：**4号・6号住居と重複し、埋土の様相より、本住居跡は4号住居跡よりも古く、6号住居跡より新しいものと判断される。

**出土遺物：**住居全面より少量の土師器片が出土しただけである。

**所見：**器形の判別ができる出土遺物がなく、年代の推定は難しいが、重複する住居の前後関係から、本住居は8世紀末～9世紀初頭の遺構と推察される。



第14図 1区5号住居遺構図・出土遺物図

第4表 1区5号住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第14図	1	土師器 壺か	西壁寄り+6cm 胴部下位～底部 1/2	底	7.8	粗砂粒/良好/にぶ い黄褐	胴部外面はヘラナデ。底部外面はヘラ削り後ナデ。内面も ナデ。	

1区6号住居跡(第15・16図 PL.8・11)

位置：X=63605 Y=-84884

規模・形状：4.09m×3.75mを測るやや歪な方形状を呈する。

主軸方位：N-86°-E

遺存状態：1区中央南東寄りにおいて検出される。壁高は50cmを測るが、重複遺構により削平された南半の部分は、僅かに2~5cmを測るのみである。

埋土：多量のHr-FA(榛名ニッ岳流川テフラ)泥流塊を含む灰黄褐色~黒褐色土の自然堆積による埋没の様相を呈する。

床面：貼り床をもたず、地山土を固めて床面とする。

柱穴等：4本の主柱穴が検出され、径24~35cm、深度12~29cmを測る。特筆すべきは、柱穴の位置も壁の平

面形状の歪みに沿って設けられている点である。また、南東コーナー部において、径53~48cm、深度22cmを測る隅丸方形状の貯蔵穴を検出する。

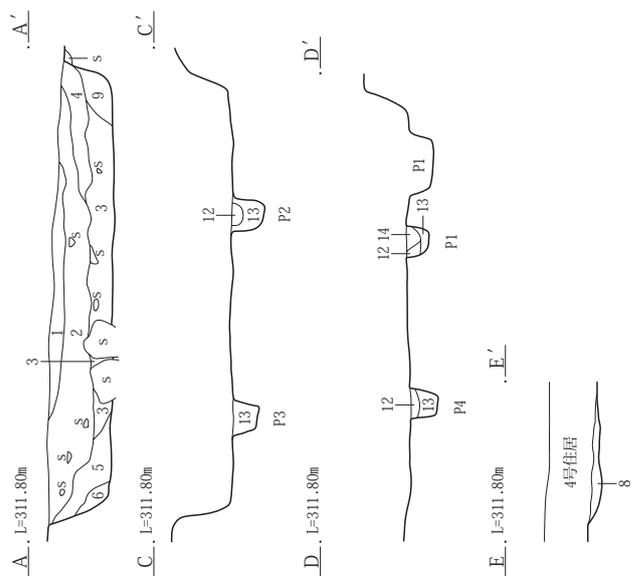
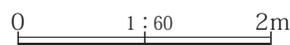
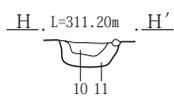
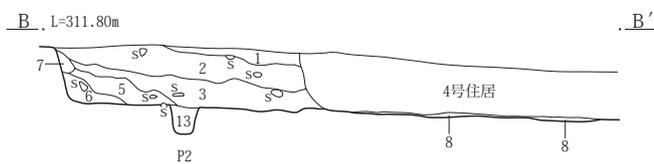
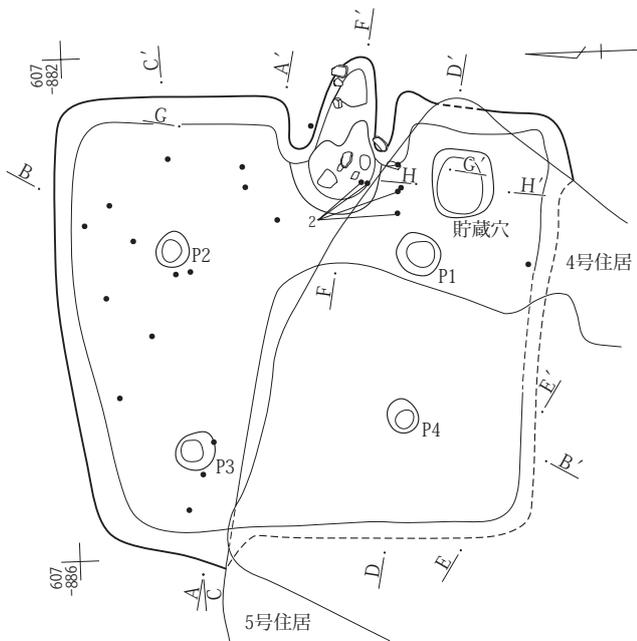
カマド：東壁の中央やや南側に設けられる。燃烧部は東壁のラインより内側に在り、煙道は短く、東壁よりあまり突出せず、煙道端はやや急峻に立ち上がる。

掘り方：なし。

重複遺構：4号・5号住居と重複し、埋土の様相より、本住居跡は両住居跡よりも古いものと判断される。

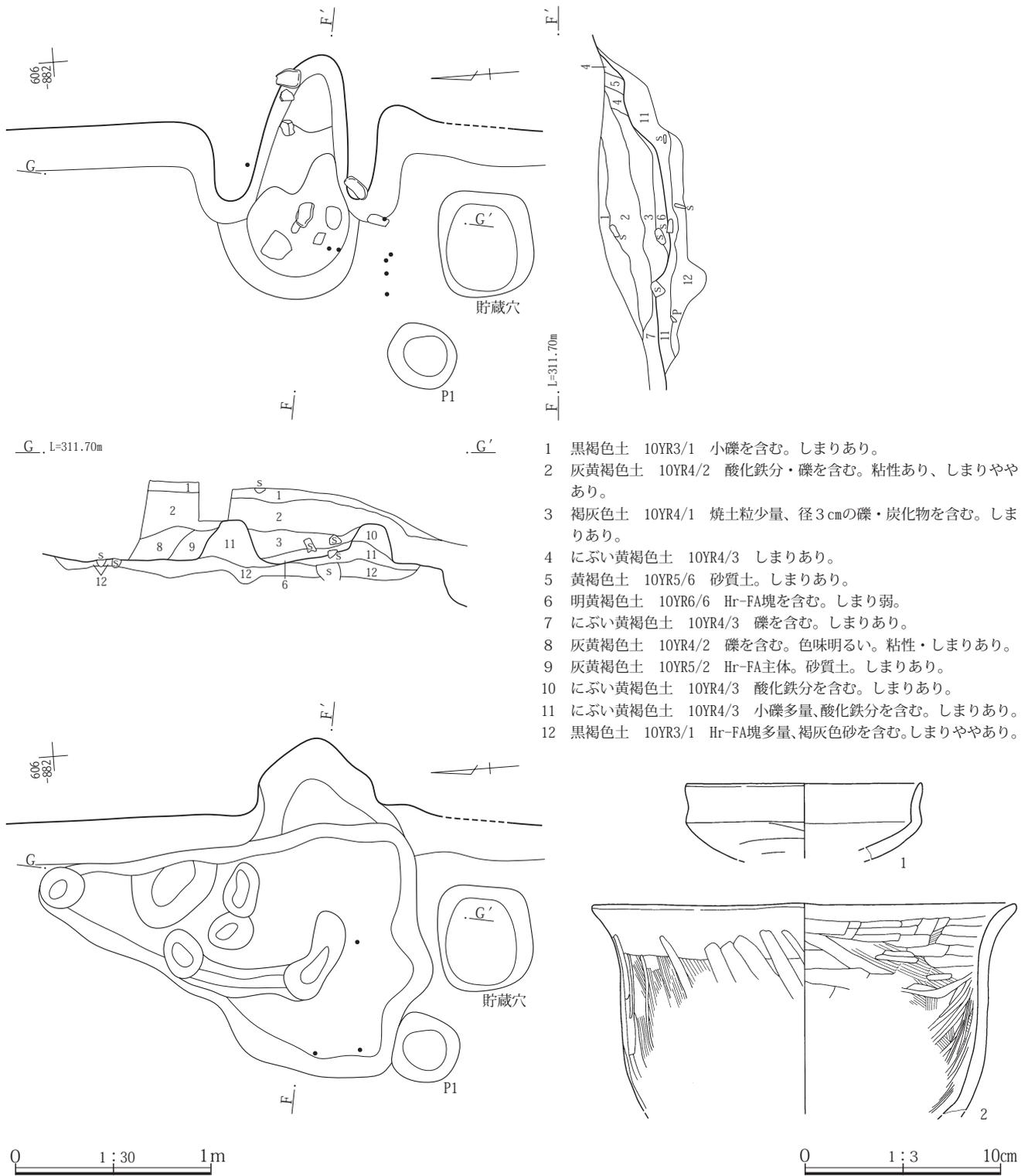
出土遺物：重複による削平を受けていない住居北半部より、少量の土師器片が出土するのみである。

所見：出土遺物の年代や重複住居の前後関係から、本住居は6世紀後半~7世紀初頭の遺構と推察される。



- 1 黒褐色土 10YR3/1 礫を少量含む。しまりあり。
- 2 黒褐色土 10YR3/2 径5~10cmの礫、Hr-FA礫を少量含む。粘性ややあり、しまり弱。
- 3 灰黄褐色土 10YR5/2 砂質土。小礫を含む。しまり弱。
- 4 灰黄褐色土 10YR5/2 炭化物少量、酸化鉄分を多量に含む。粘性強、しまり弱。
- 5 黒褐色土 10YR2/2 礫を含む。色味やや暗い。粘性・しまりあり。
- 6 灰黄褐色土 10YR5/2 Hr-FA主体。粘性・しまりあり。
- 7 Hr-FA塊。壁の崩落土。Hr-FAは二次堆積とみられる。
- 8 黒褐色土 10YR2/2 Hr-FA塊主体。しまりやや弱。
- 9 灰黄褐色土 10YR5/2 Hr-FA塊・礫を含む。しまりややあり。
- 10 褐灰色土 10YR4/1 砂質土。焼土粒を含む。しまりあり。
- 11 灰黄褐色土 10YR5/2 砂質土。礫を含む。しまりあり。
- 12 黒褐色土 10YR3/1 砂質土。しまりやや弱。
- 13 黒褐色土 10YR3/2 粘性強、しまり弱。
- 14 灰黄褐色土 10YR4/2 砂質土。焼土粒を多量に含む。しまりやや弱。

第15図 1区6号住居遺構図



第16図 1区6号住居カマド遺構図・出土遺物図

第5表 1区6号住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第16図	1	土師器 杯	埋没土 破片	□ 11.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面は丁寧なナデ。	
第16図 PL.11	2	土師器 鉢か	カマド周辺 床面直上 口縁部~胴部上 位片	□ 21.3	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はハケ目の上に器面の乾燥が進んだ後のヘラナデ。内面はハケ目の上にヘラナデ。ヘラ磨き状を呈する。	被熱。外面に煤付着。

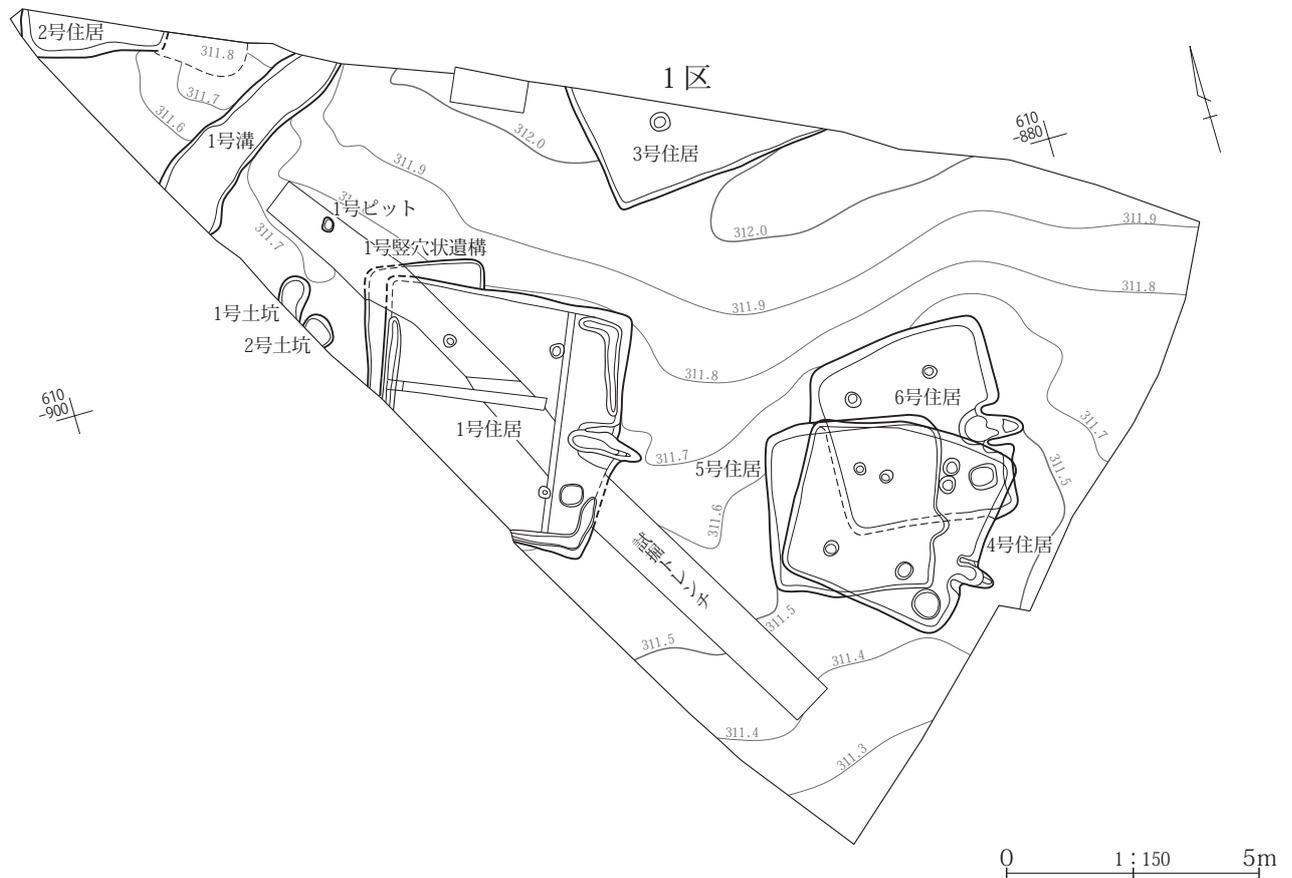
第4章 検出遺構と出土遺物

第6表 住居計測表

区	遺構名	位置	形状	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	周溝(cm)	主軸方位	貯蔵穴(cm)	カマド(cm)	重複遺構
1区	1号住居	X=63608 Y=-84892	正方形	長 4.95 短 4.89 深 0.41	(17.35)	20~30	N-115°-E	長 47 短 44 深 31	長 149 短 (61) 深 32	1号竪穴状遺構
1区	2号住居	X=63617 Y=-84897	不明	長 (2.89) 短 (0.87) 深 0.28	(1.34)	—	N-78°-W	—	—	
1区	3号住居	X=63612 Y=-84887	不明	長 (4.36) 短 (2.71) 深 0.37	(5.34)	—	N-84°-E	—	—	
1区	4号住居	X=63603 Y=-84885	隅丸長方形	長 4.03 短 3.86 深 0.29	11.83	—	N-132°-E	長 60 短 56 深 60	長 84 短 80 深 21	5号住居 6号住居
1区	5号住居	X=63604 Y=-84886	方形	長 3.48 短 3.41 深 0.35	9.66	—	N-101°-E	—	長 34 短 55 深 7	4号住居 6号住居
1区	6号住居	X=63605 Y=-84884	方形	長 4.09 短 3.75 深 0.50	10.65	—	N-86°-E	長 53 短 48 深 22	長 126 短 99 深 31	4号住居 5号住居

第7表 住居内ピット計測表 (cm)

区	遺構名	P 1			P 2			P 3			P 4		
		長軸	短軸	深さ									
1区	1号住居	23	22	27	28	27	20	26	25	26			
1区	3号住居	41	38	47									
1区	4号住居	37	31	20	36	33	25	25	22	17	33	28	19
1区	6号住居	35	32	20	29	26	27	33	29	22	28	24	12



第17図 1区住居位置図

## 第2節 竪穴状遺構

### 1号竪穴状遺構(第18図 PL.9)

位置：X=63610 Y=-84893

規模・形状：2.36m×2.60+αm、深度23cmほどを測る  
隅丸長方形形状を呈する。

主軸方位：N-81°-W

遺存状態：1区中央部南西壁際で検出され、かつ重複住居と試掘トレンチにより大半を逸しているため、遺存状態は良くなかった。

埋土：にぶい黄褐色土の自然堆積による埋没の様相を呈する。

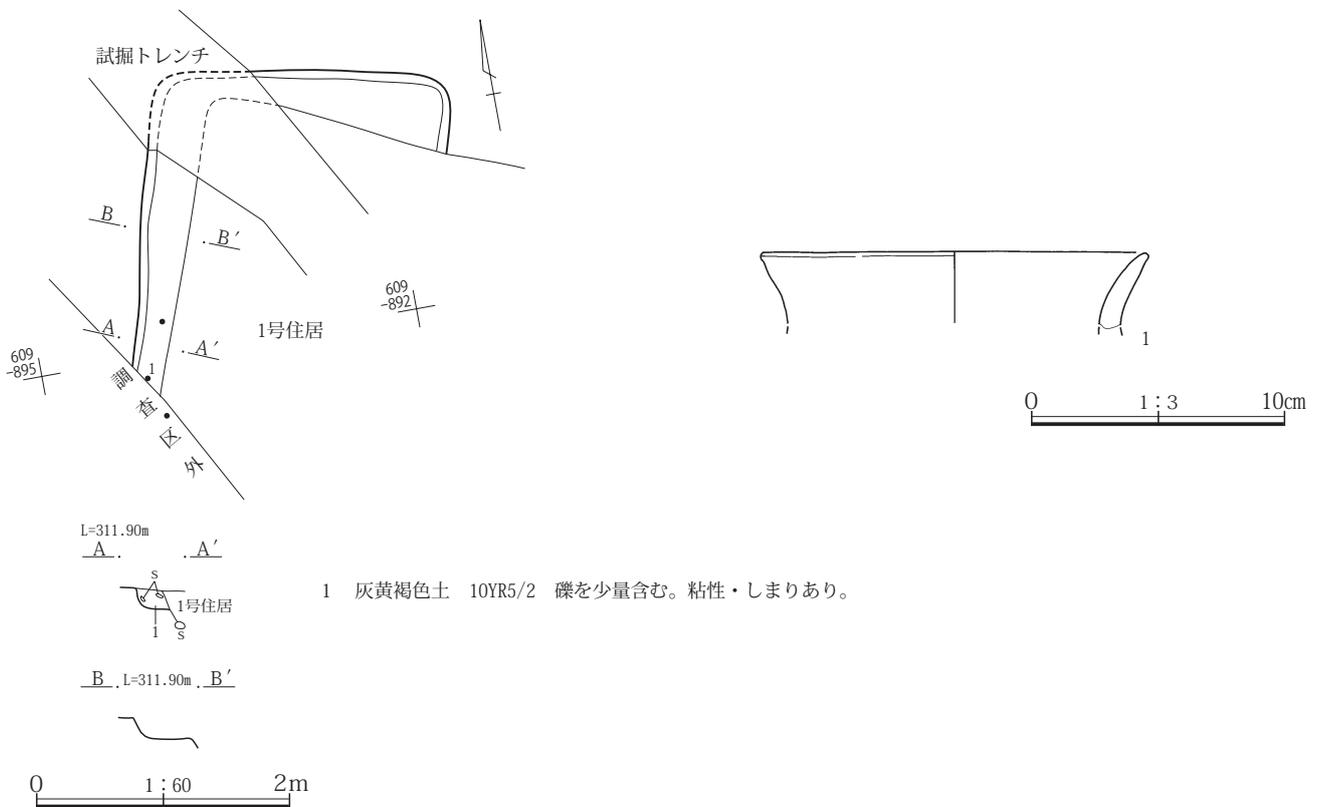
床面：柱穴並びに貯蔵穴等は検出されていない。

掘り方：なし。

重複遺構：南東の大半部が1号住居と重複し、重複部の埋土の様相から、本遺構の方が古いものと判断される。

出土遺物：出土した遺物の量は極めて少なく、僅かに土師器甕片(No. 1)が南西部から出土するのみである。

所見：重複する住居との関係などから、本遺構は6世紀中頃の遺構と推察される。



第18図 1区1号竪穴状遺構遺構図・出土遺物図

第8表 1区1号竪穴状遺構出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第18図	1	土師器 甕	南西隅+5cm 口縁部片	口	14.9	粗砂粒/良好/にぶ い黄褐	内外面とも横ナデ。	

第9表 竪穴状遺構計測表

区	遺構名	位置	形状	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方位	重複遺構
1区	1号竪穴状遺構	X=63610 Y=-84893	隅丸長方形	長(2.60) 短2.36 深0.23	(1.29)	N-81°-W	1号住居

### 第3節 溝

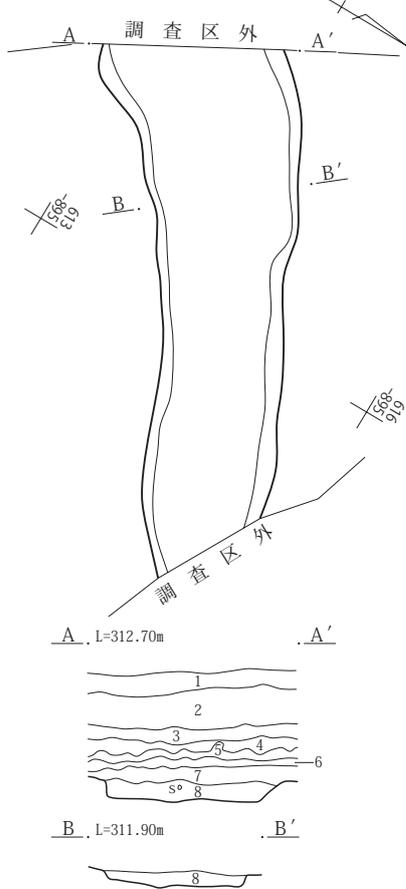
本遺跡の調査において検出された溝跡は、1区1号溝と2区2号溝の2条である。

1号溝は1区北西端部で検出され、北東から南西へと走行し、断面形状は浅い皿状を呈する溝である。調査区端に位置するため、検出長が短く全容を察することは難しい。遺構の時期については、埋土内にHr-FA(榛名二ツ岳

渋川テフラ)泥流塊を含み、上位にAs-B(浅間Bテフラ)の堆積が認められることから、住居跡群と時間差のない時期の遺構と考えられる。

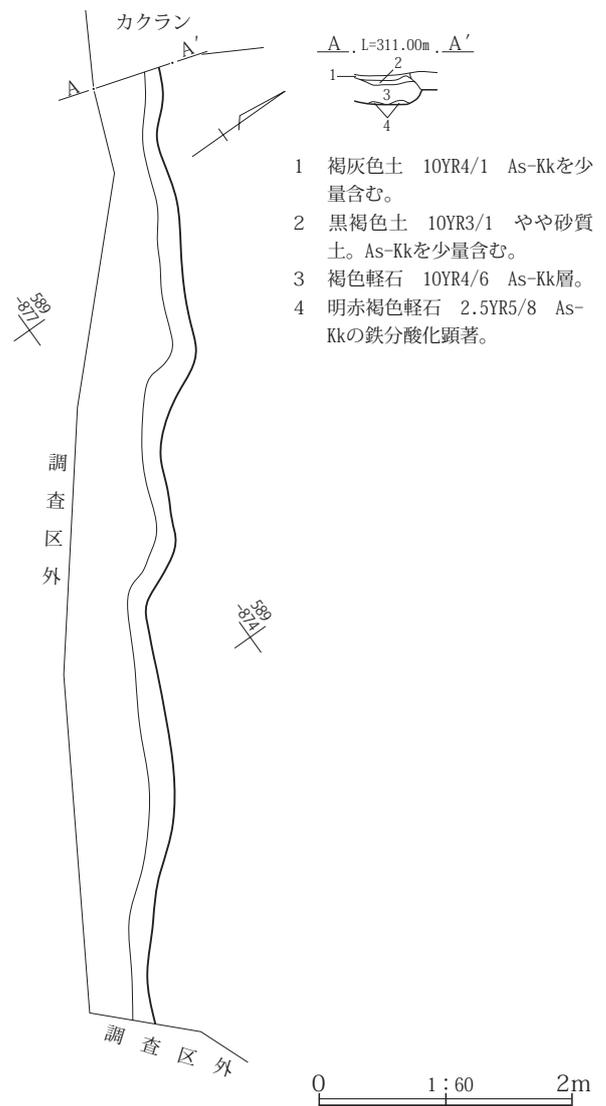
2号溝は2区南東端部において検出され、北西から南東に走行し、断面形状は水流による抉れで袋状を呈する。南西半部が調査区外にかけ、幅員は不明である。遺構の時期については、埋土内にAs-Kk(浅間粕川テフラ)が認められるため、平安時代末の溝跡と推定される。

1区1号溝(PL.9)



- 1 黒褐色土 10YR2/2 礫を含む。現表土耕作土。
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 軽石を含む。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 砂質土。軽石を含む。
- 4 褐色軽石 10YR4/4 As-Kk。
- 5 明赤褐色軽石 5YR5/6 As-Kkとみられ鉄分の酸化顕著。
- 6 黒褐色土 As-B・黒色土を含む。
- 7 にぶい黄褐色土 10YR4/3 鉄分の酸化がみられる。小礫・Hr-FA粒を含む。
- 8 灰黄褐色土 10YR5/2 粘質土。径3～5cmのHr-FA塊、礫・黒褐色土を含む。しまりあり。1号溝覆土。

2区2号溝(PL.9)



- 1 褐灰色土 10YR4/1 As-Kkを少量含む。
- 2 黒褐色土 10YR3/1 やや砂質土。As-Kkを少量含む。
- 3 褐色軽石 10YR4/6 As-Kk層。
- 4 明赤褐色軽石 2.5YR5/8 As-Kkの鉄分酸化顕著。

第19図 1区1号溝・2区2号溝遺構図

第10表 溝計測表

区	遺構名	位置	検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)	底面標高(m)	走行	断面形状	流水痕跡
1区	1号溝	X=63614 Y=-84896	(3.92)	90～151	2～17	311.78～311.49	北東→南西	浅い皿状	不明
2区	2号溝	X=63589 Y=-84876	(7.49)	(39)～(86)	9～16	310.60～310.57	北西→南東	—	有

## 第4節 土坑

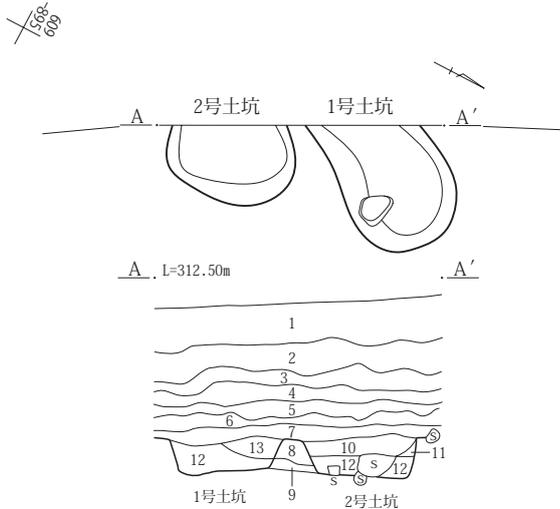
本遺跡の調査で検出された土坑は、1区において1号・2号土坑、3区において3号・4号土坑の都合4基である。

1号・2号土坑は、共に1区北西端部の調査区際で検出された。調査区端に位置するため、その全容を察する

ことは難しい。遺構の時期については、埋土内にHr-FA(榛名ニッ岳渋川テフラ)泥流層を掘り込み、かつ、上位にAs-B(浅間Bテフラ)の堆積が認められることから、住居跡群と時間差のない時期の遺構と考えられる。

3号・4号土坑は、3区中央部において検出される。遺構の時期については、埋土内にAs-Kk(浅間粕川テフラ)が認められるため、平安時代末の土坑跡と推定される。

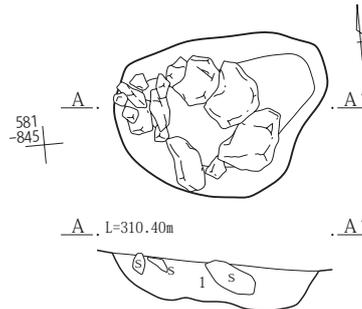
1区1・2号土坑(PL.9)



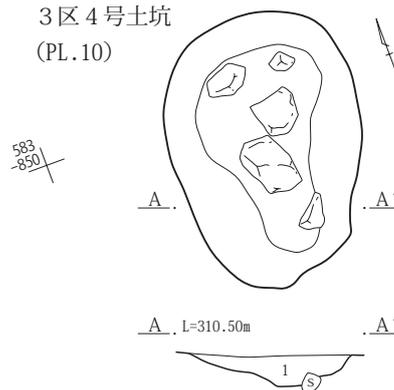
1区1・2号土坑

- 1 黒褐色土 10YR2/2 礫を含む。現表土耕作土。
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 軽石を含む。
- 3 黒褐色土 10YR3/1 砂質土。軽石を含む。
- 4 褐色軽石 10YR4/4 As-Kk。
- 5 明赤褐色軽石 5YR5/6 As-Kkとみられ鉄分の酸化顕著。
- 6 黒褐色土 2.5Y3/1 As-B・黒色土を含む。
- 7 にぶい黄褐色土 10YR4/3 鉄分の酸化がみられる。小礫・Hr-FA粒を含む。
- 8 明黄褐色土 2.5Y7/6 下層はやや色味が明るい。上層はHr-FAの泥流層とみられ礫を含む。しまりあり。
- 9 褐灰色土 10YR5/1 砂質土。洪水層とみられる。しまりややあり。
- 10 灰黄褐色土 10YR4/2 Hr-FA小塊・礫を少量含む。しまり弱。
- 11 Hr-FA小塊
- 12 褐灰色土 10YR4/1 Hr-FA少量、大礫を含む。
- 13 褐灰色土 10YR4/1 Hr-FA粒少量、7層の土を少量含む。

3区3号土坑(PL.10)

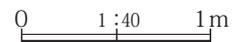


3区4号土坑(PL.10)



3区3・4号土坑

- 1 灰黄褐色土 10YR4/2 As-Kk少量、径1~3cmのHr-FA塊をわずかに含む。しまりやや弱。



第20図 1~4号土坑遺構図

第11表 土坑計測表

区	遺構名	位置	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方位	重複遺構
1区	1号土坑	X=63611 Y=-84895	隅丸長方形	(72)	58	27	N-40°-E	なし
1区	2号土坑	X=63610 Y=-84895	楕円形	68	(49)	19	N-1°-W	なし
3区	3号土坑	X=63581 Y=-84846	楕円形	114	86	28	N-71°-E	なし
3区	4号土坑	X=63582 Y=-84849	楕円形	146	102	26	N-14°-E	なし

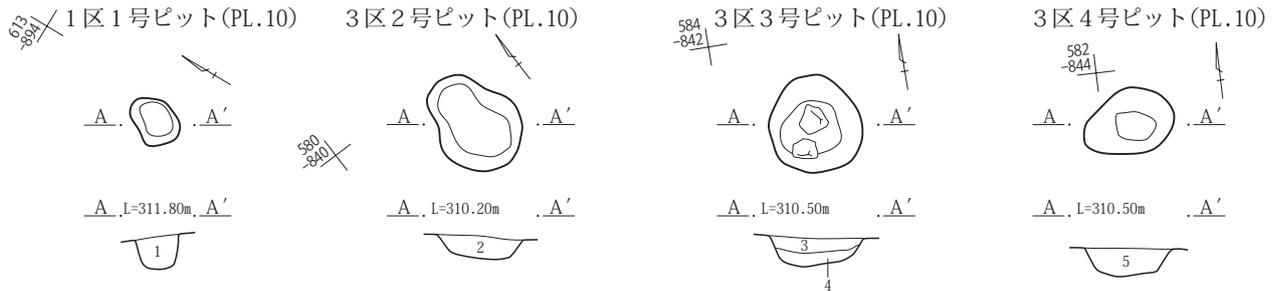
## 第5節 ピット

本遺跡の調査で検出されたピットは、1区において1号ピット、3区において2号～4号土坑の都合4基である。

1号ピットは、1区北西端部で検出された。単独で存在し、その用途を察することは難しい。遺構の時期につ

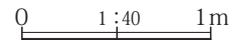
いては、埋土内にHr-FA(榛名ニッ岳渋川テフラ)泥流粒を含むことから、住居跡群と時間差のない時期の遺構と考えられる。

2号～4号ピットは、3区中央部において検出される。遺構の時期については、埋土内にHr-FA泥流塊が認められるため、同じく検出された住居跡と同時代のピット跡と推定される。



- 1 暗褐色土 10YR3/3 Hr-FA粒・径1cmの橙色粒を少量含む。しまりあり。
- 2 暗灰色土 N3/ 径1～3cmの礫を少量含む。褐色に変化している部分わずかにあり。粘性・しまり強。
- 3 褐灰色土 10YR4/1 As-Kk少量、Hr-FA粒をわずかに含む。しまりやや弱。

- 4 黄褐色土 10YR5/6 径5cmの礫を少量含む。Hr-FA泥流に3層が少量混じる。
- 5 灰黄褐色土 10YR4/2 As-Kk少量、径1～3cmのHr-FA塊をわずかに含む。しまりやや弱。



第21図 1～4号ピット遺構図

第12表 ピット計測表

区	遺構名	位置	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方位	重複遺構
1区	1号ピット	X=63612 Y=-84894	楕円形	28	24	21	N-3°-E	なし
3区	2号ピット	X=63579 Y=-84839	楕円形	57	45	14	N-4°-W	なし
3区	3号ピット	X=63583 Y=-84841	円形	51	48	17	N-3°-E	なし
3区	4号ピット	X=63581 Y=-84843	楕円形	48	35	19	N-69°-E	なし

## 第6節 遺物包含層・遺構外出土遺物

(第22~33図 PL.10・12~20)

本遺跡の1～3区において、榛名二ッ岳渋川テフラ(Hr-FA)泥流層下の遺物包含層中より出土した遺物、並びに、遺構外より出土した遺物を以下に記す。

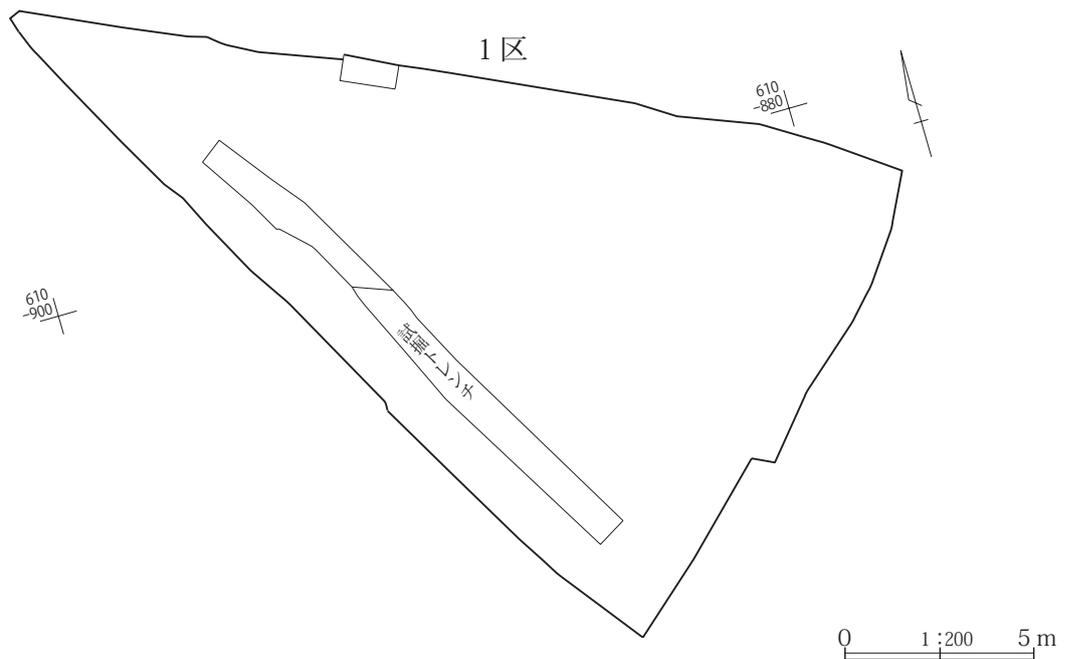
3区の榛名二ッ岳渋川テフラ(Hr-FA)泥流層下の調査において、後掲のとおり弥生時代の中期前葉～後葉、および後期中葉から後葉の遺物の出土がみられた。特徴的なものとして、少量ではあるが中期後半の遺物である栗林式土器(No.33～35)の出土があげられる。また、後期の遺物として甕の口縁下に格子状の沈線文を描くもの(No.95・117・118)があり、これらは地域色である可能性が高い。掲載品のほかにも弥生後期の土器破砕片が1区より35片、2区より192片、3区より1,616片出土しており、全体としては、3区の低地部分における弥生後期の樽式土器を中心とした後期の在地土器の出土が多く、また、その器種の構成も広いことから、確実に生活の痕跡が強いものと推察される。

縄文時代の出土遺物としては、榛名二ッ岳渋川テフラ

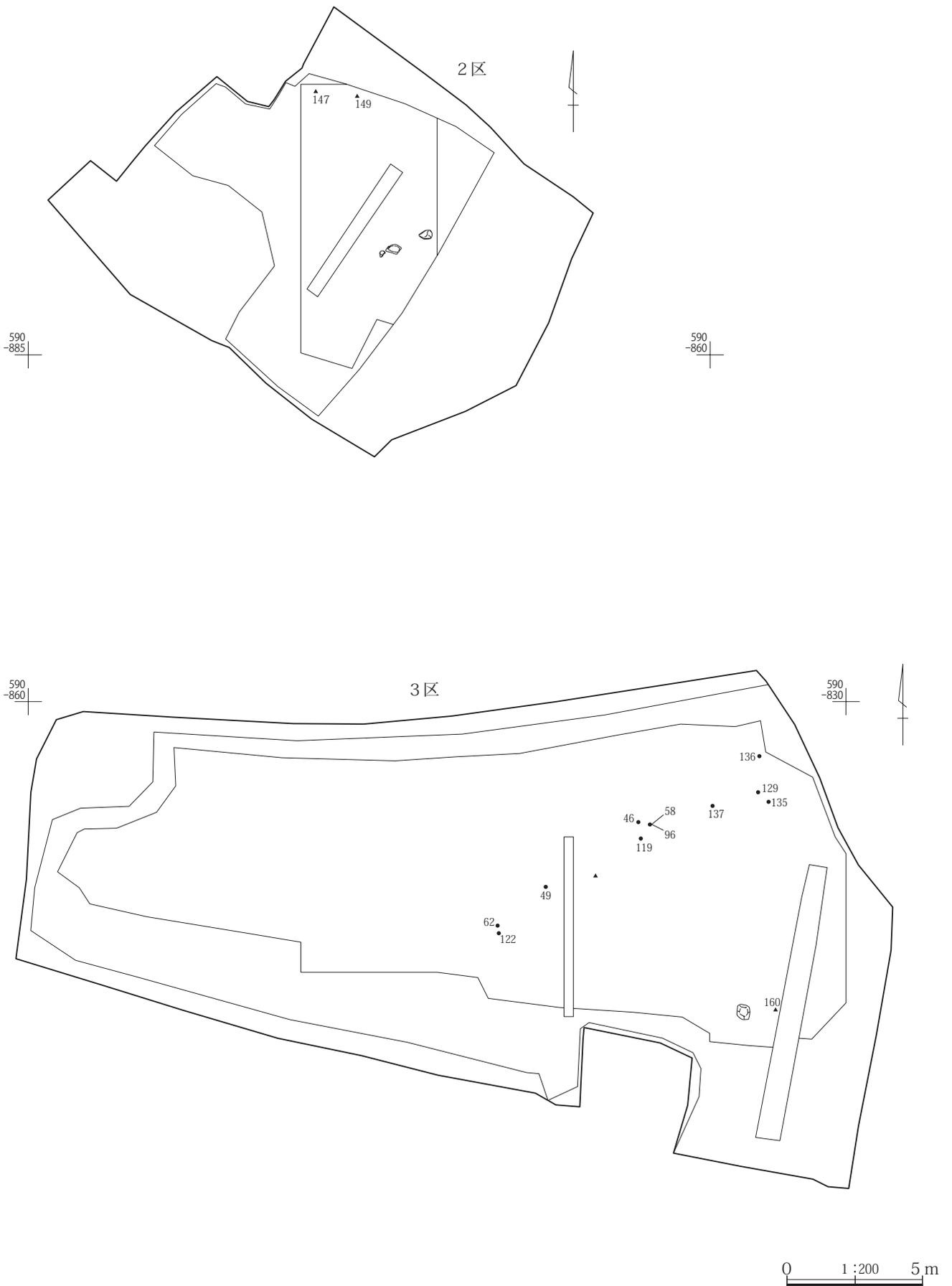
(Hr-FA)泥流層下の黒色土中より、後掲のとおり中期後半～後期・晩期末の遺物の出土が少量みられたほか、1区基本土層11層土中より後期の深鉢片が、2区より中期後半から後期の土器小破片45片の出土がみられた。

また、石器・石製品としては、土器と同様に泥流層下の黒色土中より、後掲の石鎌・スクレイパー・打製石斧・石核・凹石・磨石・敲石などの出土がみられた。出土石器中には縄文時代から弥生時代に至る石器が混在しているものと推定されるが、その分別は難しい。出土遺物の特徴として、大型のスクレイパーや二次加工のある剥片が多いことと、左右非対称の板状剥片を素材とした打製石斧の出土が上げられる。また、使用石材としては、在地石材の変質安山岩をはじめ、周辺では採取不可能なチャート・黒曜石をも含む。

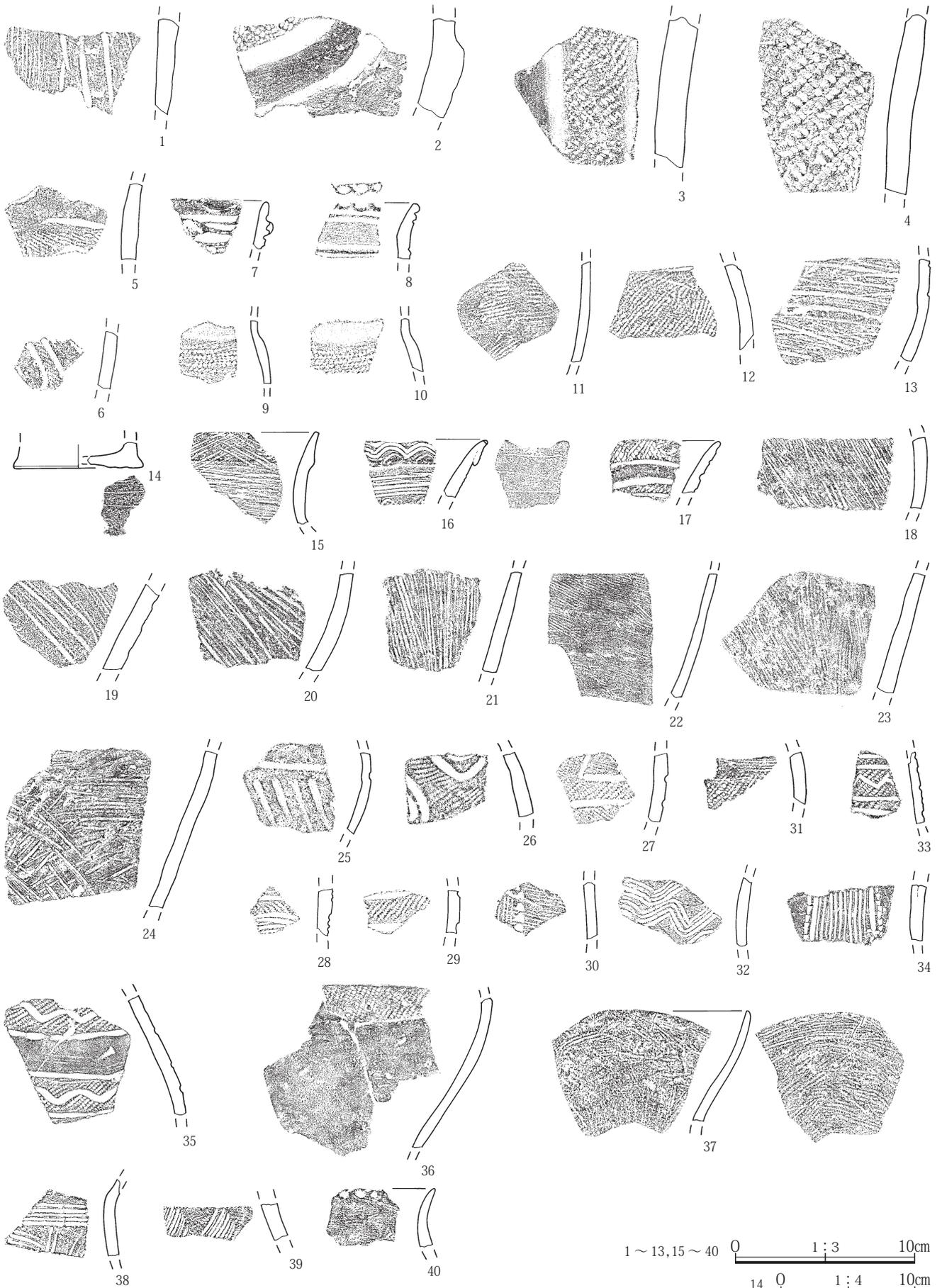
遺構外出土の土師器杯3点を除いて、包含層中から出土した遺物に該当する時期の遺構は、今回の調査において検出されていない。調査区直近の上位および下位段丘面に当該期の集落の存在が想定されるが、その集落規模は平坦面の少ない立地から、いずれの時期も小規模集落であろうと推察される。



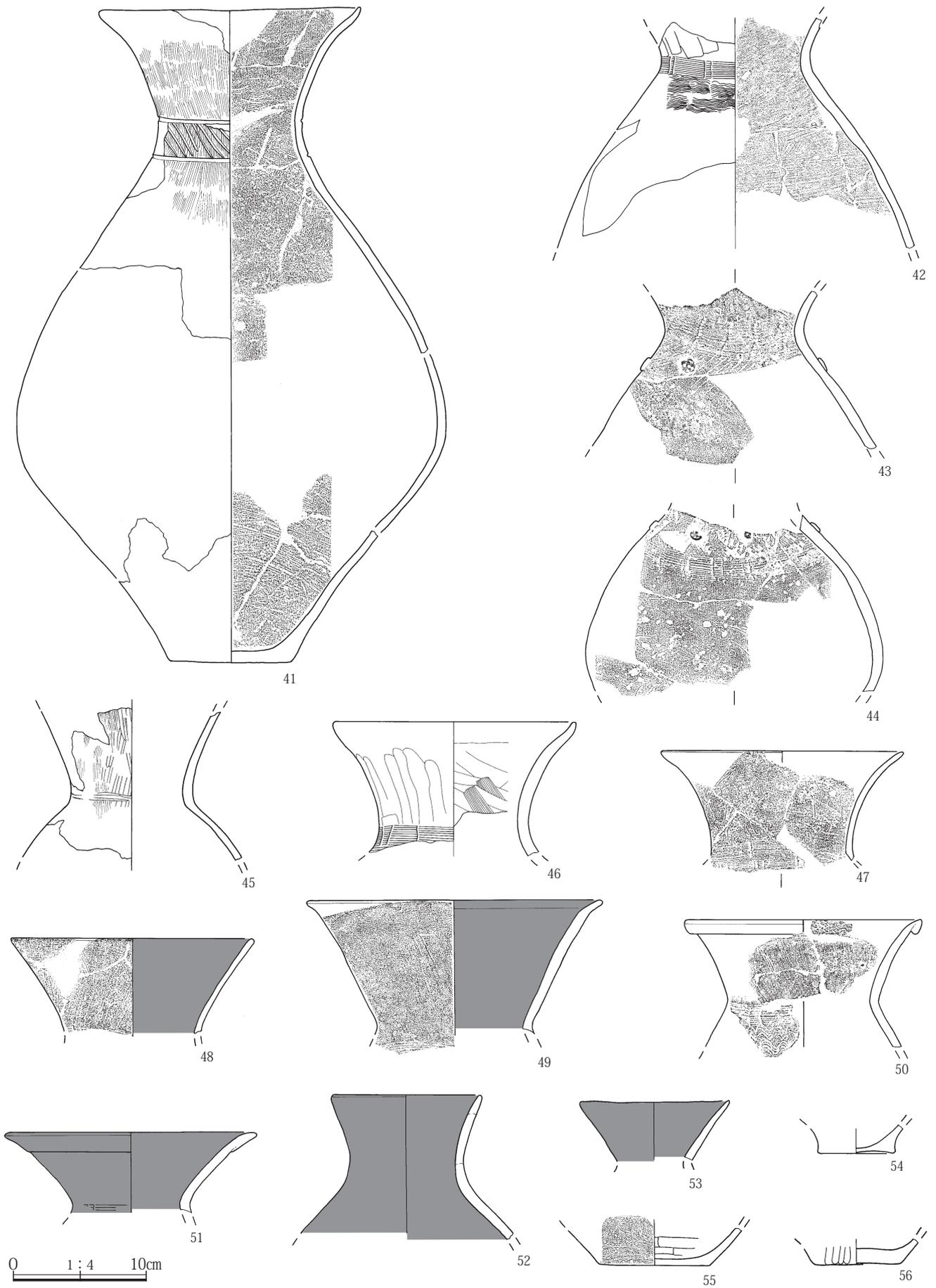
第22図 1区包含層平面図



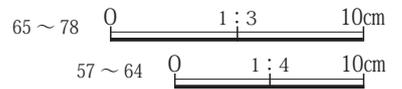
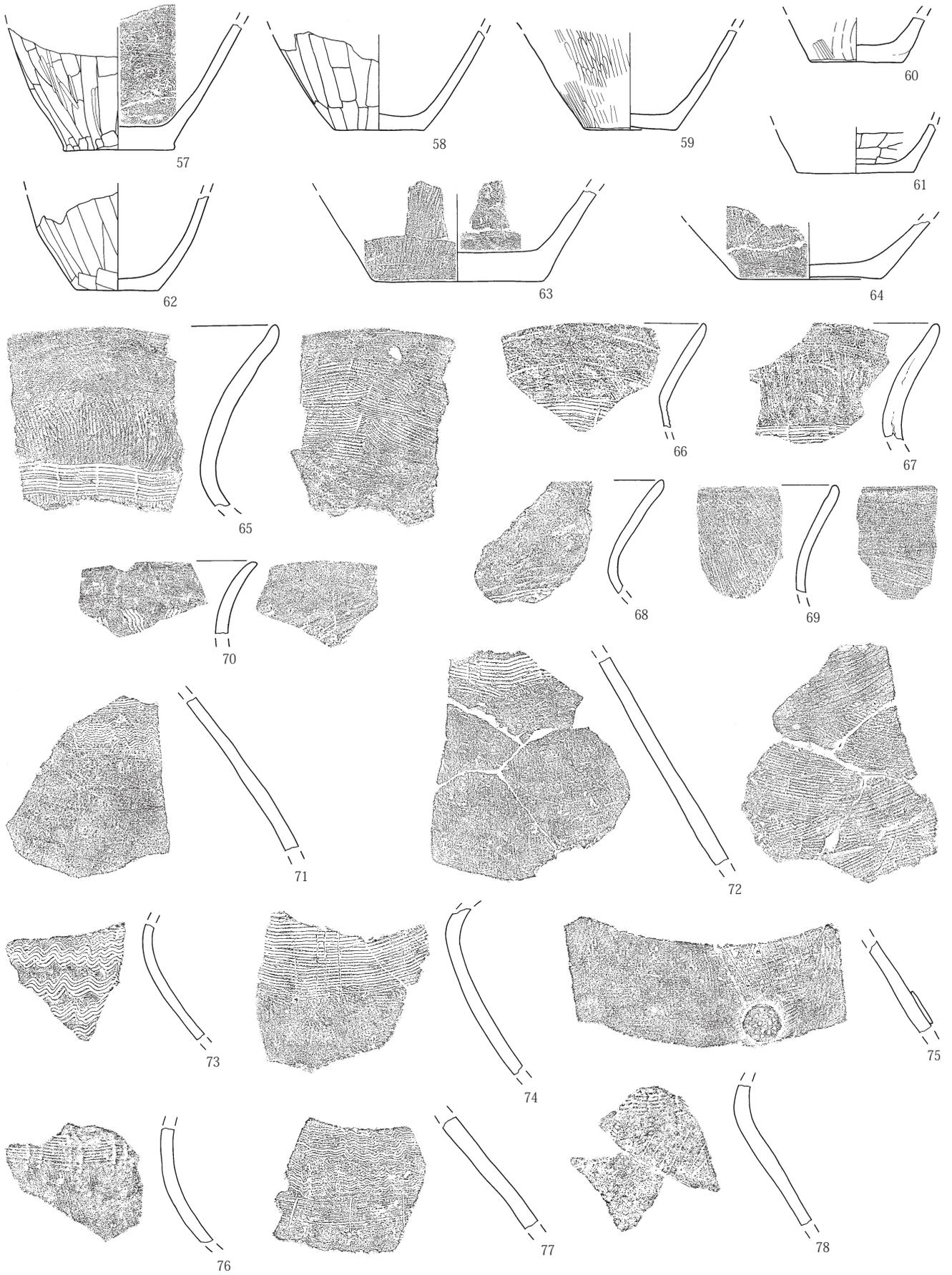
第23図 2区・3区包含層平面図



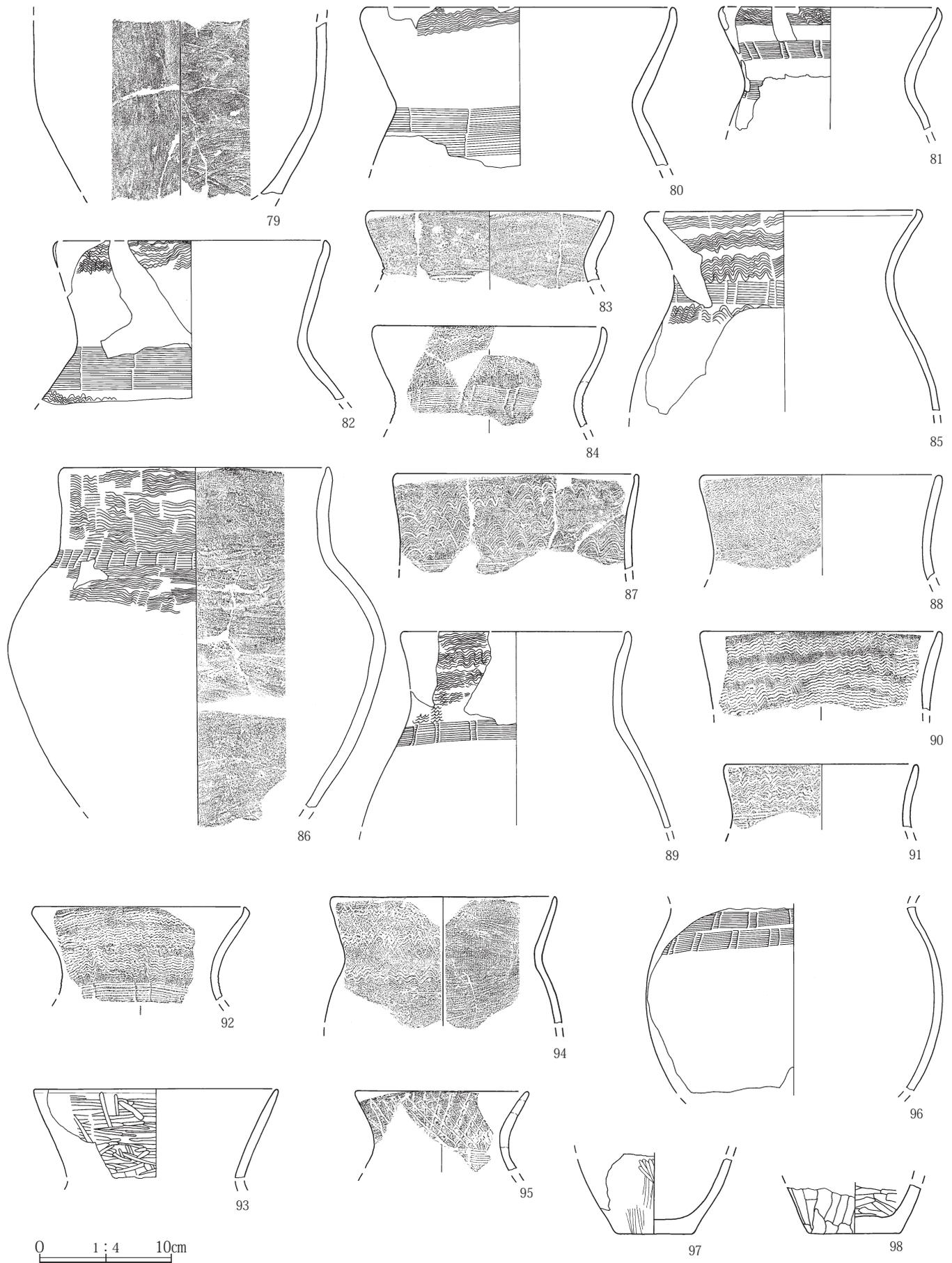
第24図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(1)



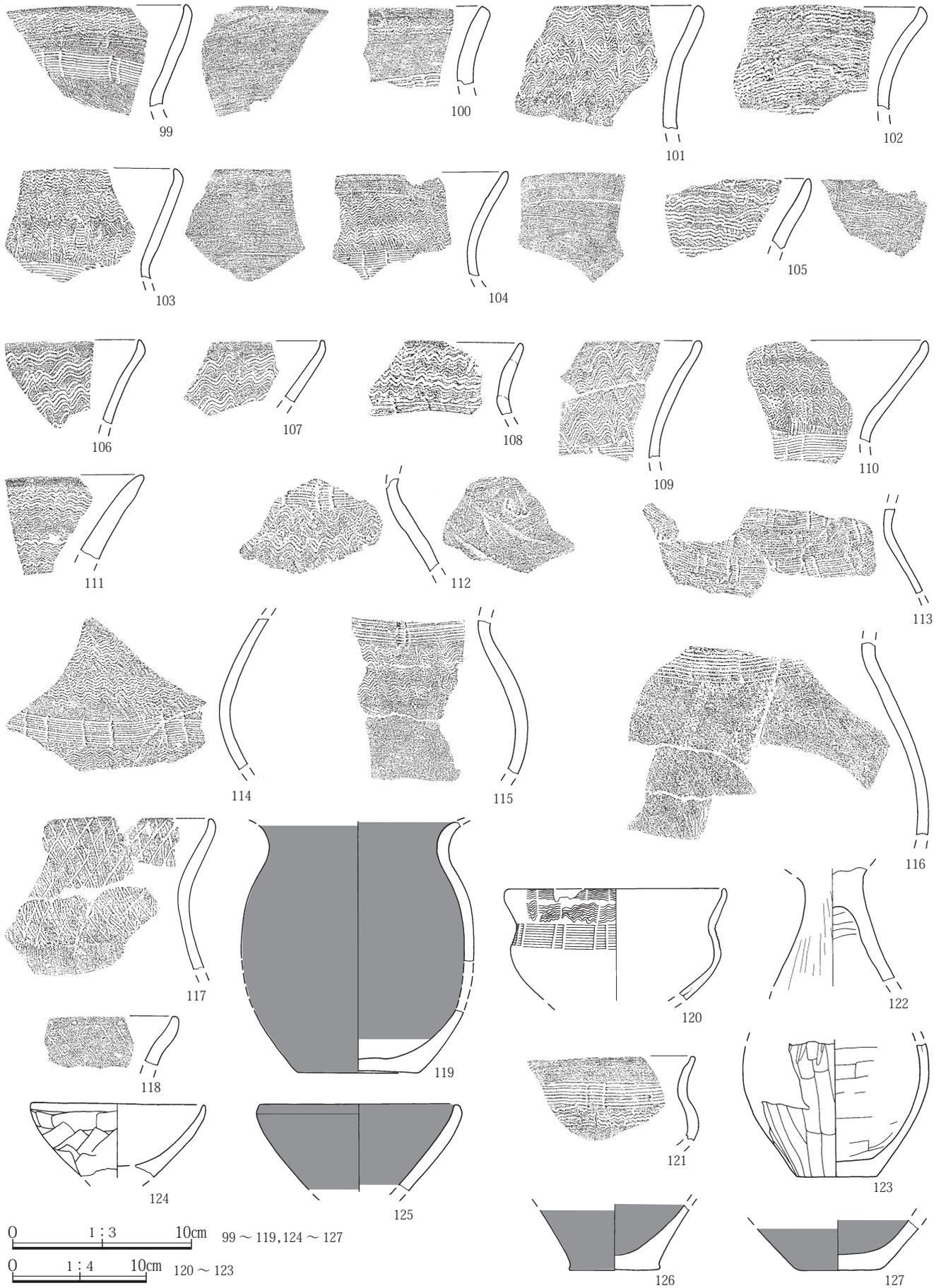
第25図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(2)



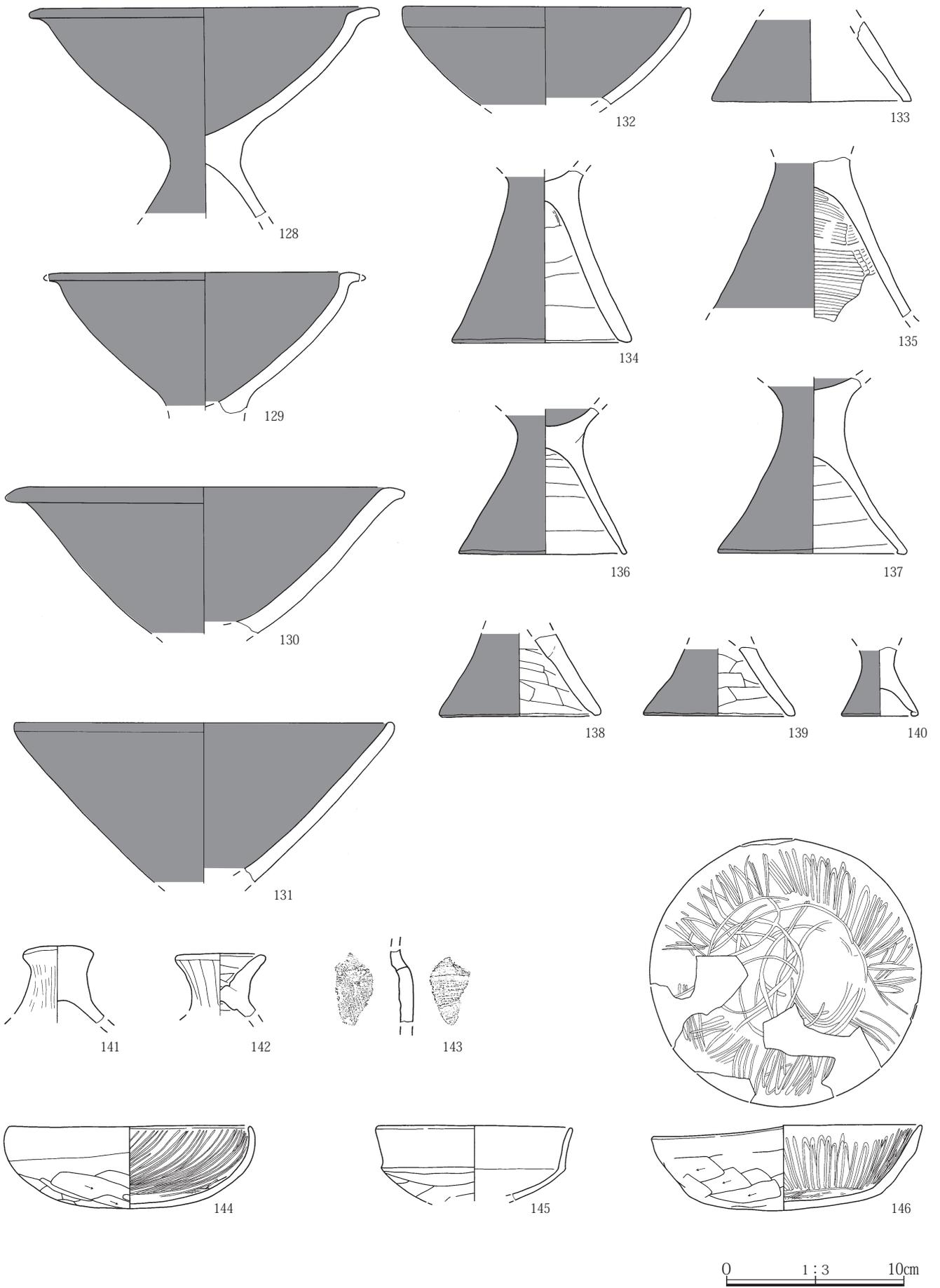
第26図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(3)



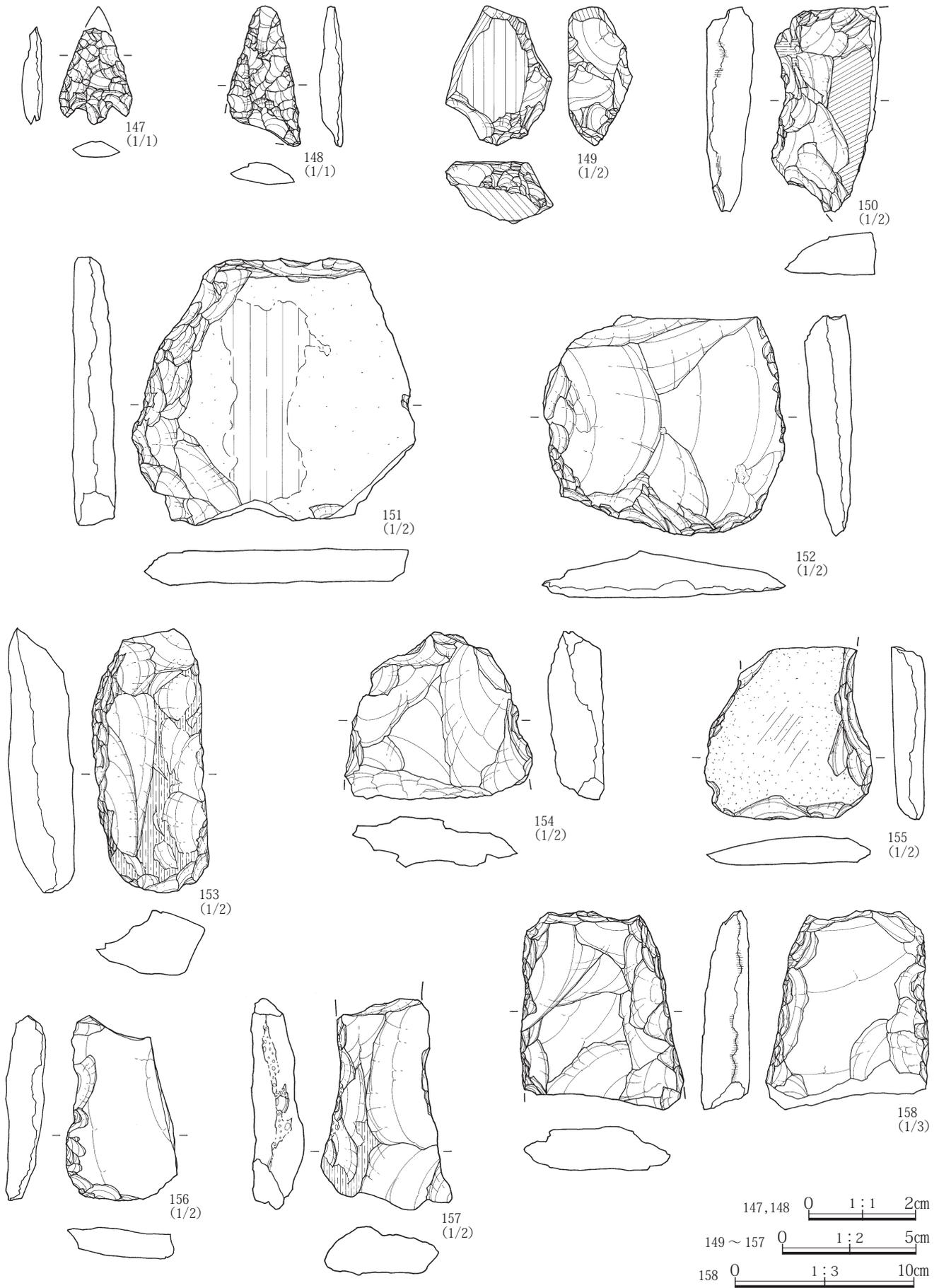
第27図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(4)



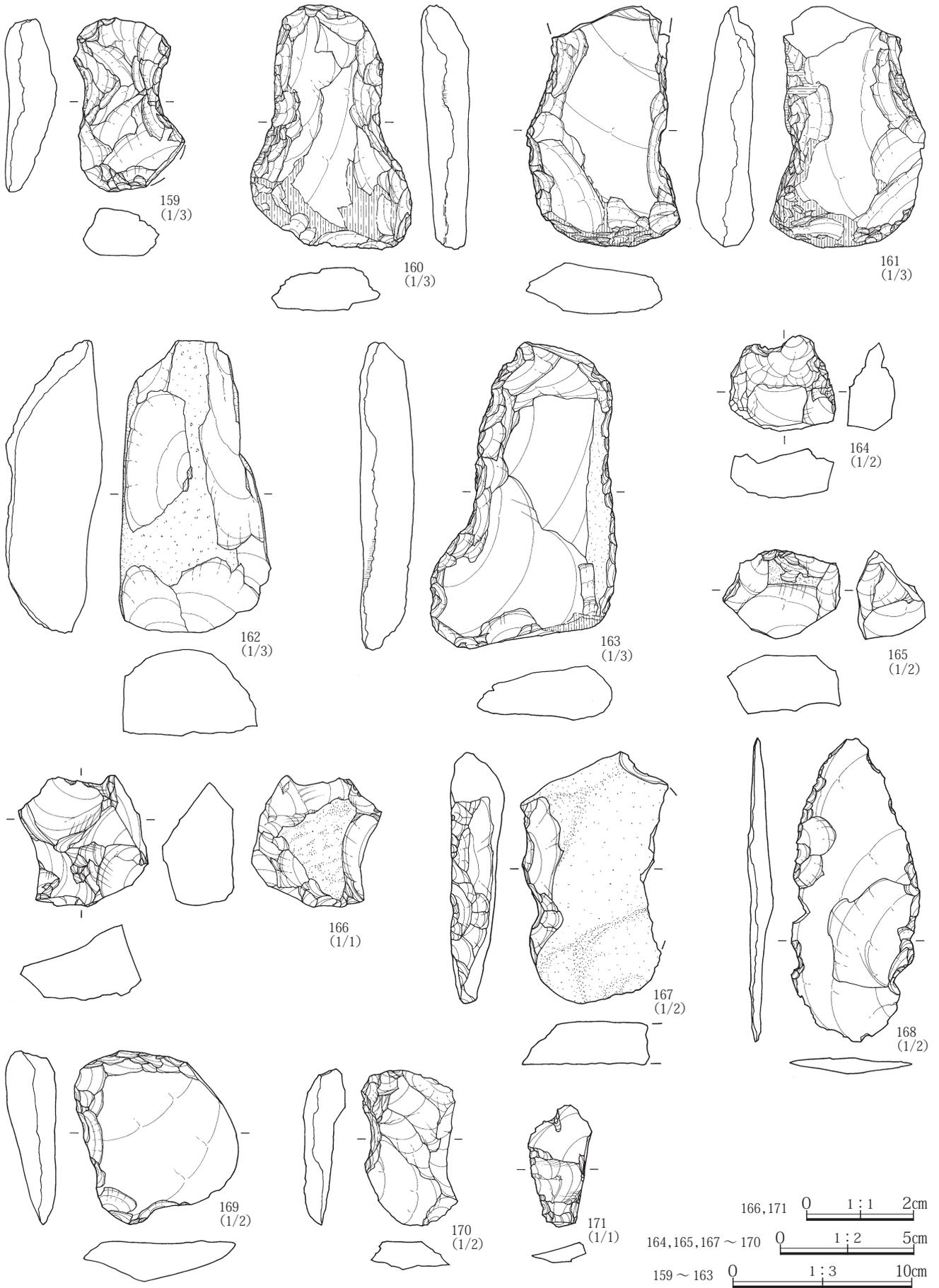
第28図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(5)



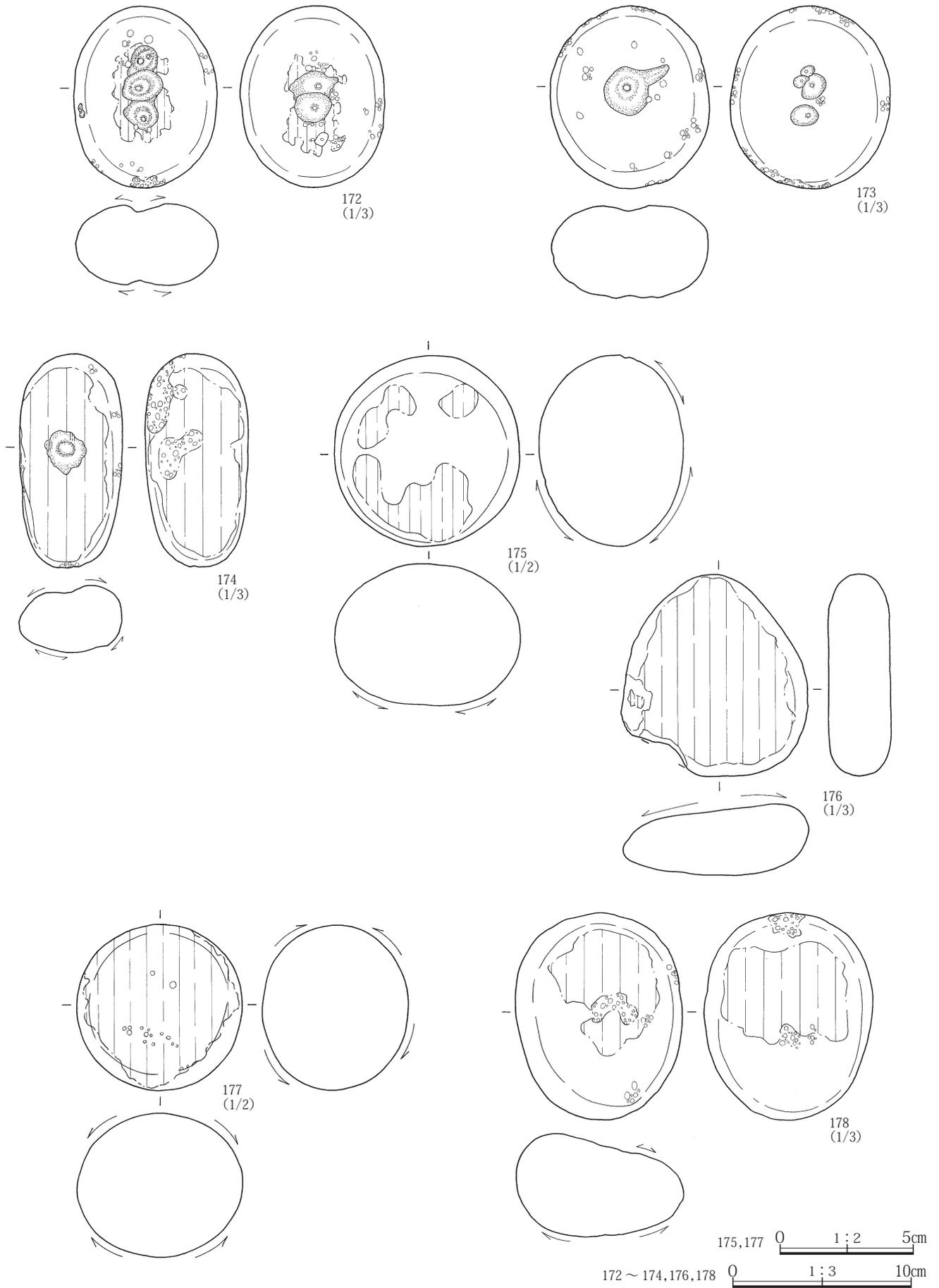
第29図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(6)



第30図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(7)



第31図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(8)



第32図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(9)



第33図 遺物包含層・遺構外出土遺物図(10)

第13表 遺物包含層・遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.12	1	縄文土器 深鉢	1区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/A/	櫛歯状工具による縦位の状線文を施し、沈線懸垂文間を磨り消す。	加曽利E3式
第24図 PL.12	2	縄文土器 深鉢	1区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	RL縄文を縦位施文し、幅広沈線と隆帯による区画文を施す。	加曽利E3式
第24図 PL.12	3	縄文土器 深鉢	1区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/A/	RL縄文を縦位施文し、幅広の沈線懸垂文間を磨り消す。内外面やや風化。	加曽利E3式
第24図 PL.12	4	縄文土器 深鉢	2区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	粗大なRL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面風化。	加曽利E3式
第24図 PL.12	5	縄文土器 深鉢	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/C/	沈線区画文内にRL縄文を充填。	称名寺式?
第24図 PL.12	6	縄文土器 深鉢	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/A/	沈線区画文内にLR縄文を充填。	堀之内2式?
第24図 PL.12	7	縄文土器 鉢	2区埋没土 口縁片			赤彩/B/	外面赤彩。断面蒲鉾状の浮線文が横位に廻り、収束部が小突起状を呈する。内面横磨き。	縄文晩期末葉
第24図 PL.12	8	縄文土器 鉢?	3区埋没土 口縁片			褐灰色/C/	口唇上面に刻目。2本単位の横線文を複数段に施文。内外面共に横研磨。	縄文晩期末葉?
第24図 PL.12	9	縄文土器 鉢	3区埋没土 体部片			鈍い黄褐色/B/	体部にLR縄文を斜位方向に施文。内外面共に研磨状の横撫で。10と同一個体。	縄文晩期末葉
第24図 PL.12	10	縄文土器 鉢	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	9と同一個体。	縄文晩期末葉
第24図 PL.12	11	縄文土器 甕	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	LR縄文を縦位施文。外面に煤状炭化物付着。内面風化。	縄文晩期末葉?
第24図 PL.12	12	縄文土器 深鉢?	2区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	LR縄文を横位施文し、横線文を施す。内面良好な横研磨。	縄文晩期末葉?
第24図 PL.12	13	縄文土器 壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	櫛歯状工具による粗い条痕文を横位に施文。内外面やや風化。	縄文晩期末葉?
第24図 PL.12	14	縄文土器 壺	3区埋没土 底部片	底	(9.5)	鈍い黄褐色/A/	底外端部がやや突出し、底面に木葉痕。内外面横磨き。	縄文晩期末葉?
第24図 PL.12	15	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片			灰褐色/A/	複合口縁。櫛歯状工具により口縁部に鋸歯状文を、頸部に横位条痕文を施す。外面の一部に煤状炭化物付着。内面横磨き。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	16	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片	口	(18.0)	鈍い黄褐色/A/	複合口縁を持ち、口唇上面に棒状工具による刻目を施す。口縁から頸部にかけて櫛描波状文と横位直線文とを交互施文。施文具は5歯、幅11mm。内面横磨き。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	17	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/B/	横線文を多段に施し、区画内にLR縄文を充填。内面横磨き。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	18	弥生土器 甕か壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	櫛歯状工具による条痕文を斜位に施す。外面の一部に煤状炭化物付着。内面風化。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	19	弥生土器 甕か壺	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/A/	斜行沈線文を施す。内面横撫で。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	20	弥生土器 甕か壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	櫛歯状工具による条痕文を斜位に施す。内面風化。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	21	弥生土器 甕か壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	櫛歯状工具による条痕文を縦位に施す。内面風化。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	22	弥生土器 甕	2区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	刷毛目状の細密な条痕文を斜位に施文。内面横撫で。外面に煤状炭化物付着。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	23	弥生土器 甕	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	刷毛目状の条痕文を縦位に施文。内面横撫で。外面の一部に煤状炭化物付着。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	24	弥生土器 甕	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	木口状工具による粗い条痕文を斜・横位に施す。内面横撫で。	弥生中期前葉
第24図 PL.12	25	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	1条の横線文を挟んで羽状沈線文を施す。内外面共に風化により整形痕不明瞭。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	26	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	単沈線により曲線文を施し、LR縄文を充填。内面横磨き。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	27	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			鈍い褐色/C/	幾何学状の沈線区画文内にLR縄文を充填。外面斜位刷毛目、内面横刷毛目。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	28	弥生土器 鉢?	3区埋没土 胴部片			褐灰色/C/	櫛描状の横線文を複数帯施文し、その間にLR縄文を充填。内面横撫で。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	29	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/B/	横位の沈線区画内にLR縄文を充填。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	30	弥生土器 甕	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	櫛歯状工具による縦横の直線文を施し、同工具の刺突文を縦位に連続施文。内面風化により整形痕不明瞭。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	31	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			褐灰色/B/	LR縄文を横位施文し、櫛描横線文を施す。内面横研磨。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	32	弥生土器 甕	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/A/	粗い櫛描波状文を複数帯に施文。施文具は4歯、幅9mm。内外面共に風化により整形痕不明瞭。	弥生中期中葉
第24図 PL.12	33	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	肩部に横線文を多段に施し、LR縄文を充填後に横位鋸歯文を施文。内面やや風化。	栗林式
第24図 PL.12	34	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	櫛描垂下文を複数条施し、押し引きの結節沈線文や単沈線文を縦位施文。内面横撫で。	栗林式
第24図 PL.12	35	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片			鈍い黄褐色/B/	肩部に横線文を多段に施し、LR縄文を充填後に沈線波状鋸歯文を施文。外面横磨き、内面横撫で。	栗林式

第4章 検出遺構と出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第24図 PL.12	36	弥生土器 壺	2区埋没土 胴部片			褐灰色/A/	肩部下位にLR縄文を横位施文。内外面横篋撫で。	弥生中期後葉	
第24図 PL.12	37	弥生土器 (鉢)	3区埋没土 口縁片			褐灰色/B/	外面口縁横篋撫で後に横篋磨き、体部縦篋撫で後に縦篋磨き。内面横篋撫で後、横篋磨き。	弥生後期初頭	
第24図 PL.12	38	弥生土器 甕	3区埋没土 胴部片			黒褐色/B/	頸部に等間隔止め櫛描簾状文を1帯施文。以下に同工具の縦位羽状文を施す。	弥生後期初頭	
第24図 PL.12	39	弥生土器 甕	3区埋没土 頸部片			鈍い黄燈色/A/	櫛歯状工具による櫛描斜行文を施す。内面横篋磨き。	弥生後期初頭	
第24図 PL.12	40	弥生土器 甕	3区埋没土 口縁片			鈍い黄燈色/B/	口唇外端に押圧文を施す。内外面共に横撫で。	弥生後期初頭	
第25図 PL.13	41	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～底部1/3	口 底	(19.4) 8.8	高 (49.0)	鈍い黄燈色/A/	頸部の横位細沈線文間に斜位細沈線文を充填。外面は縦ハケ目後に縦磨き、内面は横ハケ目。外面肩部に黒斑。内外面風化。	弥生後期初頭
第25図 PL.13	42	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部～胴部1/3				鈍い燈色/A/	頸部に2連止め櫛描簾状文、肩部に櫛描波状文を2帯施す。施文具は9歯、幅14mm。外面口縁部縦篋撫で、内面横篋撫で。	樽式
第25図 PL.13	43	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部～肩部1/5				鈍い黄燈色/A/	外面一部赤彩残る。頸部に等間隔止め櫛描簾状文を2帯施文。肩部に鋸歯状の細沈線三角文を施し、細沈線を充填。三角文の基部にボタン状貼付文を施す。施文具は7歯、幅16mm。外面被熱風化と一部に煤状炭化物付着。内面横篋磨き。	樽式
第25図 PL.13	44	弥生土器 壺	3区埋没土 肩部～胴部1/3				鈍い黄燈色/B/	肩部に2連止め櫛描簾状文を2段に施文し、その間に斜線を充填した鋸歯状の連続三角文を施す。三角文の基部にボタン状貼付文を施す。外面胴部に赤彩。櫛描施文具は10歯、幅18mm。内面風化。	樽式
第25図 PL.13	45	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部～肩部1/4				鈍い黄燈色/B/	外面縦刷毛後、縦篋磨き。内面横篋磨き。内外面やや風化。	樽式
第25図 PL.13	46	弥生土器 壺	3区北東 口縁～頸部3/4	口	18.0		鈍い黄燈色/A/	頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施す。施文具は10歯、幅16mm。外面横撫で後、縦篋磨き。内面横篋撫で後、横篋磨き。	弥生後期初頭
第25図 PL.14	47	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～頸部1/3	口	(18.0)		鈍い黄燈色/B/	内面赤彩。頸部に2連止め櫛描簾状文を2帯施す。施文具は10歯、幅12mm。外面縦刷毛後、縦篋磨き。内面横篋磨き、一部に煤状炭化物付着。	樽式
第25図 PL.14	48	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～頸部1/5	口	(17.8)		灰黄褐色/B/	内面赤彩。頸部に櫛描簾状文を施す。外面縦刷毛目後、口縁横撫で。内面横刷毛目後、横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	49	弥生土器 壺	3区中央 口縁～頸部1/2	口	(21.6)		鈍い黄燈色/A/	口唇部が水平状に短く外折。頸部に櫛描簾状文を施す。口縁部内外面赤彩。外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	50	弥生土器 壺か甕	3区埋没土 口縁～頸部1/2	口	(17.4)		鈍い黄燈色/A/	複合口縁。口縁に櫛描波状文を、頸部に2連止め櫛描簾状文と波状文を各2帯施す。施文具は7歯、幅13mm。外面縦刷毛後、縦篋磨き。内面横刷毛目後、横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	51	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～頸部1/2	口	(18.8)		赤彩/B/	複合口縁。内外面赤彩。頸部に櫛描簾状文を施す。外面口縁横篋磨き、頸部縦篋磨き。内面横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	52	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～胴部上半 1/4	口	(10.8)		鈍い黄燈色/B/	内外面赤彩。外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	53	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁～頸部1/4	口	(11.1)		赤彩/B/	内外面赤彩、横篋磨き。	樽式
第25図 PL.14	54	弥生土器 壺	3区埋没土 底部1/2	底	5.6		鈍い黄燈色/A/	外面縦篋撫で、内面横篋磨き。底面端部周縁が僅かに高まる。	樽式
第25図 PL.14	55	弥生土器 壺	3区埋没土 底部1/2	底	8.2		灰褐色/A/	外面横刷毛目、内面横撫で。	樽式
第25図 PL.14	56	弥生土器 壺	3区埋没土 底部2/3	底	6.3		鈍い黄褐色/A/	外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式
第26図 PL.14	57	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部下半～底部 1/2	底	8.1		鈍い褐色/A/	外面縦篋撫で後、縦篋磨き。内面横篋撫で。外面に黒斑。	樽式
第26図 PL.14	58	弥生土器 壺	3区北東 底部完存	底	6.7		鈍い黄燈色/A/	外面縦篋撫で、内面横・斜位篋磨き。外面やや被熱風化。	樽式
第26図 PL.14	59	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部～底部片	底	6.8		灰褐色/B/	外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式?
第26図 PL.14	60	弥生土器 壺	3区埋没土 底部1/4	底	(6.7)		褐灰色/A/	外面縦篋撫で、内面風化。	樽式?
第26図 PL.14	61	弥生土器 壺	3区埋没土 底部完存	底	8.4		鈍い黄燈色/A/	外面被熱風化、一部に煤状炭化物付着。内面横篋撫で。	樽式
第26図 PL.14	62	弥生土器 壺	3区中央 底部完存	底	5.9		褐灰色/A/	外面縦篋撫で、内面横・斜位篋磨き。	樽式
第26図 PL.14	63	弥生土器 壺	3区埋没土 底部ほぼ完存	底	12.5		鈍い黄燈色/A/	外面篋撫で後、縦篋磨き。内面横撫で。	樽式
第26図 PL.14	64	弥生土器 壺	3区埋没土 底部完存	底	10.7		鈍い褐色/A/	外面横・縦篋撫で、内面風化。	樽式
第26図 PL.14	65	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				鈍い黄燈色/A/	頸部に等間隔止めの櫛描簾状文。施文具は10歯、幅18mm。外面縦刷毛目後、横撫で。内面横刷毛目。	樽式
第26図 PL.14	66	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				鈍い黄燈色/B/	頸部に櫛描横線文を施文し、縦沈線で区切る。内外面斜位刷毛目後、横撫で。外面の一部に煤状炭化物付着。	樽式

第6節 遺物包含層・遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第26図 PL.14	67	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				鈍い黄燈色/B/	頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施す。外面横篋撫で後、縦篋磨き。内面横篋撫で。	樽式
第26図 PL.14	68	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				黒褐色/B/	頸部に櫛描簾状文を施す。内外面共に横篋撫で。	樽式
第26図 PL.14	69	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				黒褐色/B/	外面縦篋撫で後、縦篋磨き、口縁横撫で。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式
第26図 PL.14	70	弥生土器 壺	3区埋没土 口縁片				鈍い褐色/A/	頸部以下に櫛描波状垂下文を施す。施文具は4歯、幅7mm。内外面横撫で。	樽式
第26図 PL.15	71	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片				鈍い黄燈色/B/	肩部に櫛描横線文と波状文を交互施文。施文具は10歯、幅13mm。内外面横篋磨き。	樽式
第26図 PL.15	72	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部片				鈍い黄燈色/A/	頸部に2連止め櫛描簾状文を施す。外面縦篋磨き、内面横刷毛目後、頸部近辺横篋磨き。	樽式
第26図 PL.15	73	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部片				鈍い褐色/B/	頸部に櫛描波状文を複数帯施文。施文具は6歯、幅8mm。外面縦刷毛目、内面横篋磨き。	樽式
第26図 PL.15	74	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部片				褐灰色/A/	頸部に櫛描横線文を複数帯施し、篋状工具による3本単位の垂下細沈線文を施文。施文具は9歯、幅15mm。外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式
第26図 PL.15	75	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片				鈍い黄燈色/B/	外面赤彩。肩部に細沈線三角文を描いて斜線文を充填し、その先端部に刺突充填ボタン状貼付文を施す。外面横刷毛目後、縦篋磨き。内面横篋磨き。	樽式
第26図 PL.15	76	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部片				鈍い黄燈色/A/	頸部に2連止め櫛描簾状文を施す。内外面共に風化により整形痕不明瞭。	樽式
第26図 PL.15	77	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片				鈍い黄燈色/B/	肩部に櫛描波状文を複数帯施文。下位に櫛描横線文を施し、縦沈線で等間隔に区切る。施文具は12歯、幅18mm。外面横篋磨き、内面横篋撫で。	樽式
第26図 PL.15	78	弥生土器 壺	3区埋没土 頸部片				鈍い黄燈色/A/	頸部に櫛描簾状文を複数帯施し、下位に篋状工具による斜行細沈線文を施文。内外面共に風化により整形痕不明瞭。	樽式
第27図 PL.15	79	弥生土器 壺	3区埋没土 胴部片				鈍い褐色/A/	外面縦篋磨き、内面横刷毛目後、横篋磨き。外面の一部に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.15	80	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/2	口	(23.7)		灰褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文2帯を施文。施文具は11歯、幅18mm。外面斜位篋撫で、一部に煤状炭化物付着。内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.15	81	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/3	口	(16.2)		褐灰色/B/	口縁部に櫛描波状文を施し、その下位と頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。施文具は10歯、幅15mm。外面縦篋磨き、内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.15	82	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～頸部1/4	口	(20.2)		鈍い黄褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を2帯施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文を2帯、下位に櫛描波状文を施文。外面に煤状炭化物付着。内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.15	83	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片	口	(18.2)		褐灰色/A/	頸部に櫛描簾状文を施す。外面横撫で。内面横篋撫で後、横篋磨き。外面の一部に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.15	84	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～頸部1/5	口	(17.0)		黒褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を2帯施文。施文具は9歯、幅13mm。外面縦刷毛目、内面横篋磨き。内外面被熱風化。	樽式
第27図 PL.15	85	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/3	口	(20.3)		鈍い褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文と櫛描波状文を施文。施文具は9歯、幅16mm。外面縦篋磨き、内面被熱風化と一部に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.15	86	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/5	口	(20.0)		灰褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を4帯施す。頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文し、下位に櫛描波状文を3帯施す。施文具は8歯、幅15mm。外面被熱風化、内面横篋撫で後に横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	87	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁部1/3	口	(18.0)		鈍い褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文。施文具は7歯、幅15mm。内面横撫で後に横篋磨き。内面一部に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.16	88	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁部1/3	口	(18.2)		褐灰色/B/	口縁部に櫛描波状文を4～5帯施す。施文具は10歯、幅15mm。内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	89	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/3	口	(17.0)		褐灰色/B/	口縁部に櫛描波状文を2帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。施文具は7歯、幅13mm。外面縦篋磨き。内面横篋磨き、一部に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.16	90	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁部1/3	口	(18.0)		黒褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施す。施文具は5歯、幅11mm。内面横篋磨き。外面縦刷毛目後、横篋磨き。内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	91	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁部1/3	口	(14.4)		鈍い褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文。施文具は7歯、幅10mm。内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	92	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～頸部1/5	口	(15.8)		黒褐色/B/	口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。施文具は9歯、幅18mm。内面横篋磨き、煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.16	93	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁部1/3	口	(18.4)		鈍い黄燈色/B/	外面横篋磨き、内面横刷毛目後に横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	94	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～胴部1/3	口	(16.7)		褐灰色/A/	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を3帯施し、細沈線の斜格子文を重複施文。施文具は9歯、幅16mm。外面やや被熱風化。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	95	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁～頸部1/3	口	(13.0)		褐灰色/B/	口縁部に細沈線斜格子文を施し、頸部に櫛描簾状文を施文。内外面横篋撫で、外面に煤状炭化物付着。	樽式
第27図 PL.16	96	弥生土器 甗	3区北東 頸部～胴部1/3				灰褐色/B/	頸部に2連止め櫛描簾状文を2帯施文。施文具は9歯、幅14mm。外面被熱風化、内面横篋磨き。	樽式
第27図 PL.16	97	弥生土器 甗	3区埋没土 底部2/3	底	5.9		褐灰色/A/	外面縦篋磨き、内面被熱風化。外面の一部に煤状炭化物付着。	樽式

第4章 検出遺構と出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.16	98	弥生土器 甗	3区埋没土 底部1/2	底	6.8		鈍い黄褐色/A/ 外面縦篋撫で、内面横篋撫で。底面に煤状炭化物付着。	樽式
第28図 PL.16	99	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に2連止め櫛描簾状文を2帯施し、口縁に櫛描波状文を重複施文。施文具は10歯、幅13mm。外面口縁横撫で。外面斜位篋撫で後、縦篋磨き。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.16	100	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。外面横撫で、内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.16	101	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			褐灰色/A/ 口縁部に櫛描波状文を3帯施文。施文具は9歯、幅15mm。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.16	102	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			褐灰色/B/ 口縁部に乱雑な櫛描波状文を4帯施し、頸部に櫛描簾状文を施文。施文具は9歯、幅17mm。内外面被熱風化。	樽式	
第28図 PL.16	103	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に櫛描簾状文を施文。施文具は8歯、幅13mm。外面縦刷毛目後、縦磨き。内面横刷毛目後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.16	104	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を2帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を2段施文。施文具は9歯、幅12mm。外面口縁横撫で。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	105	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を5帯施文。施文具は3歯、幅6mm。外面斜位刷毛目後、縦篋磨き。内面横刷毛目後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	106	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を3帯施文。施文具は5歯、幅12mm。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	107	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を3帯施文。施文具は4歯、幅8mm。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	108	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を2帯施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文。施文具は6歯、幅15mm。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	109	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			褐灰色/B/ 口縁部に櫛描波状文を2帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。施文具は10歯、幅18mm。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	110	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			黒褐色/B/ 口縁部に櫛描波状文を3帯施し、頸部に2連止め櫛描簾状文を施文。施文具は7歯、幅12mm。内面横篋撫で後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	111	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/A/ 口縁部に櫛描波状文を2帯施文。施文具は13歯、幅20mm。内面赤彩、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	112	弥生土器 甗	3区埋没土 頸部片			鈍い黄褐色/A/ 頸部に2連止め櫛描簾状文と波状文2帯を施文。施文具は7歯、幅12mm。内面横刷毛目後、横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	113	弥生土器 甗	3区埋没土 頸部片			鈍い褐色/B/ 頸部に2連止め櫛描簾状文を3帯施し、下位に櫛描波状文を施文。施文具は10歯、幅12mm。内面横篋磨き。外面被熱風化。	樽式	
第28図 PL.17	114	弥生土器 甗	3区埋没土 頸部片			鈍い黄褐色/A/ 口縁部から頸部に2帯の櫛描波状文、2連止め櫛描簾状文及び櫛描波状文を施す。施文具は10歯、幅13mm。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	115	弥生土器 甗	3区埋没土 頸部片			黒褐色/B/ 頸部に2連止め櫛描簾状文と波状文2帯を施文。施文具は8歯、幅12mm。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	116	弥生土器 甗	3区埋没土 頸部～胴部片			褐灰色/B/ 頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文。施文具は9歯、幅16mm。外面斜位篋撫で後、横位篋磨き。内面横篋磨き。外面に煤状炭化物付着。	樽式	
第28図 PL.17	117	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/B/ 口縁部に細沈線の斜格子文を施す。外面縦篋撫で後、横撫で。内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	118	弥生土器 甗	3区埋没土 口縁片			鈍い黄褐色/A/ 口縁部に細沈線斜格子文を施す。外面横撫で、内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	119	弥生土器 短頸壺	3区北東 頸部～底部1/2	底	6.6	赤彩/B/ 外面赤彩、内面口縁～胴部下位赤彩。外面磨き、内面風化。	樽式	
第28図 PL.17	120	弥生土器 台付甗	3区埋没土 口縁～胴部1/3	口	(16.2)	褐灰色/B/ 口縁部に櫛描波状文を4帯施し、頸部に等間隔止め櫛描簾状文を施文。施文具は10歯、幅15mm。外面縦篋磨き、内面横篋撫で。	樽式	
第28図 PL.17	121	弥生土器 台付甗	3区埋没土 口縁～頸部片			黒褐色/B/ 頸部に2連止め櫛描簾状文と波状文を施文。施文具は8歯、幅12mm。外面口縁横撫で、内面横篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	122	弥生土器 台付甗	3区中央 脚部1/2			鈍い黄褐色。/B/ 縦篋磨き、被熱風化。内面横篋撫で。	樽式	
第28図 PL.17	123	弥生土器 片口鉢?	3区埋没土 胴部～底部1/2	底	6.0	褐灰色/A/ 外面縦篋撫で後、一部縦篋磨き。内面横篋撫で後、斜位篋磨き。	樽式	
第28図 PL.17	124	弥生土器 鉢	3区埋没土 口縁片	口	(9.6)	鈍い黄褐色/B/ 外面斜位篋撫で後、口縁横撫で。内面横撫で。	樽式	
第28図 PL.17	125	弥生土器 鉢	3区埋没土 口縁1/3	口	(10.8)	赤彩/B/ 内外面赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第28図 PL.17	126	弥生土器 鉢	3区埋没土 底部1/2	底	(5.0)	赤彩/B/ 内外面赤彩。外面縦磨き。内面横磨き。底面端部は外側に若干突出。	樽式	
第28図 PL.17	127	弥生土器 鉢	3区埋没土 底部片	底	4.8	赤彩/A/ 内外面赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.17	128	弥生土器 高杯	3区埋没土 杯部～脚部2/3	口	(18.0)	赤彩/B/ 口縁が短く水平に外折。脚部内面を除く内外面赤彩。外面縦篋磨き。内面横篋撫で後、磨き。	樽式	
第29図 PL.18	129	弥生土器 高杯	3区北東 杯部2/3	口	16.0	赤彩/B/ 口縁が短く水平に外折。内外面赤彩。外面口縁部横磨き、以下縦磨き。内面横磨き。内面風化。	樽式	
第29図 PL.17	130	弥生土器 高杯	3区埋没土 杯部完存	口	20.1	赤彩/B/ 口縁が短く水平に外折。内外面赤彩。外面口縁部横磨き、以下縦磨き。内面横磨き。	樽式	

第6節 遺物包含層・遺構外出土遺物

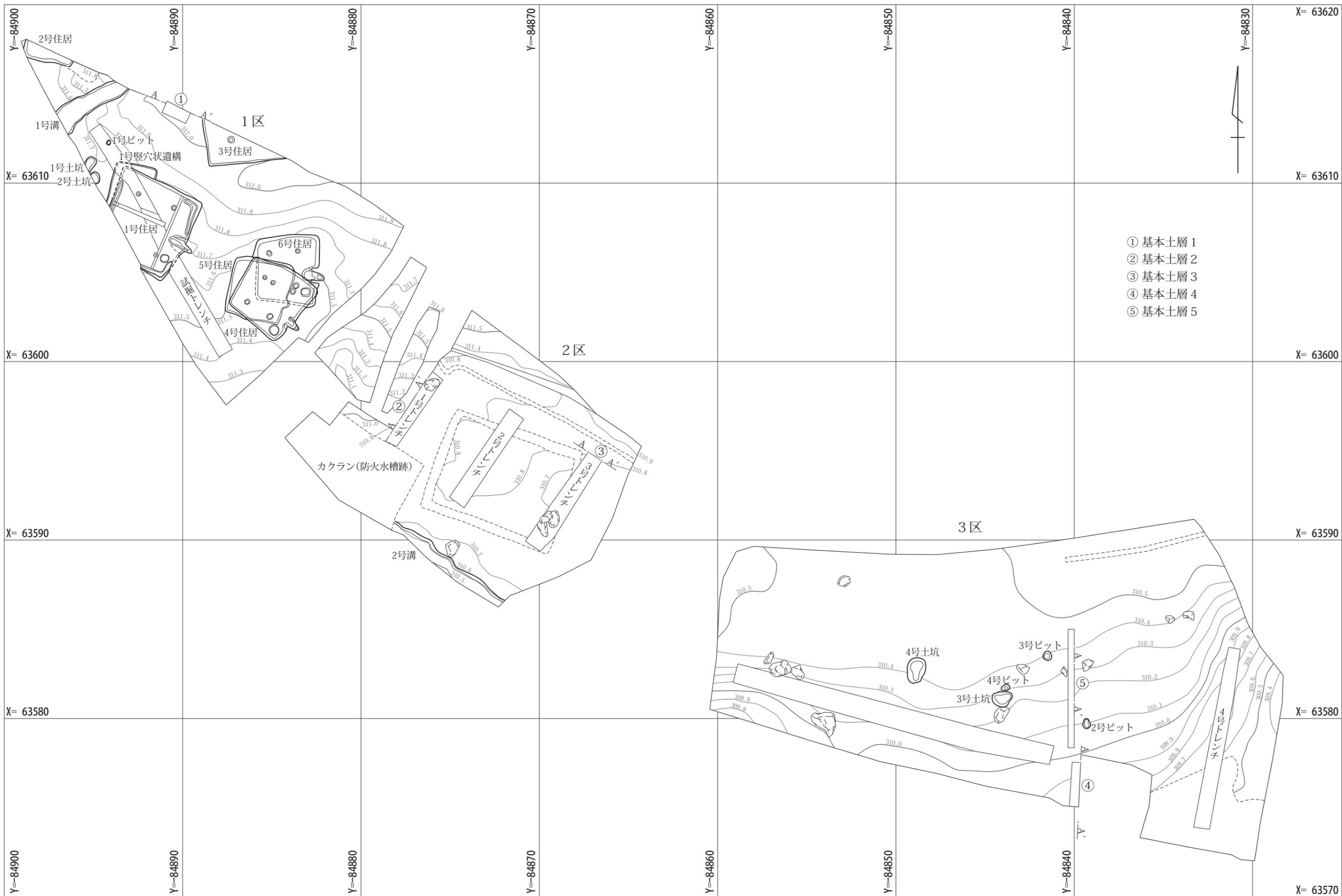
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm・g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第29図 PL.18	131	弥生土器 高杯	3区埋没土 杯部片	口	(21.0)		赤彩/B/	内外面赤彩。外面口縁部横磨き、以下縦磨き。内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	132	弥生土器 高杯	3区埋没土 杯部1/3	口	(16.0)		赤彩/B/	内外面共に赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	133	弥生土器 高杯	3区埋没土 脚部1/2	脚 径	11.2		黒褐色/B/	外面赤彩、縦磨き。内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	134	弥生土器 高杯	3区埋没土 脚部1/3	脚 径	(10.0)		赤彩/B/	脚部内面を除き赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。杯部 内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	135	弥生土器 高杯	3区北東 脚部1/2				赤彩/B/	脚部内面を除き赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	136	弥生土器 高杯	3区北東 脚部3/4	脚 径	9.4		赤彩/B/	脚部内面を除き赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。杯部 内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	137	弥生土器 高杯	3区北東 脚部2/3	脚 径	10.6		赤彩/B/	脚部内面を除き赤彩。外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	138	弥生土器 高杯	3区埋没土 脚部1/2	脚 径	(9.0)		赤彩/B/	外面赤彩、縦磨き。内面横磨き。内外面やや風化。	樽式	
第29図 PL.18	139	弥生土器 高杯	3区埋没土 脚部3/4	脚 径	8.4		赤彩/B/	外面赤彩、縦磨き。内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	140	弥生土器 高杯	3区埋没土 脚部2/3	脚 径	4.2		赤彩/B/	外面赤彩、縦磨き。内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	141	弥生土器 蓋	3区埋没土 摘み部完存	摘 径	3.9		褐色/B/	外面縦磨き。内面に篋押さえ痕。	樽式?	
第29図 PL.18	142	弥生土器 蓋	3区埋没土 摘み部完存	摘 径	5.1		鈍い黄褐色/A/	外面縦磨き、内面横磨き。	樽式	
第29図 PL.18	143	弥生土器 不明	3区埋没土 破片				鈍い黄褐色/B/	焼成前の透かし孔が左上にある。外面赤彩、横・縦ハケ目 後撫で。内面荒い横磨き。	弥生後期	
第29図 PL.18	144	土師器 杯	1区埋没土 1/4	口	13.3	高	4.6	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。内面はナデの上に斜横位のヘラ磨き。	
第29図 PL.18	145	土師器 杯	1区埋没土 1/2	口	10.8			細砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面は摩滅。
第29図 PL.18	146	土師器 杯	1区4号住居埋没 土 3/4	口	14.9	高	4.8	粗砂・細砂粒・白色 鉱物粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。体部から底部外面は手持ちヘラ削り。内 面は口縁部に放射状の、底部に螺旋を意識しているが乱れ たヘラ磨き。	器面に炭素吸 着。二次被熱 を受けている か。
第30図 PL.18	147	剥片石器 石鏃	2区北寄り 3/4	長 幅	(1.8) 1.4	厚 重	0.4 0.7	チャート	先端部欠損。裏面先端に縦方向の槌状剥離が見られ、衝撃 剥離痕の可能性ある。	凹基有茎鏃
第30図 PL.18	148	剥片石器 石鏃	2区埋没土 3/4	長 幅	(2.7) (1.4)	厚 重	0.5 1.2	チャート	左返し部を欠損。先端部に槌状剥離が認められ、衝撃剥離 の可能性ある。	
第30図 PL.18	149	剥片石器 スクレイ パー	2区北寄り 完形	長 幅	5.2 3.9	厚 重	2.3 40.3	黒曜石	板状の原石に二次加工を施し、急斜度の刃部を作出。	
第30図 PL.18	150	剥片石器 スクレイ パー?	3区埋没土 破片	長 幅	(7.6) (4.1)	厚 重	1.8 63.0	変質安山岩	左側面に摩滅を有する。右側面は折れ面。打製石斧の可能 性もある。	
第30図 PL.18	151	剥片石器 スクレイ パー	3区埋没土 完形	長 幅	10.0 11.4	厚 重	1.5 241.9	変質安山岩	大形板状剥片を素材とし、縁辺に二次加工を施す。正面中 央部に平滑面を有する。	
第30図 PL.18	152	剥片石器 スクレイ パー	3区埋没土 完形	長 幅	8.2 9.0	厚 重	1.8 126.3	黒色頁岩	大形の横長剥片を素材とし、周縁に二次加工を施す。縁辺 の摩滅は少ない。上部は折れ面だが、折れ面を打面に腹面 側に加工を施す。	
第30図 PL.18	153	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 完形	長 幅	9.9 4.4	厚 重	2.5 118.6	黒色頁岩	刃部を中心に広く摩滅が認められる。右側面節理面。	
第30図 PL.19	154	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 破片	長 幅	(6.3) 7.0	厚 重	2.0 107.7	緑色片岩	頭部のみ残存。	
第30図 PL.19	155	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 1/2	長 幅	(6.5) 6.3	厚 重	1.3 66.7	頁岩	上半部欠損。両面周辺に二次加工を施す。	
第30図 PL.19	156	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 完形	長 幅	6.9 4.1	厚 重	1.5 46.4	細粒輝石安山岩	横長剥片を素材に縁辺に二次加工を施す。上面および右側 面は折れ面だが、二次加工が折れ面を切っている。	
第30図 PL.19	157	剥片石器 打製石斧	埋没土 破片	長 幅	(7.9) 4.9	厚 重	2.0 70.1	変質安山岩	下端は折れの後も使用し縁辺が摩滅。縦方向の線状痕を伴 う。左側面でツブレが見られる。上端欠損。	
第30図 PL.19	158	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 1/2	長 幅	(11.1) 9.0	厚 重	2.7 347.9	変質安山岩	下部欠損。節理が多い大形板状剥片を素材とする。両側縁 の摩滅顕著。	
第31図 PL.19	159	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 ほぼ完形	長 幅	9.7 (6.2)	厚 重	2.9 166.7	変質安山岩	正面全面と裏面周縁に二次加工を施す。左側縁抉り部摩滅。 裏面に大きく自然面を残す。	
第31図 PL.19	160	剥片石器 打製石斧	2区埋没土 完形	長 幅	13.6 8.8	厚 重	2.7 363.5	変質安山岩	大形の板状剥片を素材とする。平面形は左右非対称の撥形 を呈し、刃部周辺に摩滅が認められる。	
第31図 PL.19	161	剥片石器 打製石斧	3区東 3/4	長 幅	(13.4) 8.6	厚 重	3.2 388.9	変質安山岩	左右非対称の平面形で、刃部周辺に摩滅が認められる。上 端折れ。	
第31図 PL.19	162	剥片石器 石核	3区埋没土 完形	長 幅	16.3 8.4	厚 重	5.3 812.4	ひん岩	表裏面に剥離痕を有するため石核とした。	
第31図 PL.19	163	剥片石器 打製石斧	3区埋没土 完形	長 幅	17.1 10.2	厚 重	3.0 575.2	変質安山岩	大形の板状剥片素材。平面形は左右非対称。下端は折れ面 で、部分的に摩滅している。	
第31図 PL.19	164	剥片石器 石核	3区埋没土 完形	長 幅	3.6 3.9	厚 重	2.0 28.2	赤碧玉	小形。平坦部を打面に剥離している。節理が多い石質。	

第4章 検出遺構と出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm・g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第31図 PL.19	165	剥片石器 石核	2区埋没土 完形	長幅 3.3 4.4	厚 2.5 35.1	重量	黒色頁岩	小形。上部平坦面を打面にした剥離痕が多い。	
第31図 PL.19	166	剥片石器 石核	埋没土 完形	長幅 2.4 2.4	厚 1.4 8.5	重量	黒曜石	平坦部を打面とし、打面転移を繰り返しながら剥離。	
第31図 PL.19	167	剥片石器 二次加工痕 ある剥片	埋没土 ほぼ完形	長幅 9.4 (5.5)	厚 2.0 108.9	重量	粗粒輝石安山岩	背面左側辺に二次加工を施す。	
第31図 PL.19	168	剥片石器 二次加工痕 ある剥片	2区埋没土 完形	長幅 11.4 4.8	厚 1.0 33.2	重量	黒色頁岩	薄手剥片の縁辺に二次加工を施す。	
第31図 PL.19	169	剥片石器 二次加工痕 ある剥片	3区埋没土 完形	長幅 6.5 6.1	厚 1.9 67.3	重量	黒色頁岩	上・左側縁に二次加工を施す。裏面に自然面を残す。	
第31図 PL.19	170	剥片石器 二次加工痕 ある剥片	3区埋没土 完形	長幅 5.8 3.6	厚 1.5 28.6	重量	変質安山岩	腹面縁辺に二次加工を施す。	
第31図 PL.19	171	剥片石器 二次加工痕 ある剥片	2区埋没土 完形	長幅 2.3 1.2	厚 0.4 0.8	重量	黒曜石	正面左側辺に平坦な二次加工を施す。右側面および下面は折れ面だが、二次加工が折れ面を切っている。	
第32図 PL.19	172	礫石器 凹石	3区埋没土 完形	長幅 10.1 8.0	厚 4.6 542.0	重量	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫の両面中央部に直径1.5～2cmの浅い凹みを有する。凹みの周囲には平滑面をもつ。	
第32図 PL.19	173	礫石器 凹石	3区埋没土 完形	長幅 10.2 8.8	厚 5.2 725.8	重量	粗粒輝石安山岩	表裏両面の中央部に浅い凹みを有する。上下端部に敲打痕が残る。	
第32図 PL.19	174	礫石器 凹石	2区埋没土 完形	長幅 11.9 5.7	厚 4.0 424.4	重量	粗粒輝石安山岩	正面中央部に浅い凹みを1か所有する。両面中央部には磨面をもつ。	
第32図 PL.19	175	礫石器 磨石	3区埋没土 完形	長幅 7.1 6.9	厚 5.3 390.2	重量	粗粒輝石安山岩	球形に近い円礫。表裏面に磨面を有する。	
第32図 PL.20	176	礫石器 磨石	3区埋没土 略完形	長幅 11.3 10.3	厚 4.0 575.6	重量	粗粒輝石安山岩	正面に平滑面を有する。	
第32図 PL.20	177	礫石器 磨石	3区埋没土 完形	長幅 6.2 6.1	厚 5.4 284.3	重量	粗粒輝石安山岩	球形に近い円礫。表裏面に平滑面を有する。	
第32図 PL.20	178	礫石器 磨石	3区埋没土 完形	長幅 11.6 9.4	厚 5.8 901.7	重量	粗粒輝石安山岩	表裏面中央部に磨面を有し、特に裏面が平滑である。正面中央部と上端小口部に敲打痕が残る。	
第33図 PL.20	179	礫石器 磨石	3区埋没土 完形	長幅 11.8 8.1	厚 2.4 353.4	重量	変質安山岩	扁平な楕円礫素材。正面平坦部に磨面を有する。	
第33図 PL.20	180	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 9.1 4.8	厚 3.8 228.9	重量	粗粒輝石安山岩	礫稜部に敲打痕を有する。	
第33図 PL.20	181	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 14.0 6.0	厚 4.6 613.9	重量	粗粒輝石安山岩	上端小口部と表裏面中央部に敲打痕を有する。表面の敲打部には断面V字状の線状痕を伴う。	
第33図 PL.20	182	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 7.1 6.9	厚 6.2 376.7	重量	粗粒輝石安山岩	球形に近い円礫。敲打によると思われる痕跡を残す。	
第33図 PL.20	183	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 9.5 3.1	厚 2.8 113.3	重量	粗粒輝石安山岩	小形棒状礫。上端小口部と礫稜部に敲打痕を有する。	
第33図 PL.20	184	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 10.8 5.7	厚 4.3 420.5	重量	粗粒輝石安山岩	上端小口部の敲打痕が顕著。表裏面および側面に平滑面を有する。下面に磨面と敲打痕が見られ、下面の稜線は部分的に欠損している。	
第33図 PL.20	185	礫石器 敲石	3区埋没土 完形	長幅 9.5 7.1	厚 6.2 612.7	重量	粗粒輝石安山岩	上端小口部に敲打痕と部分的に摩耗痕を有する。表裏面に平滑面が見られる。	
PL.20	186	原石	3区埋没土 完形	長幅 4.8 5.5	厚 3.6 110.8	重量	石英	小形の転石。	

縄文・弥生土器胎土分類

分類	特徴
A	多量の石英、長石、角閃石、灰色の粗・細砂と少量の礫を含むやや緻密な胎土。
B	Aに類似するが石英、長石、角閃石、灰色の粗・細砂を中量含む緻密な胎土。
C	石英、長石を主体とした細砂を多量に含む緻密な胎土。



第34図 市城塔本遺跡全体図

## 第5章 理化学分析

### 1. はじめに

関東地方北西部に位置する吾妻川流域とその周辺には、榛名山や浅間山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

吾妻川左岸に位置する中之条町市城塔本遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラ層の記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析を行って、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象は2号トレンチである。

### 2. 2号トレンチにおける土層の層序

2号トレンチでは礫層の上位に、下位より亜角～亜円礫を含む暗灰色粘質土（層厚30cm、礫の最大径93mm、縄文時代中期の土器片を含む）、層理が認められる灰色砂層（層厚6cm）、やや色調が暗い灰色泥層（層厚1cm、部分的）、成層したテフラ層（層厚、16.8cm）、亜角～亜円礫を含む灰色泥流堆積物（層厚19cm、礫の最大径178mm）が認められる（第35図）。発掘調査では、灰色泥流堆積物の上面が遺構確認面として設定されている。

その上位には、さらに下位より砂混じり灰色土（層厚9cm、礫の最大径429mm）、亜角～亜円礫混じり暗灰色土（礫の最大径37mm）、褐色軽石を含む灰色粗粒火山灰層（層厚2cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径3mm）、黒色がかった暗灰色土（層厚2cm）、下部が鉄分の影響で橙色に風化した黄灰色軽石層（層厚12cm、軽石の

最大径13mm、石質岩片の最大径5mm）、砂混じり黒灰色土（層厚4cm）、亜角礫混じり暗灰色土（層厚6cm、礫の最大径23mm）、亜角礫混じりで色調がやや暗い灰色土（層厚9cm、礫の最大径28mm）、灰色土（層厚7cm）、亜角礫混じり灰色表土（層厚14cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、明らかにテフラと考えられる下部（層厚3.6cm）と、二次堆積層の可能性のある上部（層厚13.2cm）からなる。下部は、下位より灰黄色砂質細粒火山灰層（層厚2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、灰黄色砂質細粒火山灰層（層厚0.4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、灰黄色砂質細粒火山灰層（層厚1cm）が認められる。その上位には、部分的に最大層厚0.3cmの暗灰色土が層理面に沿って認められるが、これについては植物根あるいは小動物の生活の痕跡の可能性も考えられる。

一方、上部は、下位より白色軽石混じり桃色砂質細粒火山灰層（層厚0.6cm、軽石の最大径13mm、石質岩片の最大径5mm）、亜角礫を少量含む黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚6cm、礫の最大径27mm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.1cm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚2cm）、白色軽石混じり桃色砂質細粒火山灰層（層厚0.5cm、軽石の最大径3mm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚4cm）からなる。この堆積物は、ごく少量ながら礫が含まれていることや、下部との境界付近に埋没土壌の可能性が残される堆積物があることから、現段階では二次堆積物の可能性も否定できない。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

2号トレンチにおいてテフラ層や土層から採取された試料のうち5点を対象に、比較的粗粒のテフラ粒子の量や特徴などを定性的に把握するテフラ検出分析を実施して、試料に含まれるテフラ粒子の特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

## (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第14表に示す。層理が認められる灰色砂層(試料6)には、斑晶に角閃石や斜方輝石をもつ白色軽石(最大径3.0mm)や、その細粒物であるスポンジ状に発泡した白色軽石型ガラスが少量含まれている。成層した火山灰層最下部(試料5)には、試料6と同じような白色軽石(最大径2.8mm)や、その細粒物であるスポンジ状に発泡した白色軽石型ガラスが少量含まれている。さらに、白色軽石混じり桃色砂質細粒火山灰層(試料4)にも、斑晶に角閃石や斜方輝石をもつ白色軽石(最大径7.4mm)が少量、またその細粒物であるスポンジ状に発泡した白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

褐色軽石を含む灰色粗粒火山灰層(試料2)では、斑晶に斜方輝石や単斜輝石を含むいわゆる両輝石型の軽石(最大径13.9mm)が比較的多く、またその細粒物のスポンジ状軽石型ガラスが少量認められる。軽石や軽石型ガラスの色調は、淡灰色、淡褐色、褐色、白色で、褐色の中には光沢をもつものが含まれている。その上位の黄灰色軽石層(試料1)にも、斑晶に斜方輝石や単斜輝石を含む両輝石型の軽石(最大径11.9mm)が多く、またその細粒物のスポンジ状軽石型ガラスが少量認められる。軽石や軽石型ガラスの色調は、淡灰色、淡褐色、褐色、白色で、色調の異なるものが斑状で混じり合ったものが含まれている。

## 4. 考察

2号トレンチの比較的上部で認められた2層の両輝石型降下テフラ層については、層相および斑晶鉱物の組み合わせなどから、下位より順に1108(天仁元)年に浅間山から噴出したと推定されている浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)と、1128(大治3)年に浅間山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ(As-Kk, 早田, 2004など)に同定される。

また、それらの下位の成層したテフラ層は、層相や含まれる重鉱物の組み合わせなどから、6世紀初頭に榛名山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992,

2003)の可能性が高い。ただし、その下位に同じように角閃石や斜方輝石を斑晶にもつ白色の軽石や軽石型ガラスが含まれる洪水性堆積物があり、部分的に間に埋没土壌のような泥層があることや、成層した比較的細粒の火山灰層であることで、吾妻川と沼尾川の合流点より西方での層相に不明な点が多い6世紀中葉に榛名山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)の最上部の成層した火山灰層の可能性も、現段階では完全に否定できない。

なお、上部については、吾妻川のより上流側に位置する東吾妻町植栗中原遺跡で検出されたHr-FAと考えられているテフラ層の、本部分に相当すると考えられる部分には、火山豆石あるいは泥雨の状態以降灰したことを示唆する気泡が多く認められたこと(早田, 未公表資料)から、この上部もHr-FAのうちの降下堆積物の可能性の方が高そうである。

本遺跡や植栗中原遺跡において、Hr-FAが比較的厚く堆積する理由に関しては、Hr-FAの堆積が初夏の比較的限られた期間中に発生していること(原田・能登, 1984, 坂口, 2013など)を考慮すると、本地域の夏期の卓越風である東南東の風(5月～8月, 気象庁ウェブ資料における前橋のデータ)の影響で、火砕流の灰かぐら(ash cloud)などに由来する細粒のテフラ粒子が、火砕流の流下域の北西～西北西に位置する中之条盆地周辺にも比較的厚く降灰したことなどが考えられる。

さらに、6世紀の榛名山の2度の噴火の際には、本遺跡の下流側にある吾妻川と沼尾川の合流点付近で火砕流堆積物が厚く堆積し、一時的に堰止め湖を形成した可能性もあり、本遺跡とその周辺で詳細に湖成堆積物の有無について調査する必要がある。これらの問題に関しては、本遺跡における今後の発掘調査や周辺でのテフラ観察の成果を合わせてさらに検討したい。

## 5. まとめ

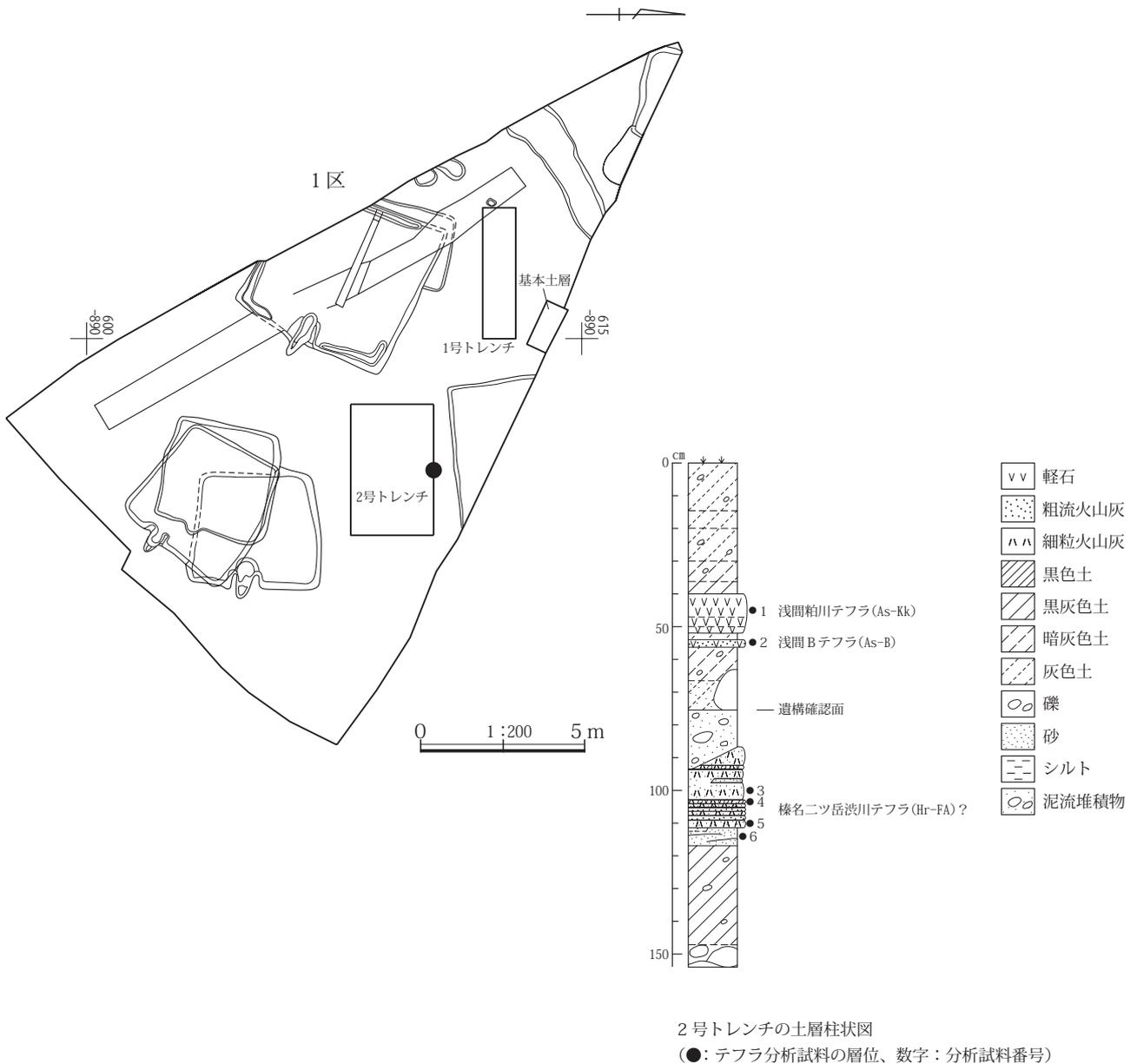
中之条町市城塔本遺跡において地質調査とテフラ検出分析を実施した。その結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)と浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)の堆積を確認できた。また、As-Bの下位には、成層した榛名系テフラ層が認められ、現段階では榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀

初頭)の可能性が高いことを指摘した。とくに、中之条盆地周辺の榛名系テフラについては、まだ不明な点が多いことから、引き続き調査分析を行う必要がある。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.  
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.  
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.14, p.1-45.  
 原田恒弘・能登 健(1984)火山災害の季節. 群馬県立歴史博物館研究紀要, no.5, p.1-21.  
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.  
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.  
 坂口 一(2013)榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)・榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)およびそれらに起因する火山泥流の堆積時間と季節に関する考古学的検討. 第四紀研究, 52, p.97-109.  
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.  
 早田 勉(1990)群馬県の自然と風土. 群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129.  
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.  
 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—. かみつけの里博物館編「1108—浅間火山—中世への胎動」, p.45-56.



第35図 テフラ検出位置と土層柱状図

第14表 市城塔本遺跡におけるテフラ検出分析結果

(最大径の単位はmm)

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			おもな重鉱物
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
2号トレンチ	1	***	淡灰、淡褐、褐、白	11.9	*	pm(sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、cpx
	2	**	淡灰、淡褐、褐、白	13.9	*	pm(sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、cpx
	4	*	白	7.4	**	pm(sp)	白	ho、opx
	5	*	白	2.8	*	pm(sp)	白	ho、opx
	6	*	白	3.0	*	pm(sp)	白	ho、opx

\*\*\*\*：とくに多い \*\*\*：多い \*\*：中程度 \*：少ない

bw：バブル型 pm：軽石型 md：中間型

opx：斜方輝石 cpx：単斜輝石 ho：普通角閃石



写真1 Hr-FAの可能性が高いテフラ層と上位の火山泥流堆積物。テフラ層の直下に砂層が堆積している。

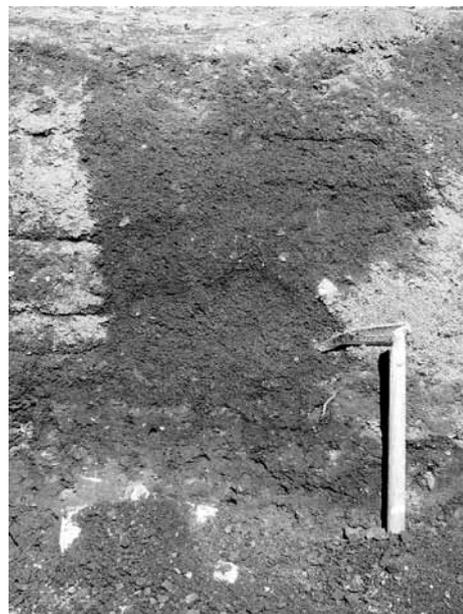


写真3 As-B(レンズ状)と上位の厚いAs-Kk(鎌の刃の部分)。



写真2 Hr-FAの可能性が高いテフラ層と下位の砂層の間の腐植質堆積物。

## 第6章 調査の成果

群馬県内における発掘調査事例は、昭和50年代頃から県内の平野部を中心に関越自動車道・上信越自動車道・北関東自動車道などの高速自動車道や国道・県道のバイパス道の建設、上越新幹線・北陸新幹線の鉄道交通網整備などの大規模公共事業開発の波と共に、その数は急増した。これに比べて吾妻郡など山間部のこれまでの発掘調査例は、当然のことながら開発事業の数や規模に比例して稀少であった。広大な面積から集落を丸々調査することや、長大な距離から生活域・生産域・墓域の位置関係を解明することもなかった。反面、その立地から岩陰・洞窟遺跡や火山災害遺跡、山棲み集落、中世山城などの平野部では検出し得ない遺跡の発見もあった。

今後本格化することが見込まれるハツ場ダムの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、本体以外の付随工事をも含めると膨大な面積となり、現在進められている調査の成果は、地域の歴史解明に少なからず寄与するものと思われる。

本遺跡の発掘調査は、その調査面積や検出遺構の量としては微々たるものではあるが、この地域における発掘調査事例が今まで稀少であったため、限られた河岸段丘面での集落の検出は、地域史の解明にとって大きな成果であると考えられる。

以下に、本遺跡の様相を分析し、調査成果のまとめとしたい。

本遺跡の調査において、中・近世代の遺構の検出はなく、また、出土遺物中にもこの時期の遺物は極めて少ない。一方、土層の堆積状況では、現耕作土下において、軽石を含む砂質土下に部分的ではあるが、大治3(1128)年降下と推定される浅間粕川テフラ(As-Kk)の堆積がみられる。また、その直下には天仁元(1108)年降下と推定される浅間B軽石(As-B)を含む黒褐色砂質土の堆積が見られる。このことから、浅間B軽石堆積後には、これを鋤き混むような畝作などの耕作が行われた可能性はあるものの、その後の浅間粕川テフラの堆積後にはテフラを鋤混んだ痕跡が少ないことから、広域な耕作などの活発な土地利用が行われていなかったものと推察される。

遡って、奈良・平安時代の様相を見ると、9世紀初頭～後半頃と推定される竪穴住居跡3軒の検出と、これに伴う同時代の遺物の出土がみられた。遺構の検出位置は

調査区全体の西端である1区に偏り、東寄りの2・3区には見られない。3区東端部において南北方向の沢状の谷地が検出されており、沢までやや距離をおいた1区検出の住居が集落の東端部に当たるものと推察される。集落の規模については調査範囲が狭域であるため推察は難しいが、遺跡西側70mほどには不動沢が今も流れていることから、この沢が西限、北限は不動沢沿いに現集落と同様に山寄りに先細りとなり250mほど、南は国道が段丘端部を走るため道端部を南限とする扇形の緩斜面が当時の集落域であると推察される。限られた河岸段丘平坦面という制約はあるものの、日照条件や近くを流れる沢の存在など好条件に恵まれた立地であると言える。集落以外では、歴史的環境の項でも述べた「市代牧」に関する遺構・遺物の検出が期待されたが、残念ながら検出されなかった。

古墳～飛鳥時代の様相としては、6世紀中頃～7世紀と推定される竪穴住居跡3軒の検出と、これに伴う同時代の遺物の出土がみられた。遺構の検出位置は奈良・平安時代の様相と近似することから、その集落域についても同様と推察される。また、基本土層の堆積をみると、6世紀初頭と推定される榛名二ッ岳渋川テフラ(Hr-FA)の泥流層とその下位にも氾濫堆積層がみられることから、6世紀中頃以降の集落形成以前には、吾妻川の洪水(氾濫)の影響を大きく受けた時期があったものと推察される。

弥生時代の様相については、調査区内に於いてこの時期の遺構の検出はなく、集落の存在は立証し得なかったものの、3区東端部で検出された沢状の谷地における遺物包含層の調査にて、榛名二ッ岳渋川テフラ(Hr-FA)泥流下の黒色土中より弥生時代中期前葉～後葉、および後期の遺物の出土が見られた。主として後期の在地系土器の出土が多く、また、その器種の構成も多岐にわたり生活の痕跡を強く残すことから、直近の上位および下位段丘面に当該期の集落や生産域の存在が想定される。

縄文時代の様相についても調査区内に於いてこの時期の遺構の検出はなく、遺物包含層よりの中期後半から後期・晩期に至る土器・石器の出土に止まり、その出土量も極めて少ないことから、周辺に活動の痕跡はみとめられるものの、直近に集落の存在を示唆するには至らなかった。

## 報告書抄録

書名ふりがな	いちしろとうもといせき
書名	市城塔本遺跡
副書名	社会資本総合整備(広域連携)(国道353号市城)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第596集
編著者名	新倉明彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20150220
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地-2
遺跡名ふりがな	いちしろとうもといせき
遺跡名	市城塔本遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんなかのじょうまちおおあざいちしろあざとうもと768-1ほか
遺跡所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字市城字塔本768-1他
市町村コード	10-421
遺跡番号	0077
北緯(世界測地系)	36° 34' 9.482"
東経(世界測地系)	138° 53' 6.211"
北緯(日本測地系)	36° 33' 58.274"
東経(日本測地系)	138° 53' 17.66"
調査期間	一次調査 20130901-20130930 二次調査 20140201-20140228
調査面積	1180.36㎡ (一次調査342.26㎡ 二次調査838.10㎡)
調査原因	道路建設
種別	集落/包蔵地
主な時代	弥生/古墳/奈良/平安
遺跡概要	集落-平安-住居3+溝1+土坑4+土師器・須恵器/集落-古墳-住居3+竪穴状遺構1+溝1+ピット4+土師器/包含層-弥生+弥生土器/包含層-縄文+縄文土器+石器+石製品
特記事項	吾妻川左岸段丘上の狭平坦面の沢沿いに営まれた古墳時代後期と平安時代の小規模集落の調査。

# 写真図版



調査区遠景 南より



調査区周辺 西より



1区全景 北西上空より



2区全景 北西より



3区全景 西より



基本土層1 南西より



基本土層2 南東より



基本土層3 南西より



基本土層4 西より



1区1号住居全景 北西より



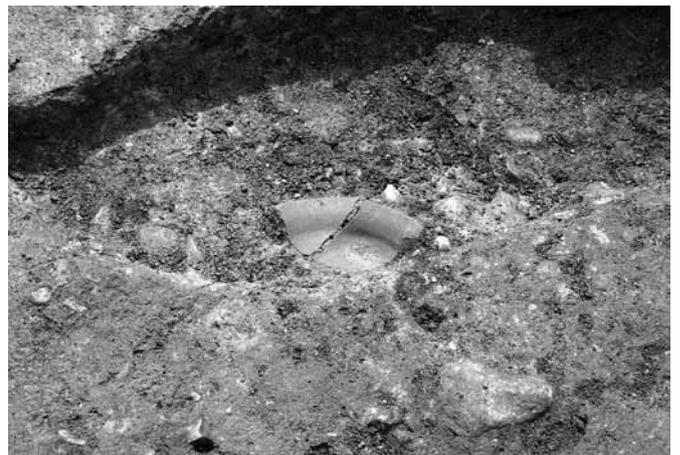
1区1号住居カマド遺物出土状態 北西より



1区1号住居カマド掘り方全景 北西より



1区1号住居西側遺物出土状態 西より



1区1号住居周溝内遺物出土状態 北西より



1区2号住居全景 南西より



1区2号住居断面 南西より



1区3号住居遺物出土状態 南西より



1区3号住居全景 南より



1区3号住居南壁寄り遺物出土状態 南より



1区3号住居南東隅遺物出土状態 南より



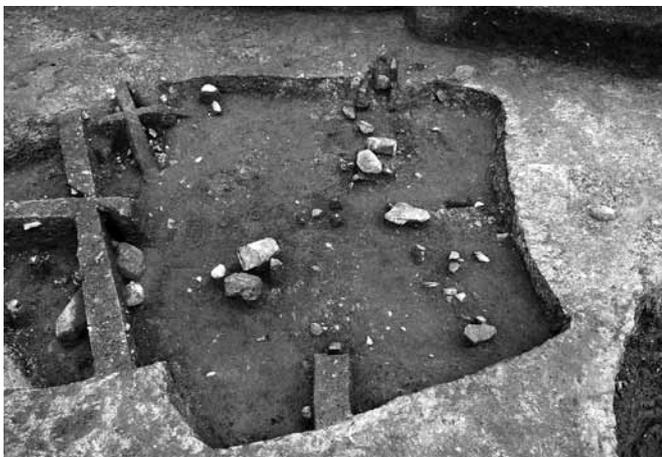
1区3号住居南壁際遺物出土状態 南より



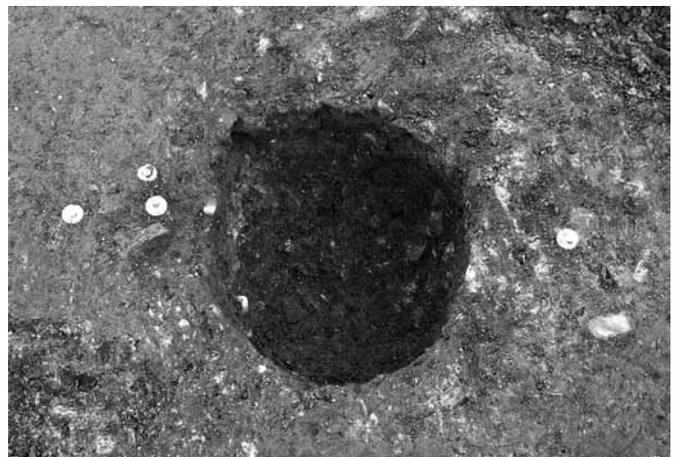
1区3号住居遺物出土状態 南より



1区4号住居全景 北西より



1区4号住居遺物出土状態 北西より



1区4号住居貯蔵穴全景 南より



1区4号住居カマド遺物出土状態 北西より



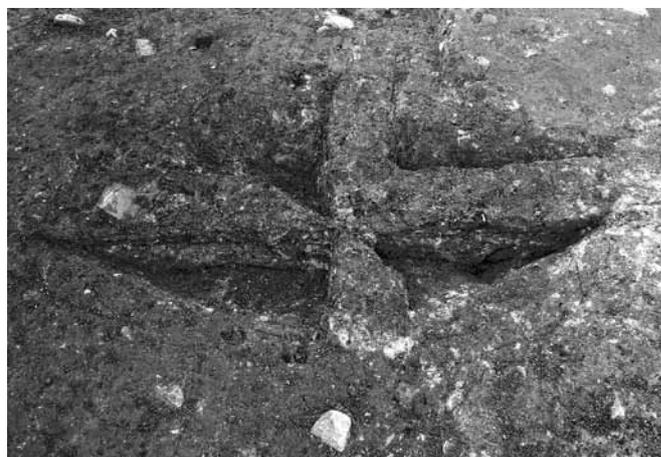
1区4号住居カマド掘り方全景 北西より



1区5号住居全景 西より



1区5号住居カマド全景 西より



1区5号住居カマド掘り方C-C'断面 南より



1区5号住居カマド掘り方D-D'断面 西より



1区5号住居カマド掘り方全景 西より



1区6号住居全景 西より



1区6号住居遺物出土状態 西より



1区6号住居貯蔵穴全景 西より



1区6号住居カマド全景 西より



1区6号住居カマド掘り方全景 西より



1区1号竪穴状遺構全景 北東より



1区1号溝全景 北東より



2区2号溝全景 南東より



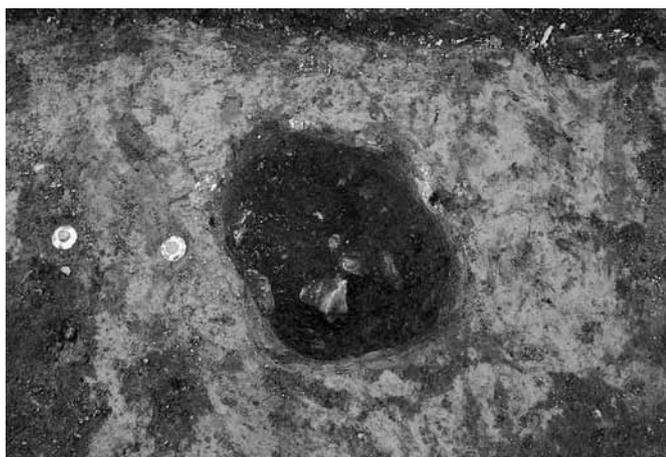
1区1・2号土坑全景 北東より



3区3号土坑全景 東より



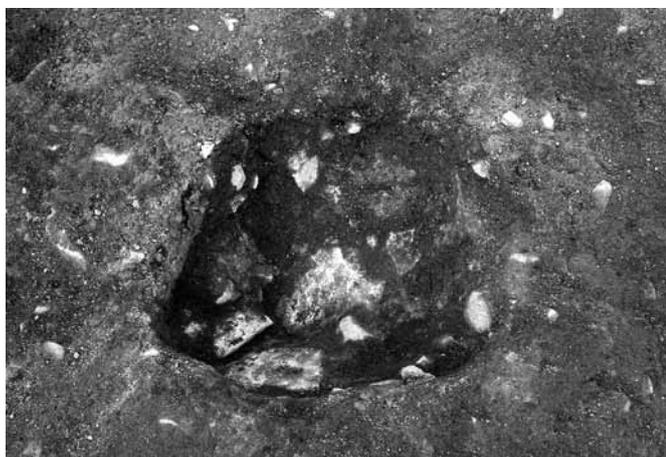
3区4号土坑全景 東より



1区1号ピット全景 南西より



3区2号ピット全景 南西より



3区3号ピット全景 南より



3区4号ピット全景 東より



2区包含層全景 東より



3区包含層全景 西より



1住3



3住2



3住3



1住4



3住4



3住5



3住6



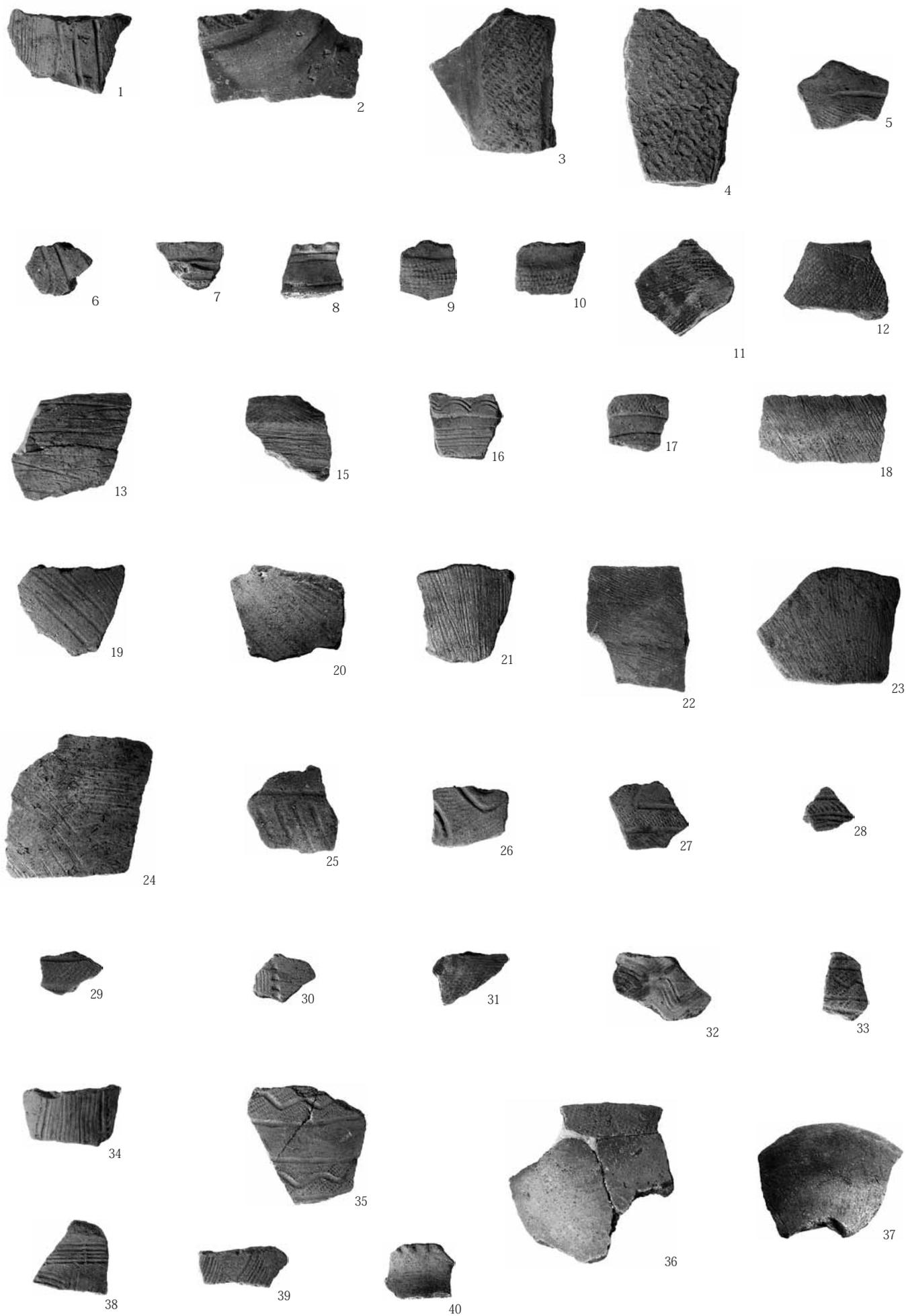
4住1



6住2



4住2





41



42



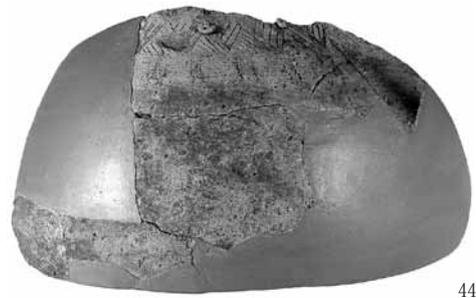
41



43



41



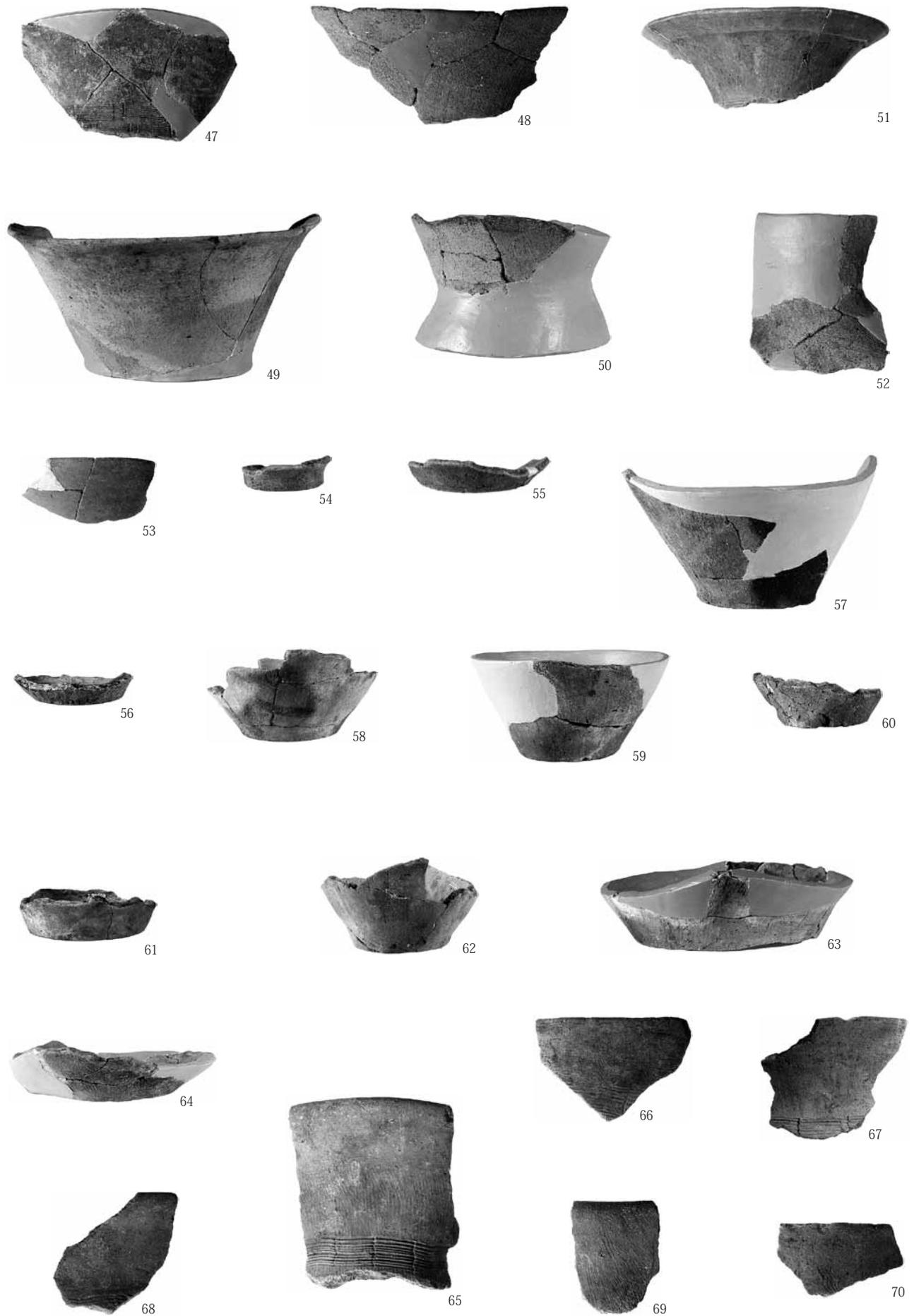
44

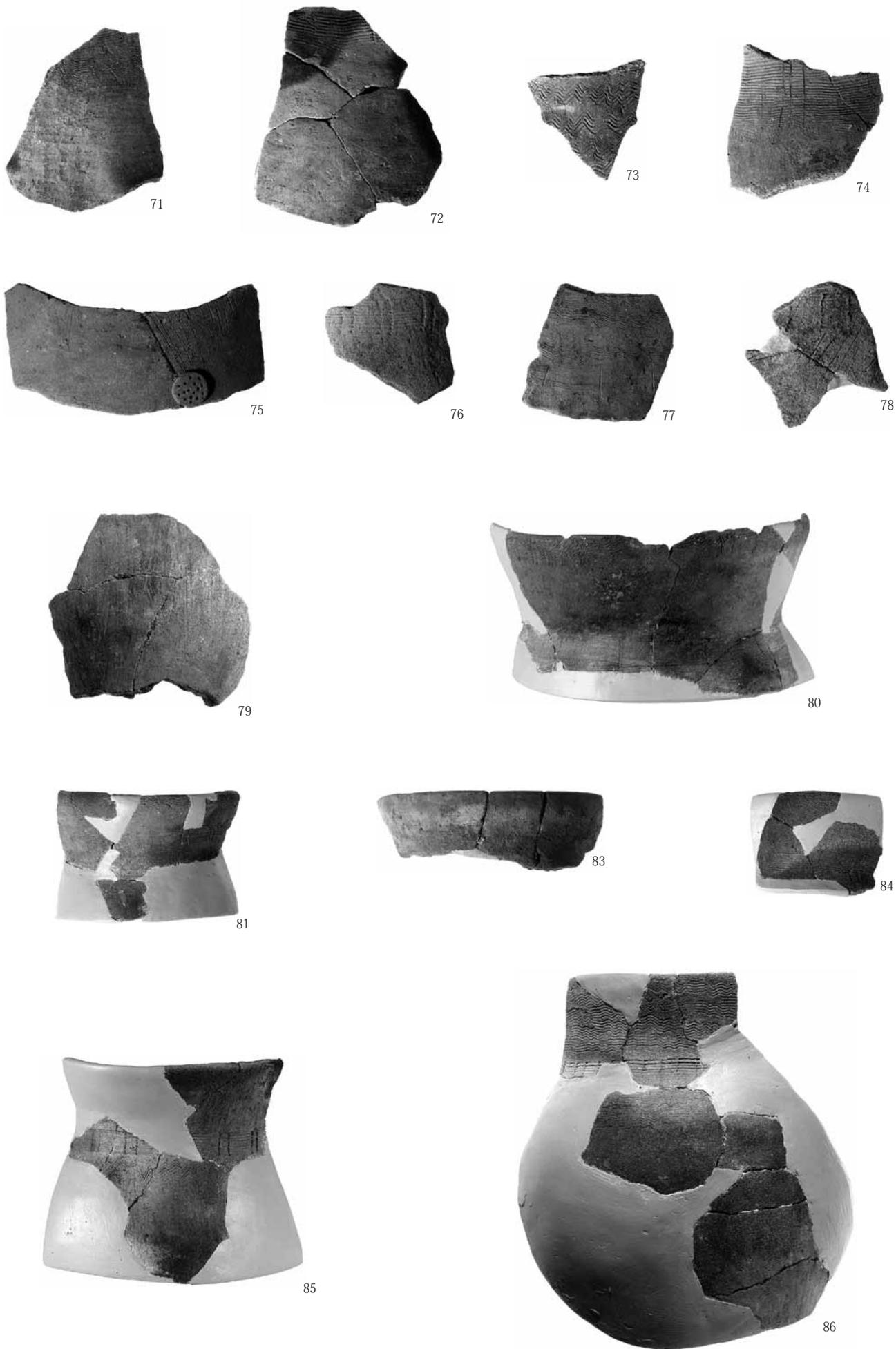


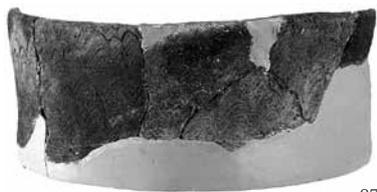
45



46







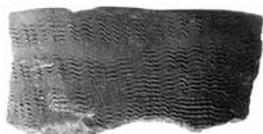
87



89



88



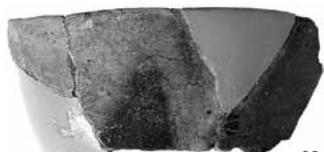
90



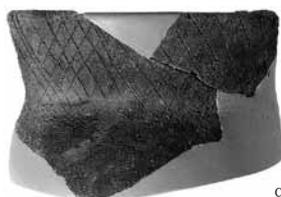
91



92



93



94



95



96



97



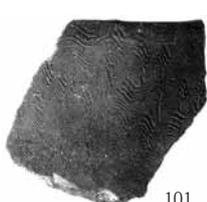
98



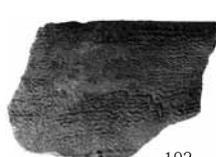
99



100



101



102

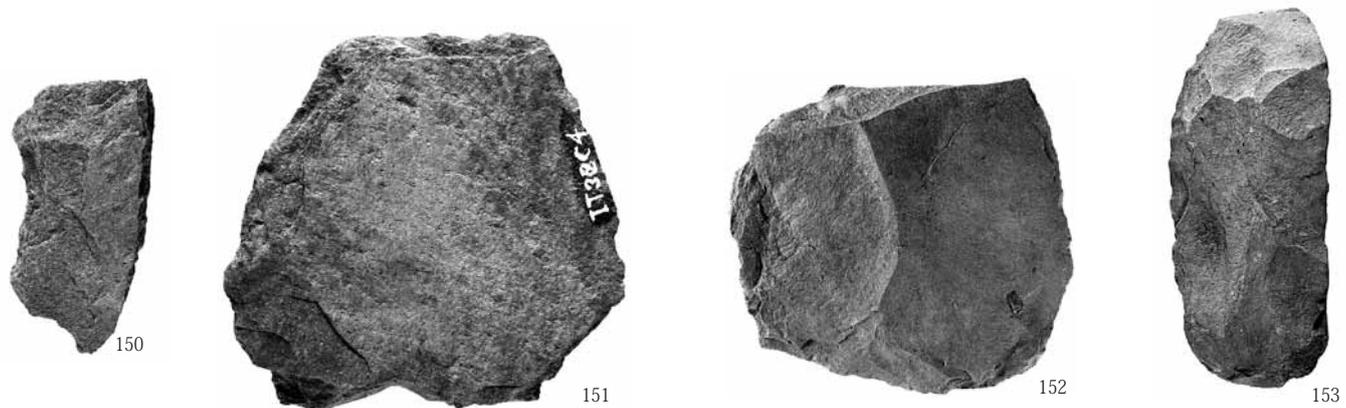
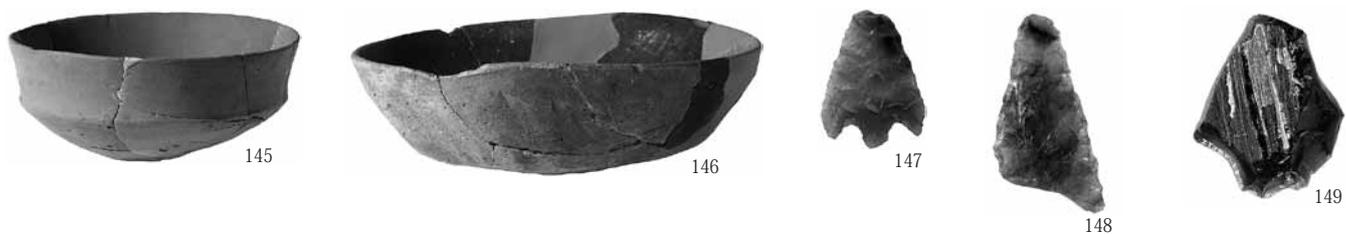


103



104







154



155



156



157



158



159



160



161



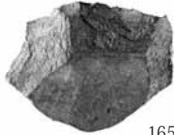
162



163



164



165



166



167



169



170



171



167



168



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第596集

## 市城塔本遺跡

社会資本総合整備(広域連携)(国道353号市城)  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成27(2015)年2月20日 印刷

平成27(2015)年2月20日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

---



